

秋田県文化財調査報告書第318集

桐内B遺跡・桐内D遺跡

—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V—

2001・3

秋田県教育委員会

桐内B遺跡・桐内D遺跡

—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V—

2001・3

秋田県教育委員会

序

豊かな自然に恵まれた秋田県には、我々の先人が築き上げてきた歴史があります。地中に眠る埋蔵文化財もその歴史遺産の一つです。これらの文化財を保護し、未来に伝えていくことは我々の責務です。

このたび洪水調節と利水事業を目的とした森吉山ダムの建設にあたり、秋田県教育委員会は、建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所（当時）の依頼により、この計画区域内の遺跡分布調査や範囲確認調査を実施し、60箇所の遺跡を確認しました。桐内B・D遺跡はこの中の遺跡であり、工事に先立ち平成11年度に発掘調査を実施し、記録保存を図ることにしました。

調査の結果、桐内B遺跡では縄文時代後期の土器・石器が出土し、桐内D遺跡では縄文時代早期から後期の土器、縄文時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡や土器埋設遺構、土坑が検出され、縄文時代の集落が営まれていたことが分かりました。

本報告書はこれらの調査記録をまとめたものです。本書が地域の歴史や文化を研究する資料として多くの方々にご利用いただき、また、文化財に対する理解を深めていただく一助になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査並びに本書の刊行にあたり、御援助、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、森吉町、森吉町教育委員会をはじめ関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺清

例　　言

1. 本報告書は平成11年度に行われた桐内B遺跡・桐内D遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書は森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書としては第5冊目にあたる。
3. 調査結果については、秋田県埋蔵文化財調査報告会資料（平成12年3月）等でも公表してきたが、本報告書の内容がそれらに優先する。
4. 本報告書の作成にあたり、以下の方々から御指導・御助言をいただいた。記して感謝を表する。
(敬称略・五十音順) 荒木隆・藤原妃敏・若林繁 [福島県立博物館]
5. 「桐内D遺跡 第3章 自然科学的分析」の「桐内D遺跡から出土した炭化材の年代と樹種」は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託したものである。
6. 本報告書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行50,000分の1「米内沢」「大葛」、同じく25,000分の1「阿仁前田」「太平湖」、及び建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所作成1,000分の1「森吉山ダム貯水池平面図」である。
7. 本報告書における土層注記中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」(1997年版)によった。
8. 本報告書の執筆は、「はじめに」「遺跡の環境」「桐内D遺跡」を吉田英亮が、「桐内B遺跡」を牧野賢美がそれぞれ分担して執筆し、編集は吉田英亮が行った。

凡　　例

1. 本報告書に収録した遺構実測図の方位は、真北を示す。原点(MA50)における真北と磁北との偏角は、西に $8^{\circ} 10'$ である。
2. 本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は1/40を原則とし、適宜1/20も用いた。ただし、竪穴住居跡のみ1/50・1/60を用いている。
3. 遺物実測図の縮尺は、1/2を原則とした。ただし、大型の土器には1/3の縮尺、小型の石器、土器片には2/3の縮尺というように適宜異なる縮尺を用いた。挿図にはそれぞれスケールを付した。
4. 挿図の遺物実測図には、器種を問わず遺構内・遺構外に分けて通し番号を付した。それらは写真図版中の番号と対応する。
5. 土層注記は、基本層位にローマ数字(I・II・III・・・)、遺構堆積土にはアラビア数字(1・2・3・・・)を用いた。
6. 遺構番号は、その種別を問わず、プラン検出順に01から始まる2桁の連番を付したが、精査の過程において遺構ではないと判断したものは欠番となっている。
7. 遺構・遺物の種類を表す際、下記の略号を用いる。
〔遺構〕 S I ……竪穴住居跡 S R ……土器埋設遺構 S N R ……土器埋設焼土遺構
S K ……土坑 S D ……溝跡 S K P ……柱穴様ピット
〔遺物〕 R P ……土器(片) R Q ……石器及び剥片 S ……礫
8. 遺構実測図中の「●」は土器類、「▲」は石器類を示した。なお、遺物の出土地点は平面分布図と遺構全体を透視した垂直分布図の2種類に示した。
9. 挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。



目 次

序	
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図目次	v
表・図版目次	vi
はじめに	1
調査に至る経過	1
調査要項	5
遺跡の環境	7
遺跡の位置と立地	7
遺跡の歴史的環境	9
桐内B遺跡	
第1章 発掘調査の概要	15
第1節 遺跡の概観	15
第2節 調査の方法	15
1 野外調査	15
2 室内整理	15
第3節 調査経過	16
第2章 調査の記録	19
第1節 基本層位	19
第2節 検出遺構と出土遺物	19
第3節 遺構外出土遺物	19
1 土器	19
2 石器	20
第3章 まとめ	22
桐内D遺跡	
第1章 発掘調査の概要	25
第1節 遺跡の概観	25
第2節 調査方法	26
1 野外調査	26
2 室内整理	26
第3節 調査経過	27
第2章 調査の記録	30
第1節 基本層位	30
第2節 検出遺構と出土遺物	32
1 概要	32
2 遺構と出土遺物	32
第3節 遺構外出土遺物	59
1 土器	59
2 土製品	69
3 石器	70
第3章 自然科学的分析	82
第4章 まとめ	86
報告書抄録	

挿図目次

第1図	森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群	2
第2図	遺跡位置図	7
第3図	桐内A・B・C・D遺跡	8
第4図	地形区分図	8
第5図	周辺の遺跡分布図	11
第6図	桐内B遺跡グリッド設定図・遺跡範囲図	17
第7図	基本土層図・遺構配置図	18
第8図	S R01土器埋設遺構	20
第9図	遺構外出土遺物	21
第10図	遺跡範囲図	25
第11図	グリッド設定図	29
第12図	基本土層図	31
第13図	遺構配置図	33・34
第14図	S I 33堅穴住居跡・複式炉	37
第15図	S I 34堅穴住居跡	38
第16図	S I 34堅穴住居跡複式炉	39
第17図	S I 34堅穴住居跡出土遺物	40
第18図	S R17・S R23土器埋設遺構	44
第19図	S R24土器埋設遺構・S N R 19土器埋設焼土遺構（1）	45
第20図	S N R 19土器埋設焼土遺構（2）・S N R 29土器埋設焼土遺構	46
第21図	S N R 31土器埋設焼土遺構・S K01土坑	47
第22図	S K06・07・08・11土坑	54
第23図	S K12・S K14土坑	55
第24図	S K20土坑・出土遺物（1）	56
第25図	S K20土坑出土遺物（2）・S K25・S K26・S K27・S K28土坑	57
第26図	S K21・S K32土坑	58
第27図	遺構外出土遺物（1）土器	62
第28図	遺構外出土遺物（2）土器	63
第29図	遺構外出土遺物（3）土器	64
第30図	遺構外出土遺物（4）土器	65
第31図	遺構外出土遺物（5）土器	66
第32図	遺構外出土遺物（6）土器	67
第33図	遺構外出土遺物（7）土器	68
第34図	遺構外出土遺物（8）土器	69
第35図	遺構外出土遺物（9）土製品	69
第36図	遺構外出土遺物（10）石器	73
第37図	遺構外出土遺物（11）石器	74
第38図	遺構外出土遺物（12）石器	75
第39図	遺構外出土遺物（13）石器	76
第40図	遺構外出土遺物（14）石器	77
第41図	遺構外出土遺物（15）石器	78
第42図	遺構外出土遺物（16）石器	79
第43図	遺構外出土遺物（17）石器	80
第44図	遺構外出土遺物出土分布図	88

表目次

第1表	森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群	3
第2表	秋田県遺跡地図（県北版）による周辺の遺跡一覧（1）	12
第3表	秋田県遺跡地図（県北版）による周辺の遺跡一覧（2）	13
第4表	遺構外出土石器観察表	81

図版目次

図版1	遺跡遠景（北東→） 作業風景（北→） S R01土器埋設遺構完掘状況（東→）
図版2	S R01埋設土器 遺構外出土遺物
図版3	遺跡遠景（北西→） S I 33堅穴住居跡複式炉完掘状況（北西→）
図版4	S I 34堅穴住居跡完掘状況（南西→） S I 34複式炉完掘状況（北東→） S I 34複式炉土層断面（南東→） S I 34複式炉周辺遺物出土状況（南西→） S I 34複式炉石軋部被熱痕確認状況（南東→）
図版5	S I 33堅穴住居跡完掘状況（南東→） S R17土器埋設遺構完掘状況（南→） S R23土器埋設確認状況（北西→） S R23土器埋設遺構完掘状況（北西→） S R24土器埋設確認状況（南東→） S R24土器埋設遺構土層断面（北西→） S N R19土器埋設焼土遺構土層断面（北東→） S N R19土器埋設焼土遺構完掘状況（南東→）
図版6	S N R29土器埋設焼土遺構確認状況（西→） S N R29土器埋設焼土遺構完掘状況（西→） S K01土坑完掘状況（南東→） S K06土坑完掘状況（西→） S K07土坑土層断面（南西→） S K07土坑完掘状況（南西→） S K08土坑完掘状況（南東→） S K11土坑完掘状況（南東→）
図版7	S K12土坑完掘状況（南西→） S K14土坑完掘状況（南東→） S K14土坑遺物出土状況（南東→） S K20土坑土層断面（西→） S K20土坑完掘状況（西→） S K21土坑土層断面（西→） S K27土坑完掘状況（南西→） S K28土坑完掘状況（西→）
図版8	S I 33複式炉埋設土器 S I 34複式炉埋設土器 S I 34堅穴住居跡出土遺物 S R17埋設土器 S R23埋設土器
図版9	S R24埋設土器 S N R19埋設土器 S N R29埋設土器 S N R31埋設土器
図版10	S K07・S K25・S K28土坑出土遺物 S K14土坑出土遺物 S K20土坑出土遺物 S K21土坑出土遺物
図版11	遺構外出土遺物（1）
図版12	遺構外出土遺物（2）
図版13	遺構外出土遺物（3）
図版14	遺構外出土遺物（4）
図版15	遺構外出土遺物（5）
図版16	炭化材樹種顕微鏡写真（1）
図版17	炭化材樹種顕微鏡写真（2）
図版18	炭化材樹種顕微鏡写真（3）

はじめに

調査に至る経過

岩手県二戸郡安代町田山に源を発し、秋田県北部を東から西に流れる米代川は、31の支川を合わせながら日本海に注ぐ河川である。米代川が貫流する花輪・大館・鷹巣の各盆地地下流付近は、山が迫っていて川幅も狭い。中でも、鷹巣盆地下流の七座神社付近から荷上場にかけての地域は、蛇行が激しいえ急激に川幅が狭まる。さらに、北流する阿仁川と南流する藤琴川が合流するため、しばしば洪水が起こっている。

1972（昭和47）年7月3日、北九州で始まった梅雨前線による集中豪雨は、日本列島を縦断し全国各地に被害をもたらした。秋田県では、県中央部から北部を中心に集中豪雨が襲い、全壊家屋73戸・半壊78戸・床上浸水3,379戸・床下浸水4,160戸の他、農地・農業施設1,779カ所・土木関係1,863カ所などあわせて256億2,408万円余りの被害を被った。秋田県に天災融資法と激甚灾害法とが適用され、能代市・二ツ井町・森吉町・合川町・西仙北町・角館町には災害救助法が適用された。この豪雨時に小阿仁川上流の萩形ダムの他、藤琴川上流の素波里ダム、小又川上流の森吉ダムもダム本体を守るために放水したため、三つの鉄砲水のような流れが米代川で一緒になり、下流の二ツ井町・能代市を襲った。米代川の堤防が數カ所にわたって決壊して氾濫し、特に能代市中川原地区の被害は甚大であった。翌年、大洪水を機に「米代川工事実施基本計画」の見直しが行われ、二ツ井基準地点の基本高水流量を9,200m³/sとし、このうち1,000m³/sは上流ダム群によって調節することになった。こうした上流ダム群の一つとして阿仁川支流の小又川に建設されることになったのが阿仁川ダムである。後に森吉山ダムと名称が変更されたこのダムは、洪水調節の他、灌漑用水の供給、水道水の供給、水力発電などを目的とする多目的ダムである。建設地点における計画高水流量2,300m³/sの内、2,200m³/sの洪水調節作用を持ち、二ツ井基準地点での維持流量は45.0m³/s。堤高90.0m、湛水面積3.2km²、総事業費は当初予算で約910億円の中央コア型ロックフィルダムである。

森吉山ダム建設にともない、事業対象区域内の住民の移転が進む中、事業主体である建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所は、文化財保護法に基づき、秋田県教育委員会に対し貯水池流域面積248.0km²の遺跡分布調査を依頼した。秋田県教育委員会は、遺跡分布調査を1992（平成4）・1993（平成5）年の2カ年にわたりて実施し、その結果、棚内遺跡（縄文時代前期・後期）、二重鳥遺跡（縄文時代後期）、塗下遺跡（縄文時代後期）、棚岱遺跡（縄文時代後期・晩期）、碎渕遺跡（縄文時代）、丹瀬口遺跡（縄文時代後期）の新発見の遺跡6カ所が開発区域に係ることを確認した。この結果に基づき、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は協議を重ね、1991（平成3）年発行の『秋田県遺跡地図（県北版）』に記された「周知の遺跡」、及び遺跡分布調査で発見された「新発見の遺跡」の双方についての範囲確認調査を秋田県教育委員会が実施し、遺構・遺物の広がりを把握していくことを申し合わせた。

秋田県教育委員会では、1994（平成6）年度より範囲確認調査を実施し、1998（平成10）年についての遺跡の範囲確認調査を終了した。各年度に範囲確認調査を行った遺跡は以下のとおりである。

はじめに

1994（平成6）年度

桐内C（桐内I）遺跡、桐内D（桐内II）遺跡、桐内沢遺跡

1995（平成7）年度

日廻岱A遺跡、日廻岱B遺跡、漆下遺跡、上八岱A遺跡、上八岱B遺跡、二重鳥A遺跡、二重鳥B遺跡、二重鳥C遺跡、二重鳥D遺跡、二重鳥E遺跡、二重鳥F遺跡、二重鳥G遺跡、二重鳥H遺跡、水上遺跡、天津場A遺跡、天津場B遺跡、天津場C遺跡、ネネム沢A遺跡、ネネム沢B遺跡、ネネム沢C遺跡、森吉家ノ前A遺跡、森吉家ノ前B遺跡、森吉家ノ前C遺跡、森吉A遺跡、森吉B遺跡

1996（平成8）年度

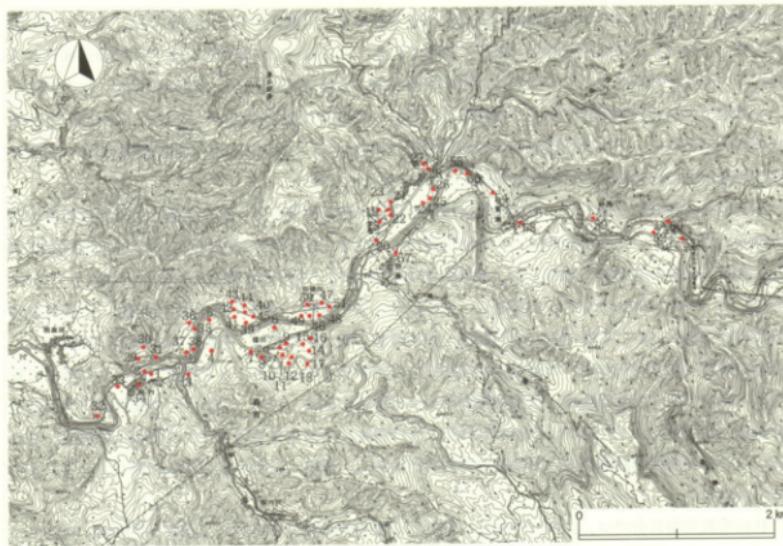
上悪戸A遺跡、上悪戸B遺跡、上悪戸C遺跡、上悪戸D遺跡、桐内A遺跡、桐内B遺跡、姫ヶ岱A遺跡、姫ヶ岱B遺跡、姫ヶ岱C遺跡、姫ヶ岱D遺跡、橋場岱A遺跡、橋場岱B遺跡、橋場岱C遺跡、橋場岱D遺跡、橋場岱E遺跡、橋場岱F遺跡、橋場岱G遺跡、向様田A遺跡、向様田B遺跡、向様田C遺跡、向様田D遺跡、向様田E遺跡、向様田F遺跡

1997（平成9）年度

深渡遺跡、深渡A遺跡、鶩ノ瀬遺跡、地藏岱遺跡、地藏岱A遺跡、惣瀬遺跡

1998（平成10）年度

鶩ノ瀬遺跡



第1図 森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

番号	遺跡名	遺跡所在地	時期
1	森内C	森吉町森吉字横内家/上三坊11番	縄文前~後期
2	森内D	森吉町森吉字横内家/上川反19番	縄文後期
3	横内E	森吉町森吉字横内沢下戸103	縄文前~後期
4	日棚岱A	森吉町森吉字日棚岱65,63-1号	縄文前~後期
5	日棚岱B	森吉町森吉字日棚岱68,88,89,90,91	縄文前~後期
6	道下	森吉町森吉字道下2-1,4,5,6,7,8,14-2,37番	縄文前~後期
7	上八岱A	森吉町森吉字上八岱102,104,105,106番	縄文後期
8	上八岱B	森吉町森吉字上八岱70,71,72	縄文後期
9	二重鳥A	森吉町森吉字二重鳥31-1,32-2,47-1,106-1,134,135	縄文後期
10	二重鳥B	森吉町森吉字二重鳥11,99,100番	縄文前~後期
11	二重鳥C	森吉町森吉字二重鳥93,94,95,96,97,110	縄文後期
12	二重鳥D	森吉町森吉字二重鳥39	縄文後期
13	二重鳥E	森吉町森吉字二重鳥55,66-1,69,70-2,70-3	縄文前~後・後期
14	二重鳥F	森吉町森吉字二重鳥124-1	縄文時代
15	二重鳥G	森吉町森吉字二重鳥60,81-1,84-1	縄文後期
16	二重鳥H	森吉町森吉字二重鳥6,14,15	縄文後期
17	水上	森吉町森吉字水上41-2,43-1,44,113-6番	縄文中・後期
18	天津塙A	森吉町森吉字天津塙15-3	縄文後期・古代
19	天津塙B	森吉町森吉字天津塙16-1	縄文後期
20	天津塙C	森吉町森吉字天津塙7-1,87-3,88-2	縄文中・後期
21	辛半ム沢A	森吉町森吉字辛半ム沢27,28,29,30,31,32,33,34,35	旧石器・縄文後期・古代
22	辛半ム沢B	森吉町森吉字辛半ム沢17,19,22	縄文後期
23	辛半ム沢C	森吉町森吉字辛半ム沢6-1	縄文後期
24	森吉家/前A	森吉町森吉字森吉家/前50,145,174,175,176,177,178	縄文後期・古代
25	森吉家/前B	森吉町森吉字森吉家/前138,139,140,141,142	縄文中~後期・室町時代
26	森吉家/前C	森吉町森吉字森吉家/前101-1,103,114,115,116	中世
27	森吉A	森吉町森吉字森吉95	縄文後期・古代
28	森吉B	森吉町森吉字森吉69	縄文後期
29	上恩戸A	森吉町樺森田字上恩戸4-19,10-1,11-1-2,12-1-4,13,14-1,16-1-2番	縄文後期
30	上恩戸B	森吉町樺森田字上恩戸5-12	弥生後期

番号	遺跡名	遺跡所在地	時期
31	上恩戸C	森吉町森吉字上恩戸7,8,9	縄文後期
32	上恩戸D	森吉町森吉字上恩戸34-7,34-29-41,34-60-61-67-54番	縄文後・晚唐
33	樺内A	森吉町森吉字樺内抜田5-1,6-1-3番	縄文後期
34	樺内B	森吉町森吉字東/下16,1号樺内33-1,34-37番	縄文後期
35	船ヶ岱A	森吉町樺森田字船ヶ岱8,9-1,10-1	縄文前原
36	船ヶ岱B	森吉町樺森田字船ヶ岱14-10-12	縄文時代
37	船ヶ岱C	森吉町樺森田字船ヶ岱12-2-11,15番	縄文中期
38	船ヶ岱D	森吉町樺森田字船ヶ岱12-31番	縄文中期
39	樺場岱A	森吉町森吉字樺場岱48,49,50-1番	縄文中期
40	樺場岱B	森吉町森吉字樺場岱69,78番	縄文・後期
41	樺場岱C	森吉町森吉字樺場岱42,62番	縄文後・晚唐
42	樺場岱D	森吉町森吉字樺場岱110-1	縄文時代
43	樺場岱E	森吉町森吉字樺場岱10番	縄文時代
44	樺場岱F	森吉町森吉字樺場岱101,103,104	縄文後期
45	樺場岱G	森吉町森吉字樺場岱1-1,39,40,46	縄文後期
46	向羅田A	森吉町森吉字向羅田家/下毛8,9-1-2,11,16,81-1,82,83,84	縄文後期
47	向羅田B	森吉町森吉字向羅田67-1-2,70,71-1,72,74,75番	縄文後・晚期
48	向羅田C	森吉町森吉字向羅田家/下毛76,77,78,79	縄文後・晚期
49	向羅田D	森吉町森吉字向羅田家/下毛14-1-17,18,19-1,20	縄文後期
50	向羅田E	森吉町森吉字向羅田家/下毛36,37,39,63,64	縄文前期
51	向羅田F	森吉町森吉字向羅田家/下毛58,59番	縄文後期
52	泥炭	森吉町森吉字泥炭104-1番	縄文前~後期
53	深波A	森吉町森吉字深波29番	縄文後・晚期
54	磐ノ瀬	森吉町森吉字磐瀬20番	縄文後期
55	地蔵岱	森吉町森吉字地蔵岱74番	縄文前~後期・平安時代
56	地蔵岱A	森吉町森吉字地蔵岱124番	縄文中・後期
57	惣瀬	森吉町惣吉字惣瀬85番	縄文後・平安時代
58	樋岱	森吉町惣吉字樋岱74番	縄文後・朝期
59	躑躅	森吉町惣吉字躑躅124番	縄文後期
60	丹瀬口	森吉町森吉字丹瀬口2-1番	縄文後期

第1表 森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡群

森吉山ダム関連の工事は、1994（平成6）年の下流工事用道路から開始され、翌年には事業地内の材料運搬路に移った。一方、第12回日本ジャンボリーが1998（平成10）年に森吉山麓において開催されることとなった。ジャンボリーの開催には総合管理施設、飲料水供給施設、総合駐車場等の整備と人員の大規模な輸送を行う道路の整備が必要となり、1995（平成7）年に日廻岱A遺跡・碎渕遺跡、1996（平成8）年には上悪戸D遺跡・深渡遺跡・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前B遺跡・天津場C遺跡のアクセス道路線部を森吉町教育委員会が調査した。

森吉山ダム建設事業に係る発掘調査については、範囲確認調査を行った遺跡の中から、記録保存の必要なものについて、工事工程に合わせて発掘調査を実施する合意が森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。

桐内B遺跡、桐内D遺跡の発掘調査は、1999（平成11）年5月18日から同時に調査を開始し、桐内B遺跡は6月18日まで遺跡面積にあたる1,450m²を、桐内D遺跡は9月30日まで遺跡面積にあたる11,000m²をそれぞれ調査した。

参考文献

- 無明舎『秋田県昭和史』 無明舎 1989（平成元）年
- 秋田魁新報社『ダムに沈む「むら」森吉町森吉』 モリトビア選書1
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993（平成4）年
- 川村公一『子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ』 モリトビア選書2
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993（平成5）年
- 森吉町教育委員会『平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書』～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～
1996（平成8）年
- 森吉町教育委員会『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書』～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～
1997（平成9）年
- 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第251集 1994（平成6）年
- 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第259集 1995（平成7）年
- 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第267集 1996（平成8）年
- 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集 1997（平成9）年
- 秋田県教育委員会『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』
秋田県文化財調査報告書第286集 1999（平成11）年
- 秋田県教育委員会『廻ヶ岱C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』
秋田県文化財調査報告書第287集 1999（平成11）年
- 秋田県教育委員会『桐内C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』
秋田県文化財調査報告書第299集 2000（平成12）年
- 秋田県教育委員会『廻ヶ岱D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』
秋田県文化財調査報告書第300集 2000（平成12）年

調査要項

桐内B遺跡

遺 跡 名 桐内B遺跡（きりないBいせき）（略号2KNB）
所 在 地 秋田県北秋田郡森吉町森吉字桐内33-1外
調 査 期 間 1999（平成11）年5月18日～6月18日
調 査 目 的 森吉山ダム建設事業に係る発掘調査
調 査 面 積 1,450m²
調 査 主 体 者 秋田県教育委員会
調 査 担 当 者 牧野 賢美（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室学芸主事）
本多 高生（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室非常勤職員）
総務担当者 佐藤 悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課長）
菅原 晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
（現、秋田県立横手工業高等学校事務長補佐）
荒井 信行（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室主査）
（現、秋田県立二ツ井高等学校事務長補佐）
嶋田 敏輝（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室主査）
佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
八文字 隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所
（現、国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所）
森吉町
森吉町教育委員会

桐内D遺跡

遺 跡 名 桐内D遺跡（きりないDいせき）（略号2KND）

所 在 地 秋田県北秋田郡森吉町森吉字桐内家ノ上川反19外

調査期間 1999（平成11）年5月18日～9月30日

調査目的 森吉山ダム建設事業に係る発掘調査

調査面積 11,000m²

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 利部 修（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室学芸主事）

（現、同調査課第3科長）

吉田 英亮（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室学芸主事）

高橋 俊幸（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室非常勤職員）

松岡 忠恭（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室非常勤職員）

猪股 伸彦（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室非常勤職員）

総務担当者 佐藤 悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課長）

菅原 晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）

（現、秋田県立横手工業高等学校事務長補佐）

荒井 信行（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室主査）

（現、秋田県立二ツ井高等学校事務長補佐）

鶴田 敏輝（秋田県埋蔵文化財センター調査課秋田北分室主査）

佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）

八文字 隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）

調査協力機関 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所

（現、国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所）

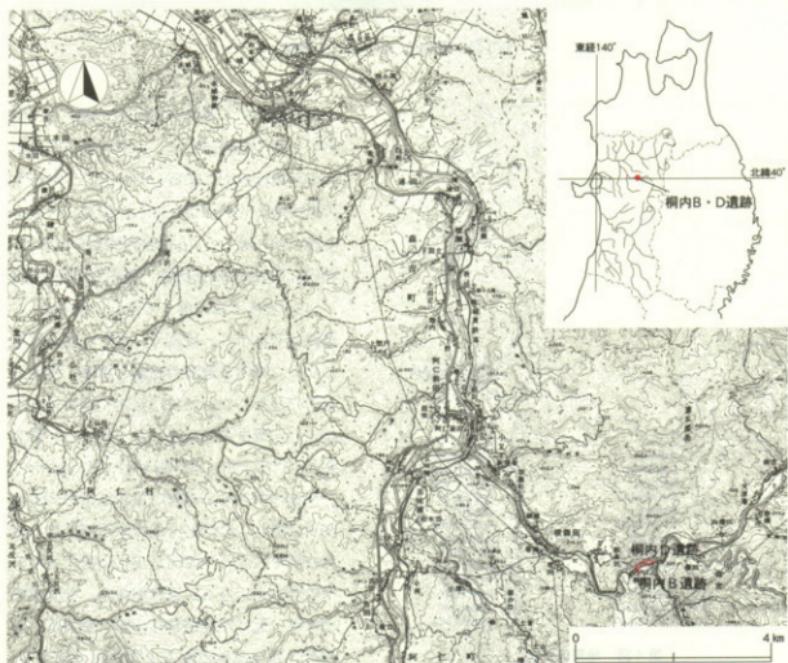
森吉町

森吉町教育委員会

遺跡の環境

遺跡の位置と立地

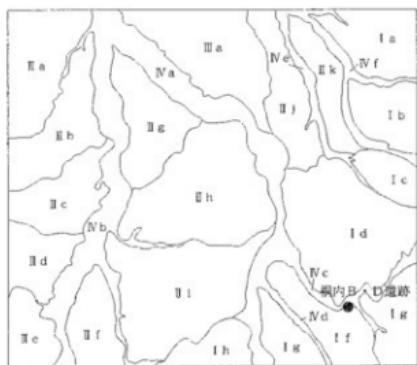
桐内B遺跡・桐内D遺跡の所在する桐内地区は、森吉山の北の麓を西に流れる小又川の左岸に位置する。森吉町北部の米内沢地区にある森吉町役場より南東約11km、秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅から南東約5kmの距離にあり、桐内B遺跡は、北緯 $40^{\circ} 1' 53''$ 、東経 $140^{\circ} 27' 36''$ に、桐内D遺跡は北緯 $40^{\circ} 1' 57''$ 、東経 $140^{\circ} 27' 38''$ にそれぞれ位置している。西流する小又川沿いに県道比内森吉線を東上すると、小又川と桐内沢川の合流点にかかる桐内橋にいたる。その桐内橋より手前が桐内地区であり4つの遺跡がある。平成6年度の範囲確認調査では、県道の南側を桐内I遺跡とし、北側を桐内II遺跡とした。その後、平成8年度の範囲確認調査で桐内C遺跡の西側約600m地点で桐内A遺跡、西側約300m地点で桐内B遺跡が確認され、桐内I遺跡が桐内C遺跡に、桐内II遺跡が桐内D遺跡に変更された。



第2図 遺跡位置図



第3図 桐内A・B・C・D遺跡



I 山 地	I a 大沢山地	II f 不動山丘陵地
I b 鹿森山山地	II g 三田丘陵地	
I c 松沢山地	II h 大森山丘陵地	
I d 原五郎岳山地	III i 前波丘陵地	
I e 高畠山地	III j 桐丘山地	
I f 大久保山山地	III k 七日市丘陵地	
I g 六両山山地	IV a 大野台台地	
I h 篠ヶ岳山地	IV b 小阿仁川低地	
II 丘陵地	IV c 小又川盆地	
II a 長被山丘陵地	IV d 小様川低地	
II b 三里丘陵地	IV e 品原川低地	
II c 七谷山丘陵地	IV f 小猿部川低地	
II d 友倉山丘陵地		
II e 南沢丘陵地		

第4図 地形区分図

桐内地区の4遺跡（桐内A・桐内B・桐内C・桐内D遺跡）は、いずれも小又川左岸の河成段丘上に位置している。これは大久保山地が北西に張り出した山裾につながる段丘面にあたる。各遺跡の標高をみると、桐内A遺跡が116m前後、桐内D遺跡が115～118m程度でほぼ同じであり、桐内B・C遺跡はそれより一段高く、125～128m程度となる。桐内A遺跡の北部・西部・桐内D遺跡の北部においては小又川に向い比高差10～15m程度の段丘崖となっている。各遺跡ともに小又川に向い緩やかな傾斜を示す。

遺跡の所在する森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、町西部を北流する阿仁川と鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川の流域からなる。東は鹿角市・仙北郡田沢湖町、北は北秋田郡比内町・鷹巣町・合川町、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。

南の北秋田郡阿仁町との境に、町名の由来となった標高1,454mのアスピーテ・トロイデ複式火山である

る森吉山があり、その東側一帯は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地をはさんで、北北東に小繁森（標高1,010m）、北に高鳥帽子（標高764m）、北西に源五郎岳（標高559m）などが東西に連なっており、森吉山頂上からの距離は、いずれも約10～11kmである。これらの山地は分水嶺をなし、行政区画上も鷹巣町や比内町との境界をなしている。

本遺跡近くを流れる小又川は、北秋田郡・仙北郡・鹿角市の境界をなす三ツ又森（標高1,119m）・柴倉岳（標高1,178m）に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連瀬沢などの支流を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川と合流する。

小又川沿いには集落・耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では洪積段丘を含め最大6段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500m、狭いところで約20m、南北両側から山が迫ってきており、おおむね小又川右岸側にあたる北側山地の山腹斜面の方が勾配が急である。山麓の平地縁辺部は、集村形態をとる集落の居住地として利用され、平坦部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともに場整備事業が行われた。現在は、森吉山ダム建設のために、桐内集落より上流に点在していた各集落はすべて移転を完了している。

この地域に分布する地質は、いわゆる東北地方日本海側グリーンタフ地域に属し、新第三紀中新世の地層を主としている。先第三紀の古期堆積岩（粘板岩、ホルンフェルス）が小繁森の頂上付近に顕を出しているが、それ以外の地域では、新第三紀中新世初期～中期の火山岩類、火山碎屑岩類および堆積岩類を基盤岩としている。また、第四紀層の森吉山及び柴倉岳の火山活動に伴う泥流堆積物・段丘堆積物・扇状地堆積物・河床堆積物・現河床堆積物が小又川に沿う平坦地を中心へ被覆している。

当地区的地質を概観すると、小又川を境に右岸側は火山性碎屑岩類が分布し、左岸川には粗粒玄武岩が急崖を形成し、第四紀の火山泥流堆積物が広く被覆している。

遺跡の歴史的環境

『秋田県遺跡地図（県北版）』（1991年発行）によると、森吉町には58カ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が周知されている。その後、秋田県教育委員会による、1992（平成4）年度～1993（平成5）年度の森吉山ダム建設事業に係る分布調査と、1994（平成6）年度からの同事業に係る遺跡範囲確認調査によって、合計60遺跡が小又川流域の根森田・森吉地区で新しく見つかっており、町の遺跡分布図は大幅に塗り替えられた。

森吉町では、ダム建設事業に係る遺跡範囲確認調査の実施された1994（平成6）年度以前においては、旧石器時代の遺跡は確認されていなかったが、これらの調査により、森吉地区のネネム沢A遺跡で旧石器時代の遺物が確認された。

縄文時代の遺跡では、爪形文・貝殻沈線文・条痕文の遺物が出土した早期の桂の沢遺跡、前期の長野岱I遺跡・地藏岱遺跡、前期から後期にかけての大規模な集落跡が確認された狐岱遺跡がある。中期から晩期にかけては、姫ヶ岱C・D遺跡・碎渕遺跡・日廻岱A遺跡・天津場C遺跡・上悪戸D遺跡・深渡遺跡・森吉家ノ前B遺跡・白坂遺跡・塚ノ岱遺跡がある。これらの中の遺跡で、深渡遺跡の石棺様組石・白坂遺跡の『笑う岩偶』は、大きく報道され話題となった。

現在の森吉町域を含む阿仁川・小阿仁川流域は『日本三代実録』に記す「樅淵村」に擬定されており、古代にあっては、律令化外の地として考えられている。古代の遺跡では、狐岱遺跡や諫訪岱遺跡などで平安時代の集落跡・地蔵岱遺跡で製鉄関連遺構が確認されており、その他天津場A遺跡・ネネム沢A遺跡・森吉家ノ前A遺跡でも古代の遺構・遺物が確認されている。

中世以降の遺跡では、いわゆる中世城館が町全城で10ヵ所確認されている。町南部の旧前田村には、阿仁前田地区的前田館、五味堀地区の花館・天館、根森田地区の仲ノ又館がある。本遺跡に近い仲ノ又館には空堀や見張り台跡がある。森吉山ダム建設地区では、中世の城館跡は確認されていないものの、森吉家ノ前B遺跡で馬具の一部と思われる金具と、室町時代に属すると思われる珠洲系陶器が出土しており、小滝新兵衛岱遺跡から出土した鎌倉時代製作の青銅古鏡とともに、当該地域の中世の様相を示す数少ない資料となっている。

参考文献

- 秋田県農政部農地整備課 「大野台開発計画区域 土地分類基本調査 村内訳」 1978（昭和53）年
- 川村公一 『子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ』 モリトビア選書2
- 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993（平成5）年
- 角川書店 『角川日本地名大辞典 5 秋田県』 1980（昭和55）年
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図（県北版）』 1991（平成3）年
- 秋田県 『秋田県史 考古編』 1977（昭和52）年
- 奈良修介・疊島昂 『秋田県の考古学』 郡土考古学叢書3 吉川弘文館 1966（昭和41）年
- 大和久震平 『北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告』 『昭和三十二年度調査研究報告』
- 秋田県文化財保護協会 1958（昭和33）年
- 大野憲司 『狐岱遺跡について～1989年の範囲確認調査から～』 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第5号
1990（平成2）年
- 高橋学 『森古町長野岱I遺跡採集の岩偶』 『秋田考古学』 第42号 秋田考古学協会 1993（平成5）年
- 加賀利男 『長野岱I遺跡について』 『広報 もりよし』 第120号 1968（昭和43）年
- 加賀利男 『塚の岱遺跡の発掘調査について』 『広報 もりよし』 第131号 1969（昭和44）年
- 森吉町 『民俗資料ならびに考古学資料調査の協力依頼について』 『広報 もりよし』 第127号 1968（昭和43）年
- 森吉町教育委員会 『諫訪岱遺跡～堤沢川流路講工事に係る発掘調査報告～』 1992（平成4）年
- 森吉町教育委員会 『平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』
1996（平成8）年
- 森吉町教育委員会 『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』
1997（平成9）年
- 森吉町教育委員会 『上池戸D遺跡発掘調査報告書～北・森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～』
1997（平成9）年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『白坂遺跡発掘調査報告書～県営闘場整備に係る埋蔵文化財発掘報告～』
- 秋田県文化財調査報告書第244集 1994（平成6）年
- 秋田県教育委員会 『桂の沢灌漑発掘調査報告書～小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘報告～』
- 秋田県文化財調査報告書第247集 1994（平成6）年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第270集 1997（平成9）年



第5図 周辺の遺跡分布図

第2表 秋田県遺跡地図（県北版）による周辺の遺跡一覧(1)

地図番号	遺跡名	所在地	主な時代	遺構・遺物
1	石の巻岱 I	鳴巣町脇神字石の巻岱60	縄文	縄文土器片（晚期）
2	石の巻岱 II	鳴巣町脇神字石の巻岱65	縄文	縄文土器片（後期）、香炉形土器
3	高森岱	鳴巣町脇神字高森岱16	縄文	縄文土器片（前期・中期）
4	藤岱	鳴巣町脇神字藤岱木ノ岱43-4	縄文	竪穴住居跡、Tピット、縄文土器（前期・後期・晚期）、土製品、石器、石製品
5	からむし岱 I	鳴巣町脇神字からむし岱21	統縄文	縄文土器片
6	からむし岱 II	鳴巣町脇神字からむし岱93	統縄文	縄文土器片、釜形土器
7	タモノ木	鳴巣町小森字タモノ木17	縄文	縄文土器片（中期）
8	小森	鳴巣町小森字小森88-1	縄文	縄文土器片（晚期）
9	桜木屋敷岱 I	鳴巣町七日市字桜木屋敷岱20	古代	土師器
10	桜木屋敷岱 II	鳴巣町七日市字桜木屋敷岱61	縄文	縄文土器片（後期・晚期）
11	山の土	鳴巣町七日市字山の上57	縄文	縄文土器片（中期）
12	圓の内	鳴巣町七日市字圓の内80	縄文	縄文土器片（後期）
13	石倉岱	鳴巣町七日市字石倉岱3-1	縄文	縄文土器片（中期）
14	伊勢堂岱	鳴巣町七日市字伊勢堂岱8-4	縄文	縄文土器片（前期・中期・後期）
15	野尻	鳴巣町七日市字野尻8-2	縄文	縄文土器片（後期）
16	大野	合川町上道字大野1	縄文	縄文土器片（中期）
17	向本城	森吉町米内沢字本城向原敷3	縄文	縄文土器片、石器
18	柳木岱 A	森吉町米内沢字柳木岱41~65	縄文	縄文土器片（後期）、石器
19	柳木岱 B	森吉町米内沢字柳木岱20~23	縄文	縄文土器片、土偶
20	長野岱 II	森吉町米内沢字長野岱346-1	縄文	縄文土器片（中期）
21	長野岱 I	森吉町米内沢字長野岱50-1	縄文・弥生・古代	円形ピット、縦目軸、縄文土器片（後期・中期）、弥生土器片、土師器、石器
22	横小屋岱	森吉町米内沢字長野岱56-1	中世	空堀
23	横小屋岱	森吉町米内沢字横小屋1-34	縄文・古代	縄文土器片（前期・中期・後期）、土師器、石器
24	冷水岱	森吉町米内沢字冷水岱77-1	縄文・古代	縄文土器片（前期・中期・後期）、土師器、石器
25	狐岱	森吉町米内沢字狐岱 88	縄文・古代	竪穴住居跡（縄文・古代）、土坑、配石墓、縄文土器片（前期・中期・後期）、土師器
26	山崎	森吉町米内沢字山崎57-1	縄文	土坑、配石遺構、縄文土器片
27	吉野 I	森吉町米内沢字吉野13-1	縄文・弥生	土坑、縄文土器片、弥生土器片
28	吉野 II	森吉町米内沢字吉野5-1	古代	土師器片
29	御獄	森吉町米内沢字御獄62-1	古代	土師器片
30	御獄館	森吉町米内沢字高御獄2	中世	空堀、土塁
31	寺ノ上 I	森吉町米内沢字寺ノ上12-28	縄文	縄文土器片（晚期）、石柱、石造
32	寺ノ上 II	森吉町米内沢字寺ノ上27-1	古代	土師器片
33	米内沢城	森吉町米内沢字倉ノ沢出口99-5	中世	空堀、土塁、井戸跡
34	伊勢の森	森吉町米内沢字伊勢ノ森52-57	古代	土師器片
35	浦田うるし沢	森吉町蒲田字白板山根50-1	縄文	縄文土器片
36	比内道下山根	森吉町蒲田字白板山根92	縄文	縄文土器片（後期）
37	塚の岱	森吉町蒲田字塚の岱80	縄文	縄文土器片（晚期）

第3表 秋田県遺跡地図（県北版）による周辺の遺跡一覧(2)

地図番号	遺跡名	所在地	主な時代	造 構・遺 物
38	白坂	森吉町蒲田字白坂上岱19-22	縄文	壁穴住居跡、土坑、配石遺構、縄文土器片（後期・中期）、岩器、石器、土器品
39	愛宕堂	森吉町蒲田字稻荷沢40	縄文	縄文土器片（中期）、石器破片
40	漆田館	森吉町蒲田字愛宕堂下44	中世	鐵跡
41	石倉坂	森吉町蒲田字石倉坂3	縄文	縄文土器片（前期・中期）、石器
42	若木岱	魔果町七日市字若木岱9-2	縄文	縄文土器片、石器
43	続山	森吉町明仁前田字逆行沢136-1	縄文	縄文土器片
44	下野上野岱	森吉町阿仁前田字下野上野岱345	縄文	縄文土器片
45	下前田下山根	森吉町阿仁前田字下前田下山根36	縄文	縄文土器片・石器
46	前田館	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	中世	鐵跡
47	八幡森	森吉町阿仁前田字八幡森1-1	縄文	縄文土器片（後期・中期）
48	陣場岱1	森吉町阿仁前田字陣場岱40-1	縄文	縄文土器片（前期・中期）
49	冷水沢A	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片（後期）、石器
50	冷水沢B	上小阿仁村仏社字冷水沢	縄文	縄文土器片（後期）、石器
51	五味堀	森吉町五味堀字五味堀1	縄文	縄文土器片、石器
52	ボサツ堂	森吉町五味堀字堂ノ前45-46	縄文	縄文土器片（後期）
53	五味堀高屋敷	森吉町五味堀字下タ大久保岱174	縄文	縄文土器片
54	五味堀大久保岱	森吉町五味堀字大久保岱20	縄文	縄文土器片（後期）、斑駁石
55	小又小平堀A	森吉町小又字涌坪74	縄文	縄文土器片（後期）、石器
56	小又小平堀B	森吉町小又字上岱9	縄文	縄文土器片（後期）、石器
57	片平館	森吉町根森田字片平館3	縄文	縄文土器片（後期）、石器
58	桂の沢	森吉町根森田字桂ノ沢13	縄文	土坑、縄文土器（早期～後期）、石器
59	仲ノ越	森吉町根森田字仲ノ又75	中世	空堀
60	桐内B	森吉町森吉字桐内33-1外	縄文	縄文土器片
61	桐内D	森吉町森吉字桐内家ノ上川反19外	縄文	縄文土器片、石器
62	様田	森吉町森吉字様田二重鳥131	縄文	縄文土器片、石器
63	慈ノ瀬	森吉町慈吉字瀬ノ瀬31-1	縄文	縄文土器片（後期）
64	深底	森吉町森吉字深底家ノ前	縄文	縄文土器（前期～後期）、石器
65	向小滝	森吉町森吉字向小滝上段613	縄文	縄文土器片（後期）、石器
66	風張城	阿仁町吉田字寺屋布1-7	中世	空堀、井戸跡
67	花館	森吉町五味堀字對崎1-82	中世	空堀
68	天館	森吉町五味堀字天館101	中世	鐵跡
69	高田城	阿仁町小瀬字山ノ内65-32	中世	空堀
70	桐内沢清兵衛岱	森吉町森吉字清兵衛岱46	縄文	縄文土器片（後期・中期）
71	小又川	森吉町小又川園有林52林班の小班	縄文	縄文土器片（後期）、石器
72	熊堂	阿仁町水無字湯口内451-1	縄文	縄文土器片（中期）、石器
73	上岱I	阿仁町水無字上岱104-2	縄文	壁穴住居跡、プラスコ状土坑、縄文土器（中期・後期）
74	上岱II	阿仁町水無字上岱135-2	縄文	縄文土器片（中期）

—— 桐内 B 遺跡 ——
(2KNB)

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

桐内B遺跡は、小又川左岸に形成された大久保山山地の山裾につながる段丘面にある。遺跡は南から北へ下る斜面となっており、標高は約124～130mである。遺跡北東側には宅地があり、遺跡部分は畠として利用されていたが、移転後は荒地となっていた。

桐内地区では、1994（平成6）、1996（平成8）年度に秋田県教育委員会が範囲確認調査を行い、その結果、桐内A遺跡（遺跡面積15,500m²）、桐内B遺跡（同1,450m²）、桐内C遺跡（同14,000m²）、桐内D遺跡（11,000m²）の4遺跡を確認した。そして、1998（平成10）年度に桐内C遺跡、1999（平成11）年度に桐内D遺跡、桐内B遺跡、桐内A遺跡の一部（5,500m²）、2000（平成12）年度に桐内A遺跡の残り（10,000m²）の発掘調査が行われ、桐内地区の全遺跡の発掘調査が終了した。

第2節 調査の方法

1 野外調査

調査はグリッド法で行った（第6図）。対象面積全域にグリッドを設定するため、建設省打設の3級基準点D3-2を原点とした。原点をとおる国家座標第X系の南北方向に南北基準線Y軸を設定し、この基準線と直交する東西基準線をX軸とした。これらX・Y両軸に4m×4m方眼メッシュを割り付けた。原点をMA50とし、東西方向にはX軸上を西に4m進む毎にMB、MC、MD…と正順に、東に4m進む毎にLT、LS、LR…と逆順に各々A～Tまでのアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、Y軸を北に4m進む毎に51、52、53…、南に4m進む毎に49、48、47…と増減する2桁のアラビア数字を付した。各グリッドの呼称は、南東隅の杭を通るX軸とY軸の組み合わせでMA50、MB51、MC52…のように呼ぶこととした。

遺構はプラン検出順に連番で遺構番号をつけることとした。原則として半蔵または十字に土層断面観察用のベルトを残して、2または4分割法による精査を行うこととした。

遺物はグリッド単位で取り上げ、グリッド名または遺構名、取り上げた年月日を記入した耐水性荷札を添付した。

平面図及び断面図は、原則として1/20、細部状況を表すために適宜1/10の縮尺で作成し、それぞれにレベルを記入した。作図については、平面図・遺構配置図はトータルステーションで作成し、断面図は手実測によって作成し、土色・かたさ・しまり・粘性・混入物を注記した。

発掘調査における写真撮影は、遺跡や遺構・遺物を対象とする地上撮影を行った。写真是35mm判カラーフィルムを使用した。

2 室内整理

遺構は、現場で作成した図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図を組み合わせた図を第2原図とした。第2原図作成後、これをトレースした。

遺物は、洗浄・注記の後、報告書に掲載する遺物の選別を行い、その後に基本的に原寸で実測図を作成し、報告書に掲載するにあたっては適宜縮尺を変えトレースした。図にはスケールを入れて示してある。また、土器片などは拓影図の作成をあわせて行い、これらの作業後に写真撮影を行った。

第3節 調査経過

桐内B遺跡の発掘調査は1999（平成11）年5月18日から行った。

5月18日 発掘調査開始日。終日、発掘機材の準備・整備を行った。

5月20日 建設省森吉山ダム工事事務所小林専門職来跡。

5月25日 N Qラインを基本土層に設定。

N P09、N Q09グリッドで土器片が出土。遺跡南東側に遺物包含層が残っていることが判明。

5月27日 文化課谷地学芸主事来跡。

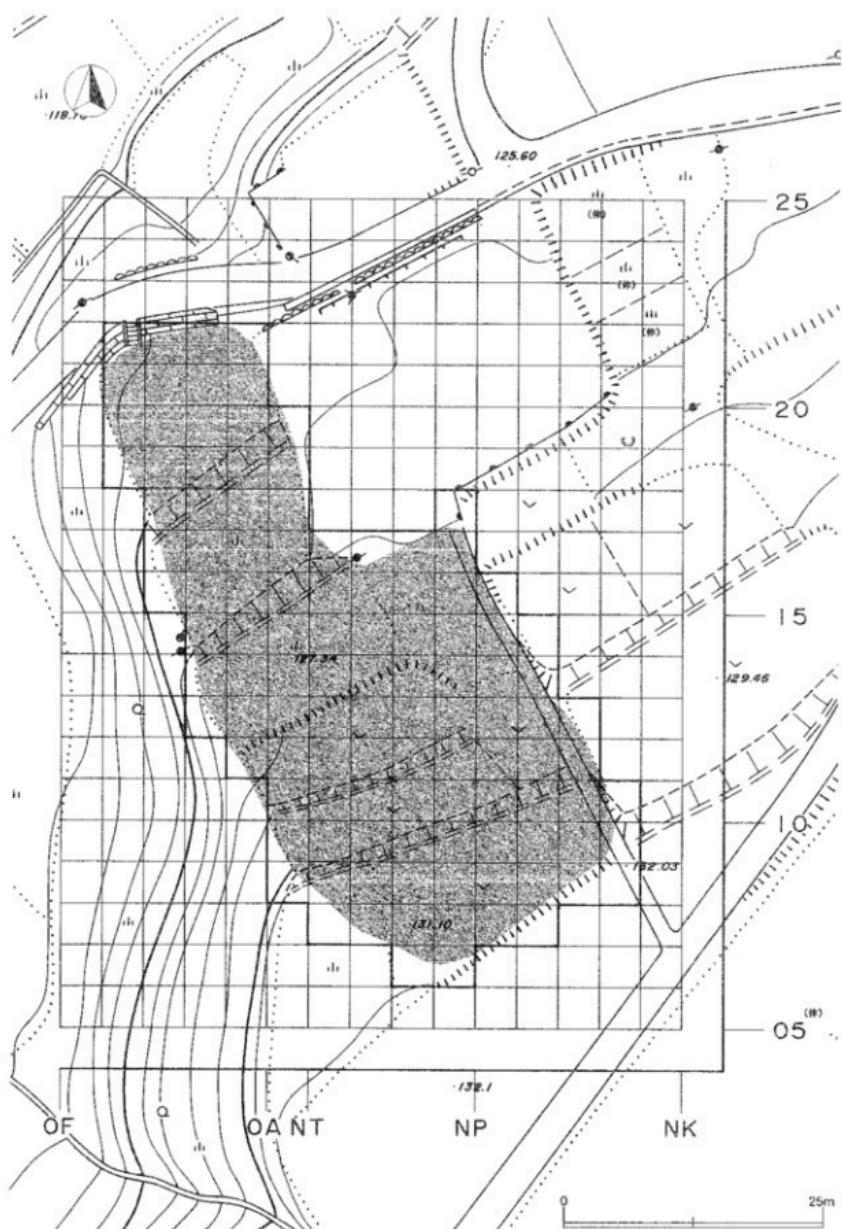
6月2日 東西12ラインまで粗掘を進めた。このあたりは、耕作土の直下に疊を含む地山が露出した。

午前、文化課大野課長補佐来跡。

6月11日 船木調査課長、文化課小徳学芸主事来跡。

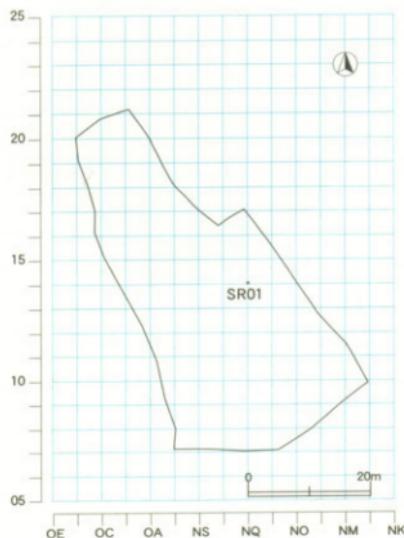
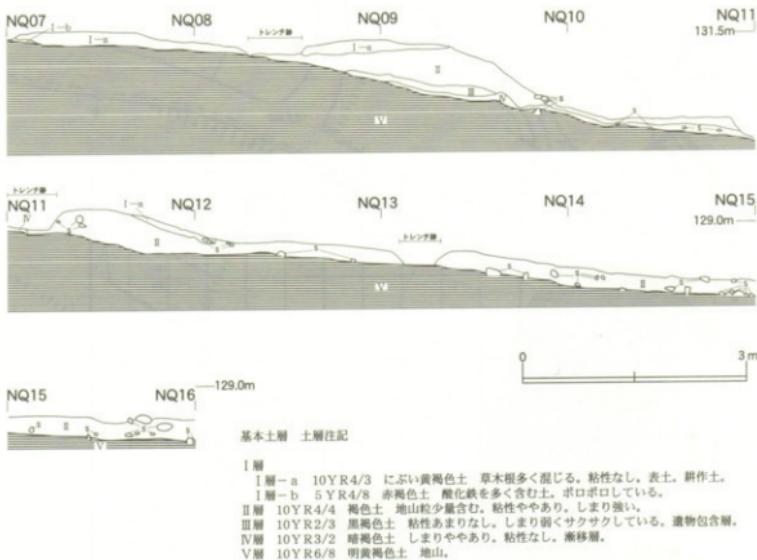
6月14日 土器埋設遺構S R01を検出。

6月18日 桐内B遺跡の調査終了し、桐内A遺跡へ機材を移動した。



第6図 桐内B遺跡グリッド設定図・遺跡範囲図

桐内B遺跡



第7図 基本土層図・遺構配置図

第2章 調査の記録

第1節 基本層位

桐内B遺跡の発掘調査では、基本層位観察ベルトを南北N Qラインに設定し、5層に大別した。

I層は耕作土であり、さらに2層に分けられる。I a層は畑の耕作土で、層厚は0.08m～0.3mであった。I b層は耕作時に入れられた肥料分が変色したものである。

II層は畑造成時に台地高位から低位へ移動された土で、畑の段差を形成している部分である。層厚は0.08m～0.8mであった。

III層は遺物包含層で、遺跡南東部にのみ残存していた。層厚は0.1m～0.2mであった。

IV層は漸移層で、遺跡南側には一部残存していたが、北側では地山下まで削平されており、表土を除去すると地山中の礫層が露出した。層厚は0.08m～0.2mであった。

V層は地山層で、粘性があまりなく砂質の土である。

第2節 検出遺構と出土遺物

今回の発掘調査で検出した遺構は、土器埋設遺構1基のみであった。

S R 01 土器埋設遺構（第8図、図版1・2）

【位置】 N Q14グリッドの南東隅に位置する。

【確認】 基本土層除去中に地山面で確認した。

【形態】 土器が埋設されていた層のぎりぎりまで削平されており、そのため、掘り込み等の確認はできなかった。

【埋設土器】 小型の深鉢形土器がほぼ完形で出土した。器面全体にしR単節縄文が施されている。また口唇部は上から押しつぶして平らになるように調整されている。胎土には砂粒がやや多く混入されており、焼成は良好である。土器の内外面には厚く煤状炭化物が付着している。

第3節 遺構外出土遺物

桐内B遺跡で出土した遺物は、整理用中コンテナで2箱とごく少量で、そのほとんどが表面が摩滅した土器片や石器であった。

1 土器

（1）縄文時代前期の土器（1）（第9図、図版2）

1は、深鉢形土器の口縁部である。胎土には纖維が多く含んでおり、焼成は良好である。土器表面にはしR単節縄文が施されている。裏面には横にナデた痕が残っている。口縁部はわずかに外反している。

(2) 純文時代中期の土器 (2~4) (第9図、図版2)

2は深鉢形土器の口縁部で、山形状突起部に細い粘土紐が貼り付けられ、その粘土紐には撫糸圧痕文が施されている。突起の下部には円形のボタン状突起が貼り付けられている。3も深鉢形土器の口縁部で、縄文原体で施文した後、沈線によって区画されている。4は深鉢形土器の体部で、3と同じく縄文原体で施文した後、沈線によって区画されている。

(3) 純文時代後期の土器 (5~8) (第9図、図版2)

5~8は同一個体の壺形土器で、5・6は口縁部である。頭部はほぼ直角にくびれている。胎土には砂粒がやや多く混入されており、やや厚手である。

(4) 純文時代晩期の土器 (9~15) (第9図、図版2)

9・10は同一個体の深鉢形土器で、9は口縁部である。器面全体にLR単節縄文が施されており、口縁部を指によってつまむようにして調整している。

11は鉢形土器の口縁部である。波状口縁で、口縁部に3条の平行沈線があり、裏面には口縁に平行な沈線が1条確認できる。12は鉢形土器の体部で、口縁部に近い部分である。体部にはLR単節縄文が施され、口縁部側には平行沈線が3条確認できる。器面には煤状炭化物が少量付着している。13・14は鉢形土器の体部で、13では平行沈線が4条、14では3条が確認できる。14の裏面には沈線が1条施されている。15は鉢形土器の体部で、口縁の下に口縁に平行な沈線が3条確認できる。また裏面にも沈線が1条施されている。

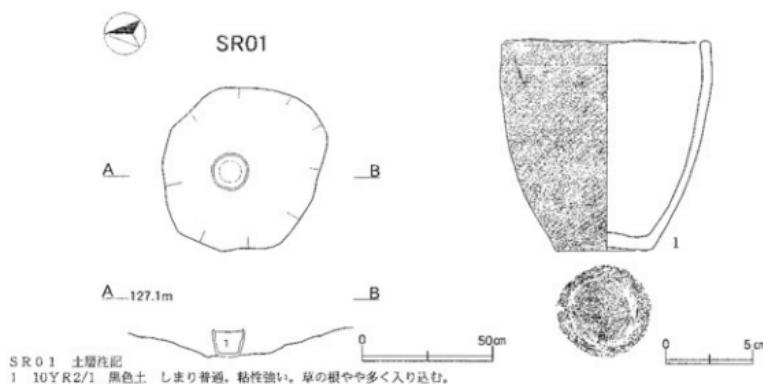
2 石器

(1) 石匙 (1) (第9図、図版2)

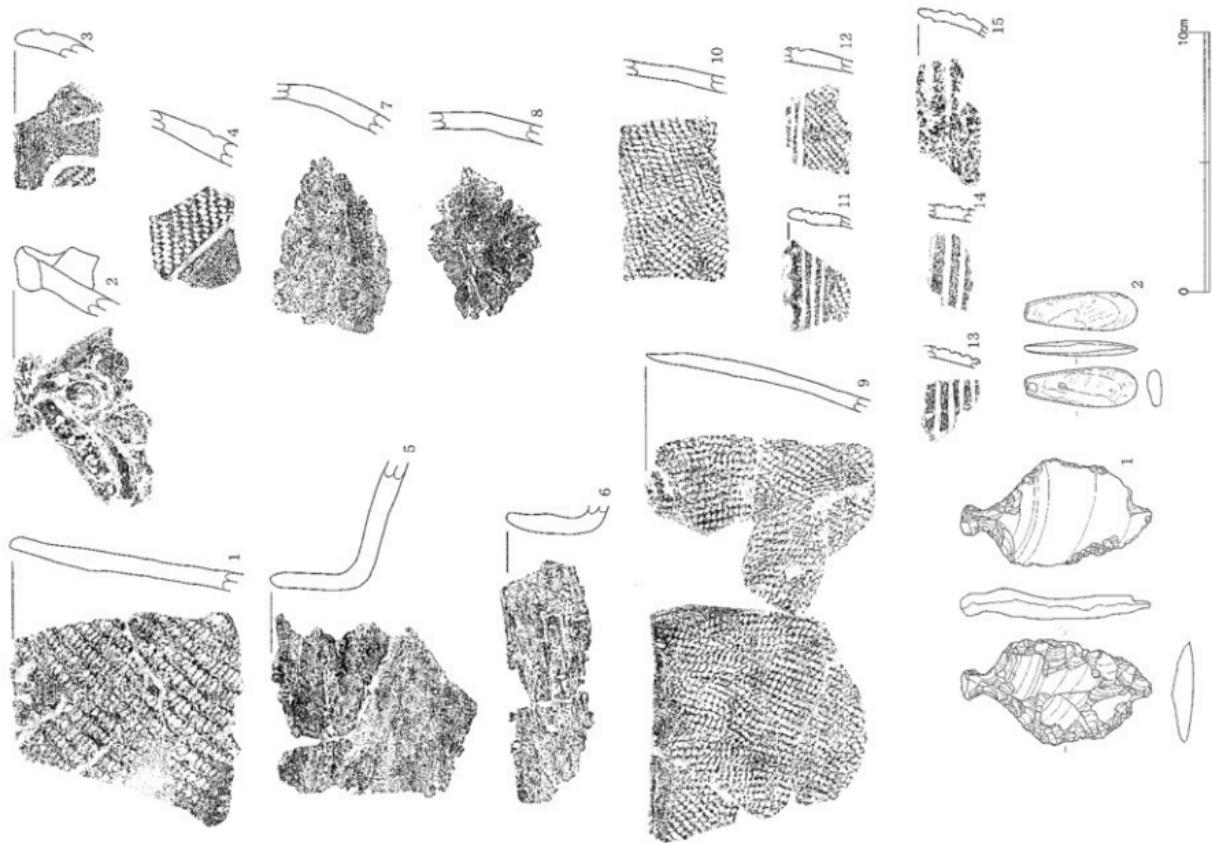
石匙は1点出土した。縦型石匙で、縦長剥片を用い、つまみ部と両面の側縁に調整を施している。先端部が一部欠損している。石質は頁岩である。

(2) 磨製石斧 (2) (第9図、図版2)

磨製石斧は1点出土した。この磨製石斧は、縄文時代後期以降に出現した儀礼などに用いられたと考えられている小型のものである。両面とも丁寧に磨かれており光沢がある。石質はチャートである。



第8図 SR01土器埋設遺構



第9図 遺構外出土遺物

第3章 まとめ

発掘調査の結果、桐内B遺跡では土器埋設遺構1基を検出し縄文時代の土器と石器が少量出土した。唯一検出した土器埋設遺構では、縄文時代後期の小型の深鉢形土器が埋設されており、その土器の表面には煤状炭化物が厚く付着していた。埋土には炭化物等は含まれていなかったので、この土器は、煮炊きなどに使用されたのち2次的に使用されたものである。また、範囲確認調査で配石遺構が報告されていたが、配石遺構と思われる部分を精査し、さらに石を取り除いて掘り下げたが遺構は検出できなかった。

遺物については、そのほとんどが調査区南側にかろうじて残っていた遺物包含層である黒色土層からの出土で、北側の斜面低位部分ではまったく出土しなかった。出土した土器は、表様のものも含めると縄文時代前期～晩期までのものがある。しかし、どの時期のものも出土量はごく微量であった。その中では、後期・晩期のものが比較的多かった。残念ながらどの土器片も小破片のため、土器形式を特定できるようなものはなかった。ただし、晩期の土器片に関しては、大洞C式期の可能性が高い。

桐内B遺跡は遺物散布地ととらえることができよう。しかしながら、土器埋設遺構が存在していることから、桐内B遺跡と隣接していて、縄文時代の住居跡が見つかっている桐内A・C・D遺跡との関連が考えられる。



遺跡遠景（北東→）



作業風景（北→）

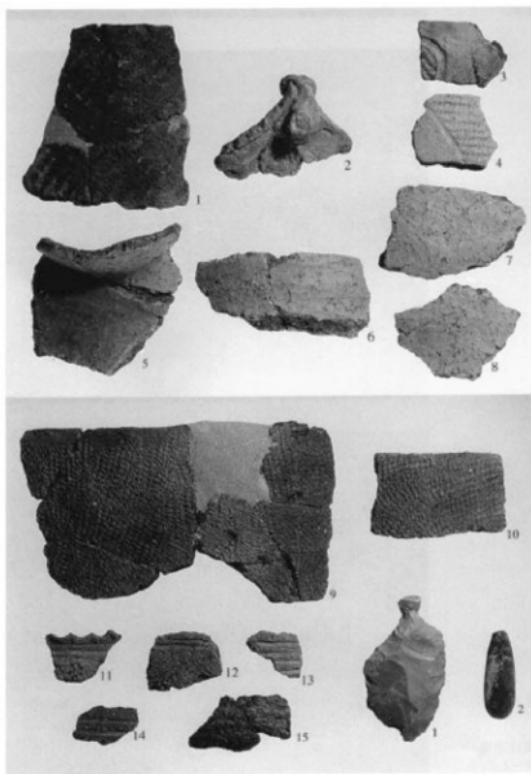


S R01土器埋設構
完掘状況（東→）

圖版
2



S R01埋設土器



遺構外出土遺物

—— 桐内 D 遺跡 ——
(2KND)

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

桐内D遺跡は、森吉山の北麓を西流する小又川左岸の砂礫段丘上に立地する。本遺跡は、東西に細長く形成された河成段丘上にあり、東西の距離がおよそ350m、南北が最大40mに及ぶ。遺跡範囲内においても大きく段丘高位面と段丘低位面に区分され、高位面の標高は約118m、低位面では115~117mで東側が若干高い。北側は小又川に向かって比高およそ15mもの段丘崖となっている。遺跡全体をとおして、北（小又川）へ向けて緩やかな傾斜が認められる。なお、本遺跡の現況は、ほぼ全域が休耕田である。

桐内地域では1994年度に桐内C（桐内I）遺跡（調査面積14,000m²）、桐内D（桐内II）遺跡（同11,000m²）を、1996年度に桐内A遺跡（同15,500m²）、桐内B遺跡（同1,450m²）について秋田県教育委員会が範囲確認調査を実施した。桐内地域に関する発掘調査は、桐内C遺跡は1998年度調査が終了しており、桐内A・B・Dの各遺跡は1999年度調査を行った。（そのうち桐内A遺跡は一部の5,500m²の調査を行う。）今回桐内D遺跡については遺跡総面積にあたる11,000m²の調査を行った。

調査方法としては、前年の桐内C遺跡の調査結果を受け、南北のグリッド杭に沿った2m幅のトレンチ調査を行い、遺構・遺物の検出された箇所については拡張して調査を行う方法をとった。また、遺跡内で段差や農道により遺跡範囲が分断されていたため、調査範囲を便宜的にA・B・C・D・E・F・Gの7区に分け調査を行った。このうち遺構の検出された、A区、B区、D区、G区西部、また遺物の検出の多かったE区西部については全面調査を行った。なお、A区南部（一部）について



第10図 遺跡範囲図

は前年度トレント調査を行い、遺構遺物が検出されなかったことから1999年度は調査を行っていない。また、C区に関しては、ダムサイトの標識設置の際に削平・盛土されたことをトレントで確認し、遺構・遺物はないと判断した。

第2節 調査方法

1 野外調査

調査はグリッド法で行った。対象面積全域にグリッドを設定するため、前年桐内C遺跡調査の際に、建設省打設の3級基準点D3-2を原点の基準杭とした。この基準杭を通る国家座標第X系の南北方向に南北基準線Y軸を設定した。またこの基準線と直交して原点の基準杭を通る線を東西基準線X軸とし、これらX・Y両軸に4m×4mの方眼メッシュを割り付けた。

原点をMA50とし、東西方向には、X軸上西に4m進む毎にMB・MC・MD・・・と正順に、東に4m進む毎にLT・LS・LR・・・と逆順に各々A～Tまでの、2文字のアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、Y軸を北に4m進む毎に51・52・53・・・、南に4m進む毎に49・48・47・・・と増減する2桁のアラビア数字を付した。各グリッドの呼称は、南東隅の杭を通るX軸とY軸の組み合わせで、MA50・MB51・MC52・・・のように呼ぶこととした。

遺構は種類別に略号を付し、検出順に連番で遺構番号を付けた。番号登録の後、遺構と断定するとのできなくなったものは、これを欠番としている。原則として半蔵または十字に土層断面観察用のベルトを残して、2または4分割法による精査を行った。

遺物は、基本層序を基に、Ⅲ層以下（遺物包含層）のものは全点トータルステーションを用いて計測・記録して取り上げを行った。記録した項目は、1. 遺物番号、2. 出土グリッド、3. 出土層位、4. 種別、5. X座標、6. Y座標、7. Z座標、8. 取り上げ年月日である。また、I層（耕作土）出土のものはグリッド単位に取り上げ、グリッド名、出土した層位、種別、年月日を記録した。

平面図および断面図は、原則として1/10で作成し、土器埋設遺構や炉跡などは細部状況を表すために適宜1/10の縮尺で作成し、それぞれにレベルを記入した。作図にあたっては、基本的にはグリッド杭を基準とする簡易造り方測量によったが、調査範囲や、形が単純な遺構などは、トータルステーションを用いて機械測量を行った。断面図には土色・土性・混入物・しまりを注記し、必要に応じてエレベーション図も作成した。

発掘調査における写真撮影は、遺跡や遺構・遺物を対象とする地上撮影を行い、発掘終了の際には全景撮影のためにローリングタワーを使用した。写真は、35mmカメラにモノクロ、カラーリバーサル（スライド用）フィルムを装着し、必要に応じてネガカラーも加えている。

2 室内整理

各遺構については、現場で作成した平面図・断面図を第1原図とし、トータルステーションを用いて実測した遺構・遺物出土地点はパソコンコンピューター上で処理した。使用したプログラムは（株）シン技術コンサル「遺跡管理システム」である。この第1原図をパソコンコンピューター上にスキャニングし、Adobe社「Photoshop5.5」を使用してバス（バスとは線データのこと）を作成した。これを基にAdobe社「Illustrator8.0」を使用して線を描き、平面図と断面図を組み合わせた。この一連

の作業は、従来の第2原図作成、トレースを同時に行うものである。

遺物については、洗浄・注記の後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に1/1で実測図を作成した。遺物についても遺構の処理と同様、パソコンコンピューター上で処理を行った。報告書に掲載するにあたっての縮尺変更の作業も同様である。図にはスケールを入れて示してある。また、土器片などは拓影図の作成をあわせて行い、これらの作業の後、写真撮影を行っている。

こうした一連の作業を終了し、各記録をデジタル処理した後に、Quark社の「QuarkXPress4.1」で版組を行った。

第3節 調査経過

発掘調査は、平成11年5月18日から9月30日まで実施した。

第1週（5月18日～21日）調査開始第1週目であり、また悪天候のため主として調査前の準備作業を行った。18日、本日より作業開始。調査事務所周辺の整備、発掘機材の運搬・整理を行いながら、排土置き場・調査方法などの再確認を行った。19日、悪天候のため、発掘調査区周辺の整備、および調査区内外の草刈りを行った。森吉町教育委員会木村係長・細田主事来跡。20日、調査区最東部と最西部にベルトコンベアを配置。21日、調査範囲東側（G区）ではKSグリッド以東の表土除去を開始。調査区西側（B区）では基本層序確認のためにMTラインにトレーニングを設定し、表土除去を開始した。ベルトコンベアに安全装置を取り付けた。

第2週（5月24日～28日）ベルトコンベアの配線を終了。G区は2mトレーニングを全域に設定し、粗掘りを終了。A区についてもトレーニング調査を開始。KP69グリッドでSK01、MT55でSR17を検出。基本層序を確認すると、段丘面の南側は土地変形の削平を受けていることが分かった。26日、文化課谷地学芸主事来跡。

第3週（5月31日～6月4日）基本土層の断面図作成を終了した。基本層位はI層（表土）、II層、III層（遺物包含層）、IV層（漸移層）、V層（地山）とした。またG区について、トレーニング調査を終了し、G区の全景撮影を行った。SK01を完掘し、その付近のグリッドを拡張して調査を進めるとともに、F区の粗掘り・精査を開始。2日には表土除去のための重機の使用を終了。31日、森吉山ダム工事事務所小林専門職来跡。2日、文化課大野課長補佐・森吉山ダム工事事務所小林専門職来跡。

第4週（6月7日～11日）A区においてSD05・SD10を確認。またNM49グリッド付近より、縄文時代前期初頭の土器片がややまとまってIV層上部より出土。G区の拡張部分よりSK06・07・08・11を確認。うちSK07より縄文時代晩期の深鉢底部の破片が出土。なお調査区全体において斜面が削平されているために遺構の残存状況が不良であった。F区の調査を終了し、E区の調査に移った。11日、埋蔵文化財センター船木調査課長、文化課小穂学芸主事来跡。現場の観察を行い、今後の調査方法について指示があった。

第5週（6月14日～18日）E区（ME64付近）より縄文時代前期の土器片がややまとめて出土。周辺グリッドを拡張して調査を進めた。17日、前田基幹センターにおいて作業員の健康診断を行った。

第6週（6月21日～25日）B区の調査を開始。III層より縄文時代後期を中心とした土器と石器が出士。G区の土坑群をすべて完掘。A区でSK2基、SKP2基を確認。E区出土の遺物の取り上げを

行った。またC区にトレーナーを設定し、かなりの深さで削平を受けた後に盛土がなされたことを確認。C区についてはそれ以上の調査を行わないことを決定。今までに終了した、C・E・F区の全景を撮影。

第7週（6月28日～7月2日）B区の粗掘りをほぼ終了。広範囲にわたり遺物が出土しており、精査と平行して取り上げを行った。なお、MQ55グリッドより板状土偶が出土した。SD13を完掘。

第8週（7月5日～9日）B区の精査を進め、SD1基、SK3基、SR3基を確認。なおB区斜面よりも遺物が出土した。

第9週（7月12日～16日）B区について遺物包含層であるⅢ層出土遺物の取り上げをほぼ終了。新たにSK3基、SR3基を確認。

第10週（7月19日～23日）D区の粗掘りを開始。B区北側斜面については遺物の取り上げを残し、精査を終了。地山としたV層上部より石匙を検出。SK25・27・28、SKP15・16を完掘。23日、埋蔵文化財センター三浦所長來跡。調査全般について指導を受けた。

第11週（7月26日～30日）D区についてほぼ精査を終了。B区については引き続き精査を継続。A区の全景撮影も行った。またV層よりの石器出土をうけて、基本土層ライン（MTライン）沿いにトレーナーを設け、礫層まで掘り下げたところ、石器・剝片が数点検出された。SK14・26を完掘。27日、産業医による作業員の問診。

第12週（8月2日～6日）NFラインにもトレーナーを設定し、礫層まで掘り下げた。トレーナー内の精査では、遺物が若干出土したものまとまりがなく、礫層の上面に大型礫が確認されることから、文化層は存在しないと判断した。遺構精査をのぞいてほぼ全域の調査を終了した。

第13週（8月9日～20日）桐内A遺跡へ作業員を移動。遺構精査を行った。SR17、SNR29、SK32を完掘。

第14週（8月23日～27日）残った遺構調査を進めた。SR23・24を完掘。

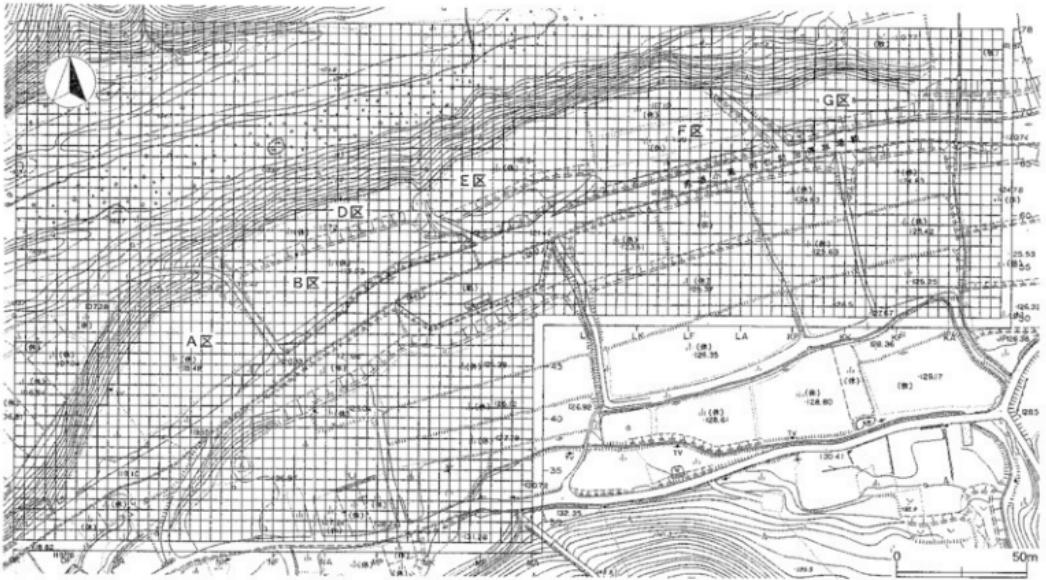
第15週（8月30日～9月3日）段丘低位面（D区）西部より複式炉をもつSI33竪穴住居跡を検出。しかしながら直上まで地形改変による削平を受けているため、プランは確認できなかった。31日、森吉山ダム工事事務所により森吉山ダム安全パトロールが実施された。作業中の事故防止が呼びかけられた。

第16週（9月6日～10日）7日よりB・D区の部分全景撮影のために準備を行い週末には撮影を行った。同時に桐内D遺跡における一部の遺構精査をのぞいて調査を終了したため機材等の移動を行った。SNR19・31、SK20・21を完掘。

第17週（9月13日～17日）主にSI33竪穴住居跡の精査を行った。炉体土器として、残存する大きさが40cm程度の厚手の深鉢形土器が埋設されていることを確認。段丘高位面よりSI34竪穴住居跡を確認。

第18週（9月20日～22日）SI33竪穴住居跡の平面図を作成。SI34竪穴住居跡についても炉を中心としての実測作業を行った。

第19週（9月27日～30日）完掘写真撮影を行い、柱穴も含めたエレベーションの実測を行った。これをもって住居跡の調査を終了。30日、桐内D遺跡の発掘調査を終了。



第11図 グリッド設定図

第2章 調査の記録

第1節 基本層位

河岸段丘上に位置する調査区は東西に細長く、調査区内でも西側の段丘高位面（A・B・C区）と東側の段丘低位面（D・E・F・G区）に分けられる。基本的には非常に緩やかではあるが南から北へ向かい傾斜している。調査区内での比高差は2~3m程度である。

は場整備を行い、水田として土地を利用していたため、地山層、もしくは地山漸位層まで削平を受けている。本来、緩やかな段丘崖だったところを削平し、耕地に改変しているため、各区ともに南側が半分もしくは3分の1程度まで削平を受けている。桐内D遺跡での遺構・遺物の検出状況はそうした状況に影響されているものと思われる。

調査区の基本層位は、MTラインに設けた南北トレンチの東壁土層から、以下の通り観察できた。

第I-a層 暗褐色土（10YR3/3）シルト。表土。水田用耕作土。下部に若干の酸化鉄が認められる。しまり弱。

第I-b層 暗褐色土（10YR3/3）シルト。I-a層に地山がブロック状に混入（70%）。しまりやや弱。

第I-c層 灰黄褐色土（10YR4/2）シルト。水田用耕作土。下部に帯状に酸化鉄が著しく認められる。しまりやや強。

第I-d層 黒褐色土（10YR2/3）シルト。水性堆積土。酸化鉄粒（ $\phi 0.1\sim 2mm$ ）を多く含む（15%）。しまりやや強。

第II層 黒褐色土（10YR3/1）シルト。炭化物（ $\phi 0.5\sim 2mm$ ）を極微量に含む。しまり弱。

第III層 黒褐色土（7.5YR3/2）シルト。暗褐色土が少量（10%）、地山粒が少量（5%）混入。炭化物（ $\phi 0.5\sim 2mm$ ）を微量に含む。縄文時代の土器・石器を含んでいる。しまりやや弱。

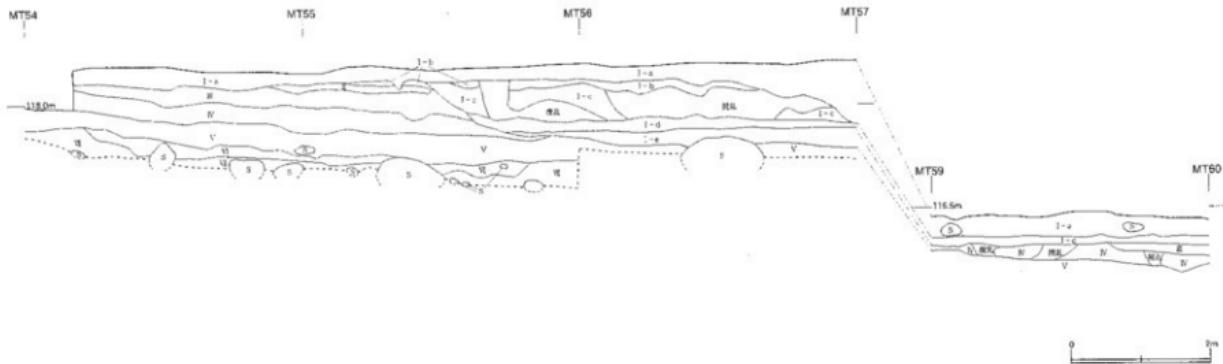
第IV層 暗褐色土（10YR3/4）シルト。III・V層の漸移層。しまりやや強。

第V層 にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト～細砂。地山層。（下部は砂質で比較的柔らかい）しまりやや強。

第VI層 にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂～砂。V層に砂礫（ $\phi 0.1\sim 3cm$ 程度）を多く含む。しまり強。

第VII層 にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト～細砂。V層に類似、粒子が全体的に粗くなる。大きな礫を含むようになる。しまりやや強。色調はV層よりもやや明るい。

桐内D遺跡での地山層はV層以下である。しかしながら、精査の過程でMS55グリッドにおいてV層上部より石匙（120）が出土した。これを受けて、基本土層ライン（MTライン）と、NFラインにトレンチを設定し、礫層まで掘り下げ、堆積の状況と遺物の有無を確認した。これにより、土器数点（10・11）と石器（153）を検出したが、遺物の出土が非常に少なく、かつ礫層上面に大型礫が確認されることから、文化層は存在しないものと判断した。



基本土層

- 第I - a 層 暗褐色土 (10YR3/3) シルト。表土。水田用耕作土。下部に若干の酸化鉄が認められる。しまり弱。
- 第I - b 層 細粒褐色土 (10YR3/3) シルト。I - a 層に地山がブロック状に混入 (70%)。しまりやや弱。
- 第I - c 層 灰黒褐色土 (10YR4/2) シルト。水田用耕作土。下部に帯状に酸化鉄が著しく認められる。しまりやや強。
- 第I - d 層 黑褐色土 (10YR2/3) シルト。水性堆積土。酸化鉄粒 ($\phi 0.1\sim 2\text{mm}$) を多く含む (15%)。しまりやや強。
- 第II層 黑褐色土 (7.5YR3/1) シルト。炭化物 ($\phi 0.5\sim 2\text{mm}$) を極微量に含む。しまり弱。
- 第III層 黑褐色土 (7.5YR3/2) シルト。暗褐色土が少量 (10%)、地山粒が少量 (5%) 混入。炭化物 ($\phi 0.5\sim 2\text{mm}$) を微量に含む。縄文時代後期の土器・石器を含んでいる。しまりやや弱。
- 第IV層 暗褐色土 (10YR3/4) シルト。III - V層の漸移層。しまりやや強。
- 第V層 にせい黄褐色 (10YR5/4) シルト～細砂。地山層。(下部は砂質で比較的柔らかい) しまりやや強。
- 第VI層 にせい黄褐色 (10YR4/3) 細砂～砂。V層に砂礫 ($\phi 0.1\sim 3\text{mm}$ 程度) を多く含む。しまり強。
- 第VII層 にせい黄褐色 (10YR5/4) シルト～細砂。V層に類似・粒子が全体的に粗くなる。大きな礫を含むようになる。しまりやや強。色調はV層よりもやや明るい。

第12図 基本土層図

第2節 検出遺構と出土遺物

1 概要

桐内D遺跡発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡2軒（うち1軒はプランが確認できず）、土坑14基、土器埋設遺構6基、柱穴様ピット2基、溝跡2条の計26基であった。

各遺構の構築時期は、遺物の出土がなく不明瞭なものもあるが、概ね縄文時代中期末から縄文時代晩期までであり、主体となるのは縄文時代中期末から縄文時代後期初頭と考えられる。遺構の分布は遺跡西部の段丘高位面（A・B区）に集中し、遺跡東端の低位面（G区）の土坑群がこれに次ぐ。遺跡内の低位面における遺構分布は疎らであった。また、昭和40年代のは場整備により、各区の南側が地山、もしくは漸移層まで削平を受けている。遺構の分布がこの削平を受けていない箇所に限られることから、本来の遺構分布の状況は異なったものであったと思われる。

2 遺構と出土遺物

（1）竪穴住居跡

縄文時代中期末葉の複式炉を伴う竪穴住居跡が2軒検出された。うち1軒は地山面付近まで削平を受け、住居プランの掘り込みがなかったが、複式炉を持つことなどから、竪穴住居跡として扱った。

S I 33竪穴住居跡（第14図、図版3・5・8）

【検出位置】 ND58グリッド（D区中央付近）を中心として位置する。段丘低位面から河川への落ち際にあたる。

【確認状況】 IV層から地山面にかけてを精査中に「コ」の字状の石組みを確認。その後周囲を精査し、北方向に「ハ」の字状に広がる配石を確認した。これを住居跡の炉とし、掘り込み・柱穴の検出につとめた。しかしながら、全体的に地山面直上まで削平を受けており、そのためか掘り込みは確認することができなかった。周囲に柱穴らしきピットが検出できたが、根による搅乱が入り組んでいることから、住居に伴う柱穴の確定は困難であった。石組みの内部の精査を行ったところ土器が埋設されていることを確認した。プランは検出されなかったが、この炉が複式炉であることからS I 33住居跡とした。

【重複】 なし。

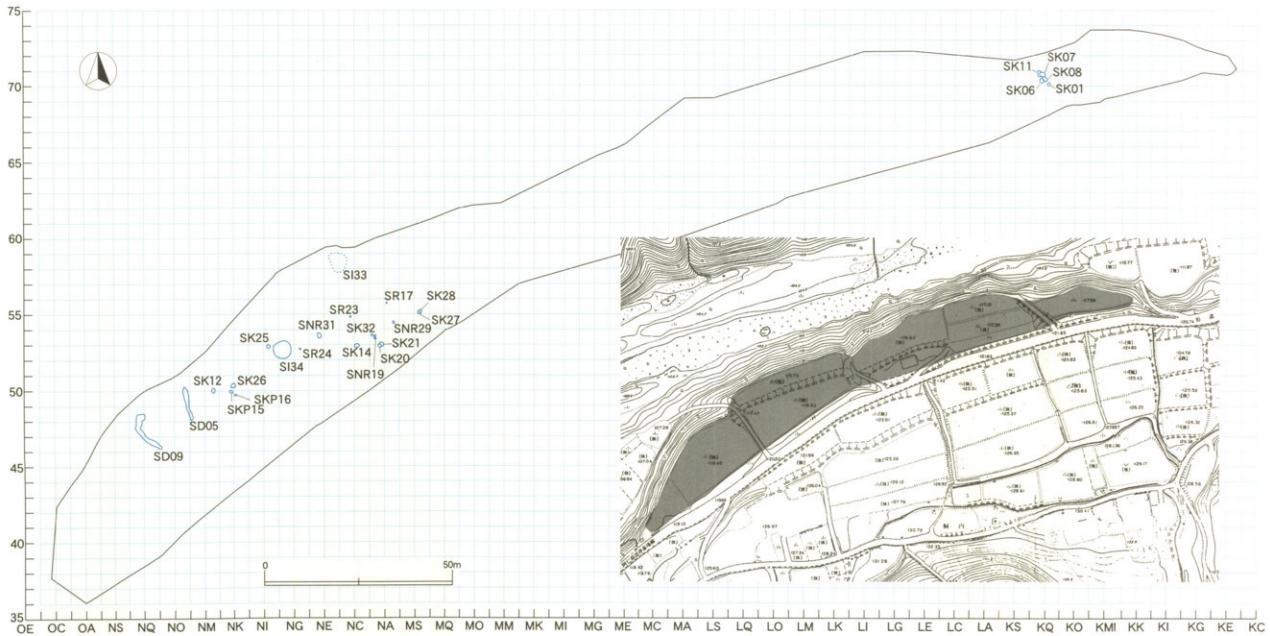
【平面形と規模】 平面形は不明であるが、規模は、柱穴の位置から判断するに、4～5m前後になると推測される。炉の軸方向はN-29°-Wである。

【壁】 残存していないかった。

【床】 炉の確認面を床面と考えると、北側にやや傾斜するもほぼ平坦である。また全体的に軟弱である。

【柱穴】 炉を中心として9本の柱穴を検出したが、深さが浅いものと深いものに分けられる。浅いものは深さ0.10m前後で、深いものは0.40～0.60m程度である。深いものはいずれもやや炉方向へ傾いている。

【炉】 炉は複式炉を検出した。方形に石を二重に配した土器埋設石囲部と石を配して掘り込んだ前庭部からなる。土器埋設石囲部の北東部、および南東部には礫が抜き取



第13図 道構配置図

られたと思われる痕跡が確認できた。土器埋設石開部、前庭部、および炉体土器覆土からは焼土は検出されていないが、炉体土器の内側、石壠部の一部には熱を受けて変色した箇所が認められる。炉に使われた土器（1）は縄文中期末葉の深鉢形土器である。砲弾形で口縁部がわずかに残り、底部が割られて正位に埋設されていた。全面に節の大きいR L縄文が施されている。残存する器高は39.6cm、推定の口径は26.5cmである。なお、土器内面の口縁から10cm程度のあたりは熱を受けて煤けた痕跡が残る。

【覆 土】 残存せず。

【出 土 遺 物】 前庭部より2点の縄文土器片が出土している。いずれも小土器片であり表面の摩滅が著しい。

S I 34堅穴住居跡（第15～17図、図版4・8）

【検出位置】 NG52・NG53・NH52・NH53グリッド（B区北西部）において確認。段丘高位面の落ち際に位置する。

【確認状況】 III層からIV層にかけてを精査中に黒褐色の楕円形プランを確認。プランが明確ではなかったために半截して掘り下げたところ、北東部において炉の石組みを確認し、S I 34堅穴住居跡とした。なお、住居跡覆土とIII層が非常に類似していたため全体的に掘りすぎている。

【重複】 特ないが、南部において、攪乱のため壁の一部が切られている。

【平面形と規模】 ほぼ円形を呈し、規模は、長軸（北東—南西）5.08m×短軸（北西—南東）4.98mである。長軸方向はN-31°-Eである。

【壁】 壁高は南側で0.31～0.37m、北側で0.08～0.13mであり、ほぼ垂直に立ち上がる。地形が全体的に北へ傾いているため、確認段階で北側をやや下げすぎている。

【床】 ほぼ平坦であるが、中央にかけてやや盛んでいる。全体的に軟弱であるが、中央付近と炉周辺で若干の硬化が見られる。床面の一部では礫面が露出しているほか、南東、南西部では大型の礫が露出している。

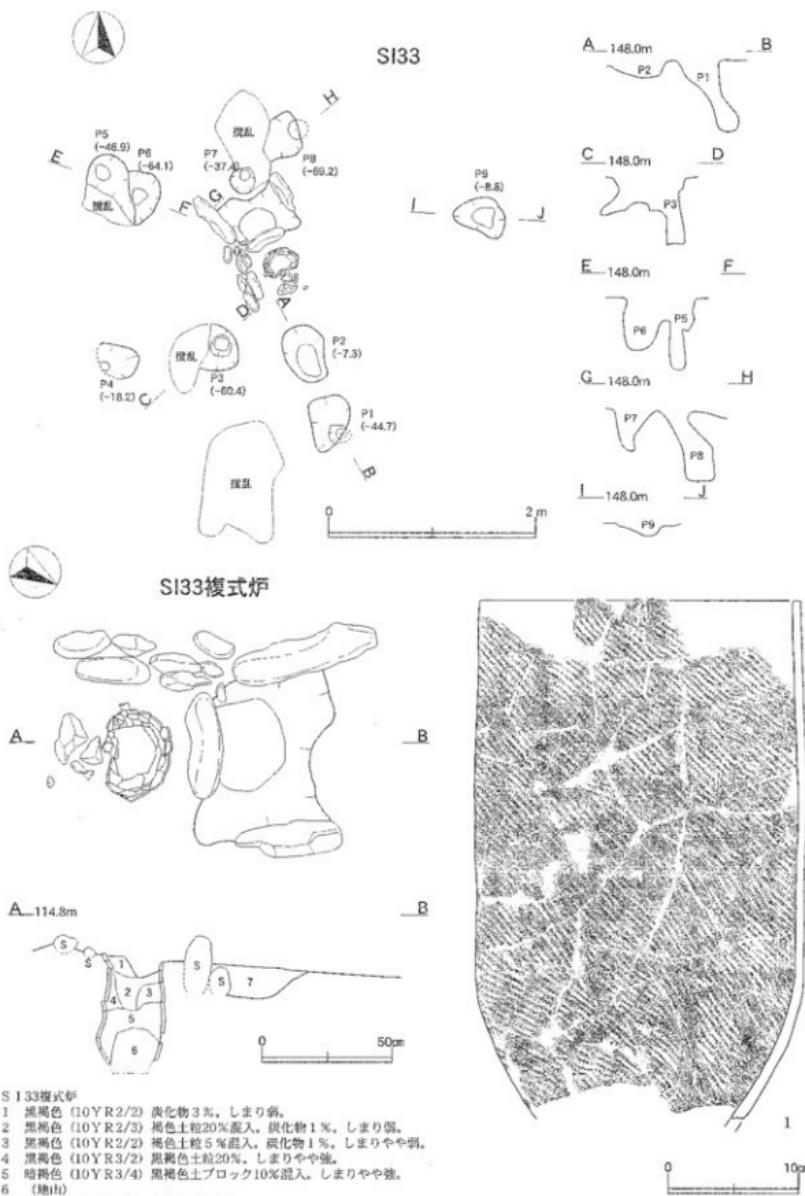
【柱穴】 5本確認された。うち主柱穴は壁際の4本（P 1～P 4）であろう。いずれも浅く、深さは約0.10～0.20mである。

【炉】 北東部に複式炉を検出した。円形に石を巡らせた土器埋設石開部と敷石を施した石組部、さらに前庭部とよばれる石を配した掘り込み部分からなる典型的な複式炉である。炉体土器として中期末葉の深鉢形土器（2）が埋設されている。大型・厚手の土器で、表面はかなり摩滅している。土器の底部は割られているほか、南東側は埋められた大きな礫にあわせるように一部が割られている。残存高は21.5cmである。全面に節の大きいR L縄文が施されている。炉体土器の周囲には大きさ10～15cmの円形の扁平な礫が配され、周囲の礫には一部熱を受けた痕跡が確認できる。石組部は70cmもある扁平な大型礫を側面に配し、底面には扁平な礫を敷いている。土器埋設石開部との間には直径60cm程度の礫を縦に配し、前庭部との間には扁平な礫を立てて埋設していた。敷石の一部は抜き取られたようである。前庭部は石組部よ

り一段高くテラス状になっていて、横に礫が配されている。さらに、炉と住居の壁面の間にはおよそ長さ85cm、幅24cm、深さ（前庭部から）20cmの細長いピット状の掘り込みがあった。複式炉の礫を観察すると、土器埋設石圓部の一部、石組部との間の大きな礫、石組部の側面の礫、敷石に熱を受けた痕跡がはっきりと残っており、特に石組部の側面の礫の痕跡が顕著であり、確認した段階で、敷石部分に割れ落ちた破片が数点確認できた。前庭部には被熱痕が見られないが、テラス部分に硬化面が確認できた。なお全体に配された石は大きさ・形・石質ともに左右対称であった。土器埋設炉の部分からは少量ではあるが、煤状の炭化物が検出されたが、石組部からは炭化物・焼土等は検出されなかった。

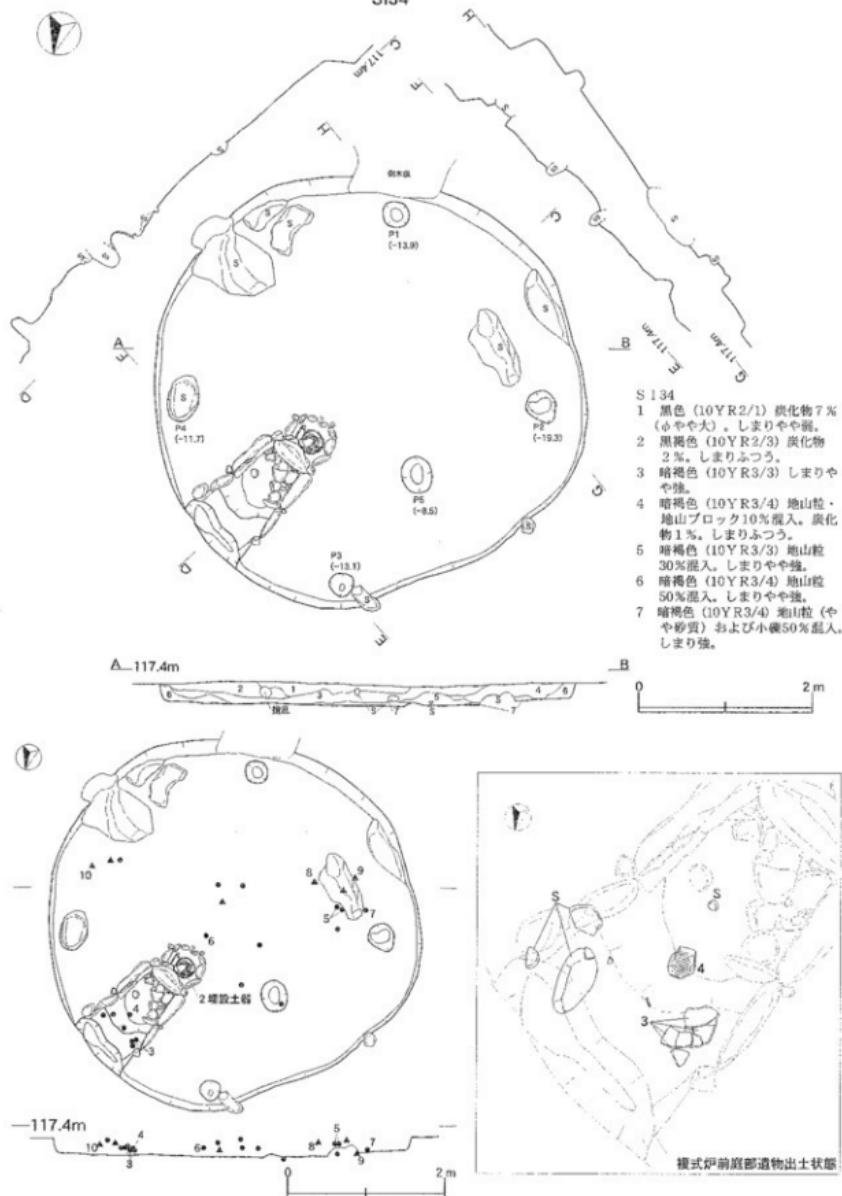
【覆土】 住居跡の覆土は7層に分けられる。壁際から床面上にかけて暗褐色土が、中央上部には黒色～黒褐色土が堆積している。上部の黒色土には遺物と炭化物が含まれる。複式炉の覆土は、土器埋設部分で炭化物が検出されたが、石組部、前庭部の覆土中からは炭化物等は検出されなかった。

【出土遺物】 この住居跡からの遺物の出土は非常に少なく、土器片18点、石器・剥片が7点出土した。そのほとんどは覆土上部からの出土である。土器3・4は深鉢形土器の口縁部で、3は胴部から口縁部まではほぼ垂直に立ち上がり、4は胴上部が張り出し、一度くびれて口縁部にかけてやや外反する。両方ともに口縁部には筋の大きいR L 繩文が横位回転で施されている。いずれも熱を受けた痕跡があり、部分的にもろく割れている。この両土器片は複式炉を確認した際に、炉の覆土上位で出土した土器片が接合したものである。5の土器は深鉢形土器の口縁部である。口縁部にかけてやや外反する。口縁下約4cmに2対の補修孔が穿たれている。6も深鉢形土器の口縁部であるが、胎土・焼成とともに3・4の土器より良好である。口縁下に隆線が横走し、その下の胴部には筋の大きいL R 繩文が継位回転で施されている。7の土器は鉢形土器の底部から胴部にかけてあり、内外面に縱方向の調整痕が認められる。推定の底部径は5.0cmである。8は三日月形のスクレイパーで、素材の両面に二次加工を施し、ほぼ全周に刃部を作出している。打面が残っており裏面に広く主要剥離面を残す。9は石槍であり、基部が丸みを帯びる木葉形をしている。両面調整を行うが、腹面の基部付近に主要剥離面を残す。素材の側縁側に尖頭部が位置する。住居跡東部の床面直上からの出土である。10は小型の磨製石斧である。基端部から刃部にかけてほぼ同じ幅で、両刃丸刃である。刃部と基端部の一部が欠損しているが、基端部の方は整形時の欠損である。

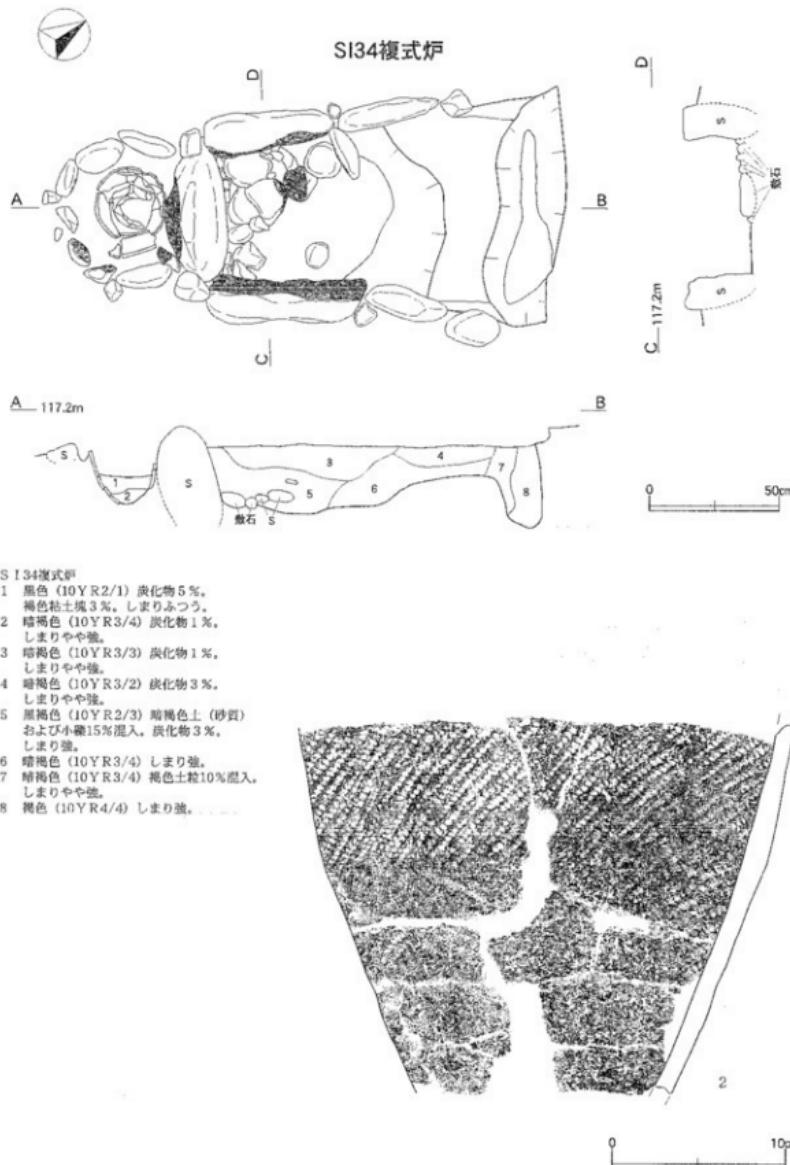


第14圖 6.4.23懸空住屋跡 - 機械標

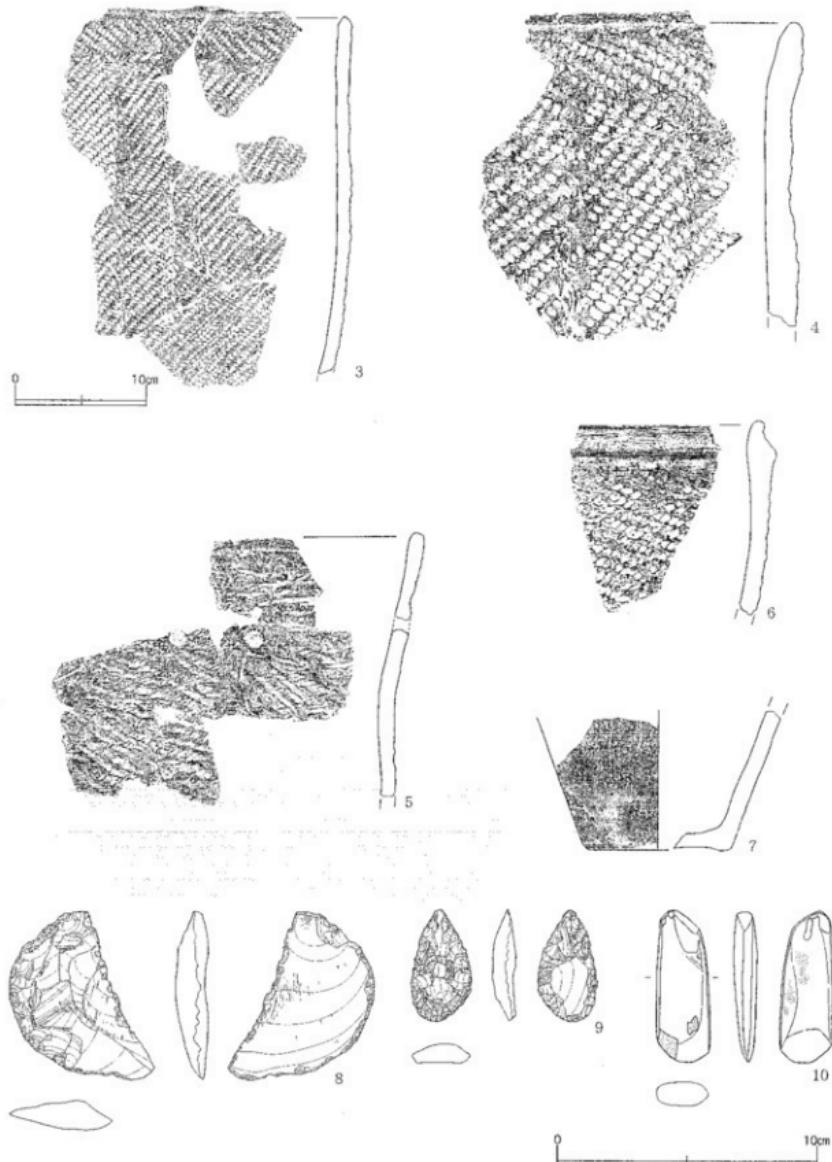
SI34



第15図 S I 34堅穴住居跡



第16図 S I 34竪穴住居跡複式炉



第17図 S-134堅穴住居跡出土遺物

(2) 土器埋設遺構

土器埋設遺構は6基検出された。いずれもB区での検出である。このうち3基は周辺に焼土を伴うため、土器埋設焼土遺構とした。

S R17土器埋設遺構（第18図、図版5・8）

[検出位置] MT55グリッド（B区中央北寄り）に位置する。

[確認状況] 表土除去を行ったところ、V層上面にて土器を確認した。この地点はIV層まで耕作のため削平を受けており、上部の大半が欠損している。直上の耕作土中には同一個体と思われる破片が散乱していた。

[規模・形態] 確認面での掘り方は、直径20cm程度で円形を呈し、深さは12cmほどで、土器の底部は掘り方底面より5cmほど浮いている。埋設土器は掘り方中央にほぼ正位に埋められている。

[覆土] 1層のみ残存しているが、直上が水田耕作土であったため若干の酸化が見られる。

[出土遺物] 11は埋設されていた深鉢形土器であり、胴部から口縁部を欠いている。残存高は7.5cm、底部径は11.0cmである。胴部の大半を欠いているため器形についての詳細は不明である。地文としてLR繩文が施され、上部に1条の沈線が横走する。底部付近は横方向のナデがみられる。底部には網代痕が認められる。

S R23土器埋設遺構（第18図、図版5・8）

[検出位置] NC54グリッド（B区中央北寄り）に位置する。

[確認状況] 表土除去を行ったところ、V層上面にて土器を確認した。この地点はIV層まで耕作のため削平を受けており、上部が欠損している。直上の耕作土中には同一個体と思われる破片が散乱していた。

[規模・形態] 確認面での掘り方は、直径25~30cm程度で歪んだ円形を呈し、深さは16cmほどで、土器の底部は掘り方底面に接している。埋設土器は底部をうち割られ、掘り方中央に正位に埋められている。

[覆土] 3層に分けられ、若干の炭化物が確認される。

[出土遺物] 12は埋設されていた深鉢形上器で、口縁部と底部を欠いている。残存高は21.5cmである。胴部以外の大半を欠いているため詳細な器形は不明であるが、胴部は直線的に緩やかに広がる。全面にLR繩文が施される。器体内外面に熱を受けて変色した痕跡が認められ、煤状の炭化物が付着している。

S R24土器埋設遺構（第19図、図版5・9）

[検出位置] NF52グリッド（B区西部）に位置する。

[確認状況] III層を精査中に確認した。周辺は上部の残存状況が不良であったため掘りすぎたものである。ほぼ同一レベルで扁平な碟が隣接している。

[規模・形態] 確認面での掘り方は、土器を埋設した部分で直径30cm程度で、深さは15cmほどである。埋設土器は掘り方中央に正位に埋められている。隣接している碟も同一の掘り方をもっている。

[覆土] 2層に分けられる。上部には基本土層第III層が堆積していた。

[出 土 遺 物] 13は埋設されていた深鉢形土器で、口縁部を欠いている。残存高は18.9cm、底部径は9.0cmである。器形は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に広がりながら立ち上がる。胴部がもっとも膨らみ、口縁にかけて狭まる。文様帶は口縁部と胴部に分かれ、口縁部には数条の細い沈線が横走し、途中4単位、渦巻状のモチーフがみられる。胴部にはしの撲糸文が施される。なお器体表面は部分的に摩滅が著しい。底部には纖維の細かい葉（笹の葉のような）の圧痕が認められる。

S N R 19土器埋設焼土遺構（第19・20図、図版5・9）

[検 出 位 置] NA53グリッド（B区中央南側）に位置する。

[確 認 状 況] III層からIV層にかけてを精査中に確認した。まず北の1個体を確認し、その南側の焼土の広がりを確認した。その範囲を確認する過程で、さらに南に東西方向に並べられた2個体を確認した。一部が範囲確認調査時のトレンチにかかっていたためトレンチ内も精査したところ西側半分が破壊されていることが判明した。

[規 模・形 態] 北の個体と焼土、南の個体を含めた掘り方が大きくなる。南側の2個体のうち、西側個体は底部1/4が割られており、やや斜位（北西方向）に埋設されている。底には東側個体の破片が敷かれていた。東側個体は西側1/3が割られており、それにはめ込むようにして西側個体がおかれている。両土器とともに深鉢で口縁部が若干かけた程度である。直上が耕作土であったため、削平を受けた影響であり、ほぼ完形で埋設されたものと考えられる。北の個体にも掘り方があったが、口縁付近の土器片が点在しているのみであった。

[覆 土] 埋設土器内の覆土は黒褐色土主体で若干の炭化物が確認できた。

[出 土 遺 物] 14は南に並んで埋設されていた東側の土器で、口縁部を欠損している。残存高は17.1cm、底部径7.0cmの深鉢形土器である。器形は、底部から胴部にかけてほぼ直線的に広がりながら立ち上がり、口縁部直下でもっともふくらみ、口縁部にかけて若干せばまる。文様帶は口縁部と胴部に分かれ、口縁部には3条の細い沈線が横走し、途中6単位、渦巻状のモチーフがみられる。胴部には全面に刺突が施される。刺突は花弁状であり、竹管状工具で同一方向（やや斜め上方）から連続的に施されている。15はその西側の土器で、こちらも口縁部を欠損し、さらに、範囲確認調査時の破損によって半分を欠いた状態であった。残存高17.1cmの深鉢形土器である。器形は14と類似するが若干丸みを帯びる。口縁部の文様帶はLR繩文が全面に施文され、さらに2本1単位の平行沈線により直線・曲線・渦巻文が施文される。胴部文様帶には全面LR繩文が施文される。表面はやや摩滅している。16は北側に埋め込まれていた土器の一部である。この土器は全体的に表面の摩滅が著しく、文様が残る土器片が少ない。胴部破片であるが、器面にLR繩文が施文される。部分的に縦方向になでられた後、円形の刺突文が縦に並ぶ。

S N R 29土器埋設焼土遺構（第20図、図版6・9）

[検 出 位 置] MT54グリッド（B区中央南側）に位置する。

[確 認 状 況] III層からIV層にかけてを精査中に確認した。被熱痕のある割れた砾を確認し、そ

の後疊の周囲を精査したところ、疊に一部押しつぶされている埋設土器を検出した。その後、その北側にも焼土の広がりを確認した。

[規模・形態] 土器埋設部分の掘り方は、土器よりひとまわり大きな径26cm程度の掘り込みで、焼土部分もほぼ同じ大きさに掘り込まれていた。埋設された土器は深鉢の底部付近であり、上部の大半がかけている。やや斜位（北方向）に埋設されている。

[覆土] 断面からの観察では、まずはじめに焼土の層が形成され、その後に土器埋設のために掘り込みを行ったようである。焼土は掘り込んだ部分の上部で確認された。埋設土器内の覆土は2層に分層され、炭化物が混入していた。

[出土遺物] 17は埋設されていた深鉢形土器で、胴部上半から口縁部を欠いている。残存高は17.4cm、底部径は8.4cmである。器形は胴部上半がもっともふくらみ全体的に丸みを帯びている。胴部には全面に刺突が施される。刺突は花弁状であり、竹管状工具で同一方向（やや斜め上方）から連続的に施されている。所々に施文具を刺突した後に折り返しした痕跡が認められる。このほかに4カ所、器面縦方向に小さな円形刺突文が連続している。この円形刺突文を施した後に全面に刺突を施している。

S N R31土器埋設焼土遺構（第21図、図版9）

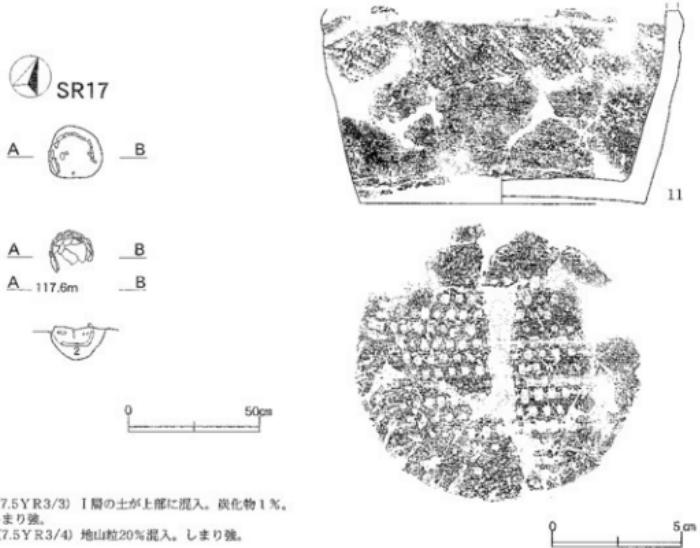
[検出位置] NE53グリッド（B区西部西側）に位置する。

[確認状況] III層からIV層にかけてを精査中に確認した。周辺に焼土が点在した黒褐色土が不明瞭に分布していた。

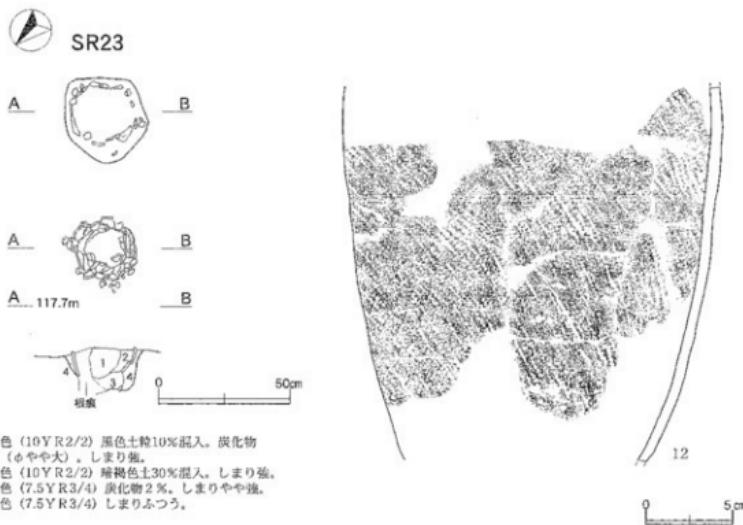
[規模・形態] 2つの大きな掘り込みがくついた形であり、大きさは130cm前後である。南側部分の掘り方の方が大きく深い。こちら側に土器が埋設されていた。土器は正位に埋設されていた。なお掘り方の規模は焼土の分布範囲とほぼ重なる。

[覆土] 埋設土器内の覆土は3層に分層された。掘り方の断面から、まず周囲一面に焼土の層が形成されたのち掘りこんで土器を埋設したようである。

[出土遺物] 18は埋設されていた深鉢形土器で、口縁部を欠いている。残存高は14.4cm、底部径は7.8cmである。器形は胴部上半がもっともふくらむが、底部からは直線的に広がる。地文として全面にL R縄文が施文される。口縁部下には3条の平行沈線が認められる。器体外面には熱を受け赤色・黒色に変色した痕跡が残り、内面も熱を受け黒く変色している。19は焼土中から出土した土器片を接合したものである。底部付近のみが残存する。厚手の土器で、おそらく深鉢形土器であり、底部径は12.7cmである。器面にはL Rの縄文が施され、底部付近は横方向になでられている。

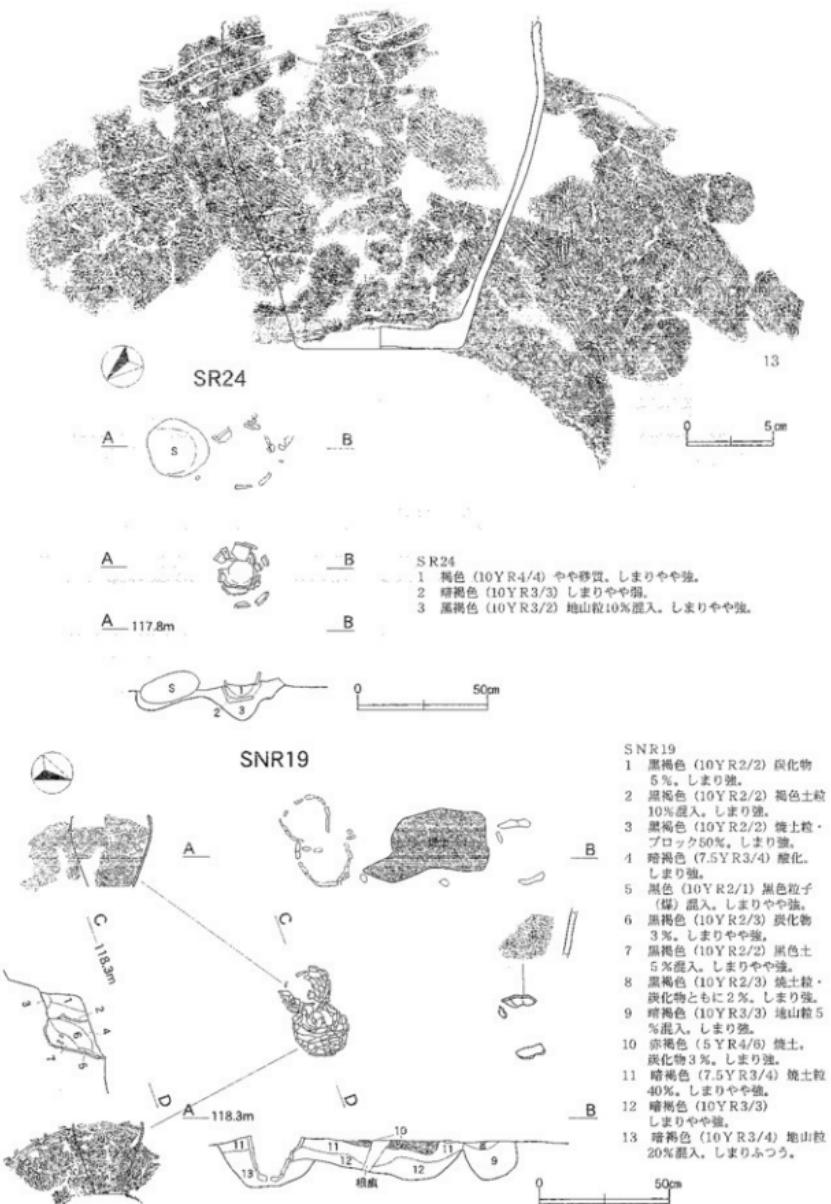


- SR17
- 1 黒褐色 (7.5YR 3/3) I層の土が上部に混入。炭化物 1%。
酸化。しまり強。
 - 2 暗褐色 (7.5YR 3/4) 地山粒20%混入。しまり強。

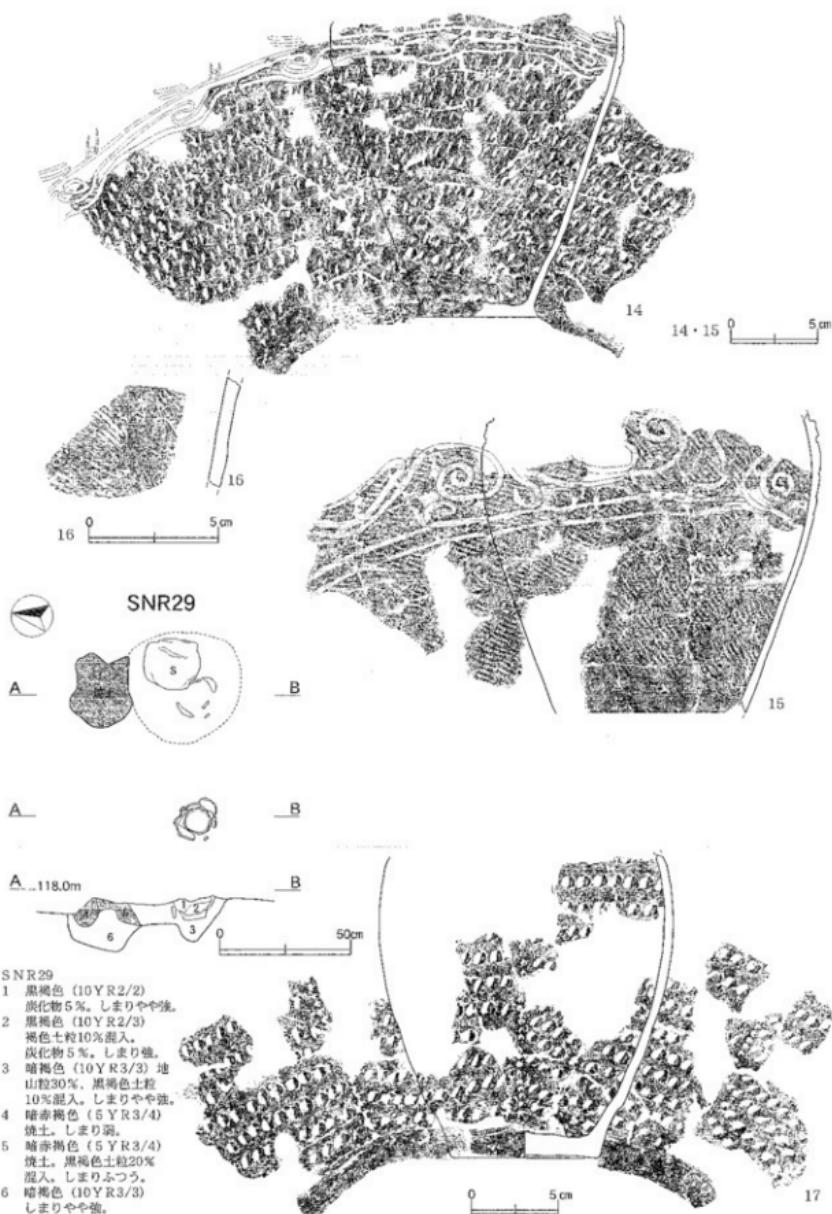


- SR23
- 1 黒褐色 (10YR 2/2) 黒色土粒10%混入。炭化物
5% (やや大)。しまり強。
 - 2 黒褐色 (10YR 2/2) 暗褐色土30%混入。しまり強。
 - 3 暗褐色 (7.5YR 3/4) 炭化物 2%。しまりやや強。
 - 4 墓褐色 (7.5YR 3/4) しまりふつう。

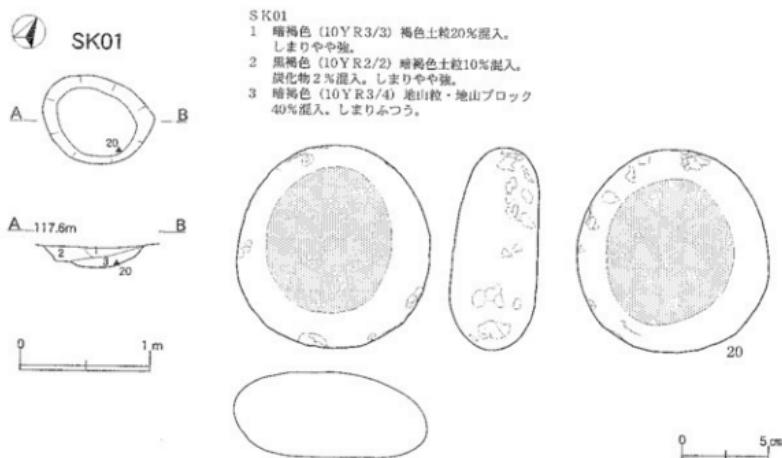
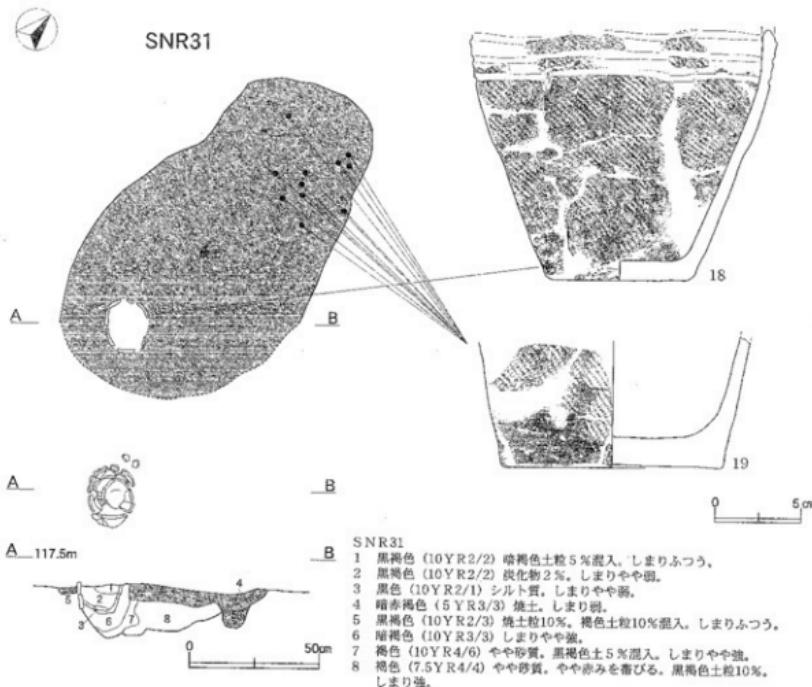
第18図 SR17・SR23土器埋設遺構



第19図 SR24土器埋設遺構・SNR19土器埋設焼土遺構（1）



第20図 SNR19土器埋設焼土遺構(2)・SNR29土器埋設焼土遺構



第21図 SNR31土器埋設焼土遺構・SK01土坑

(3) 土坑

土坑はA区・B区・G区から検出された。分布はまばらであるが、G区では5基の土坑が集中していた。出土遺物等から、A区・B区の土坑は縄文時代中期末から後期初頭にかけて、G区の土坑群は縄文時代晩期に属すると考えられる。

S K01土坑（第21図、図版6）

[検出位置] K P69グリッド（G区西部）に位置する。

[確認状況] トレンチ調査中にV層（地山面）において確認した。なお、IV層以上は削平を受けている。

[重複] 特にないが、南西の一部が根痕によりきかれている。

[平面形と規模] 長軸0.86m、短軸0.65mのすんぐりとした楕円形を呈する。確認面からの深さは0.16mであるが、上部は削平を受けており本来の深さではないと思われる。長軸方向はN-11°-Eである。

[壁] 外壁は緩やかに立ち上がる。

[底面] 楕円形でほぼ平坦である。

[覆土] 3層に分層された。

[出土遺物] 20は東部の床面（3層）より出土した磨石である。大きさは11.7×12.2×5.0cmで、やや歪んだ円形を呈する。扁平な碟の両面に磨痕があるが、特に片面が顕著である。側面には敲打痕が認められる。

S K06土坑（第22図、図版6）

[検出位置] K Q70グリッド（G区西部）、S K01の北西約2mに位置する。

[確認状況] S K01の検出をうけて周辺グリッドを拡張して調査を行ったところ、IV層を精査中に確認した。ただし、IV層上面まで削平を受けており、本来はそれより上面からの掘り込みの可能性もある。

[重複] なし。

[平面形と規模] 長軸1.22m、短軸0.90mの楕円形を呈する。深さは0.45mである。長軸方向はN-22°-Wである。

[壁] 外壁は西側では急に、東側では緩やかに立ち上がる。

[底面] 楕円形でやや丸みを帯びる。

[覆土] 6層に分層された。1層には径のやや大きな炭化物が顕著に認められた。

[出土遺物] 覆土中からの遺物の出土はない。

S K07土坑（第22図、図版6・10）

[検出位置] K Q70グリッド（G区西部）に位置する。

[確認状況] S K01の検出をうけて周辺グリッドを拡張して調査を行ったところ、III層下部からIV層上部を精査中に確認した。

[重複] 南東部でS K08、西部でS K11と切り合い関係にある。当遺構が最も新しい。

[平面形と規模] 長軸1.68m、短軸1.20mの隅丸長方形を呈する。深さは0.50mである。長軸方向はN-70°-Wである。

- [壁] 外壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南東側ではやや緩やかに立ち上がる。
- [底面] 楕円形でやや丸みを帯びる。
- [覆土] 10層に分層された。確認時にはほぼ全面、つまり1～3層で径の大きな炭化物が顕著に認められた。中央部には径の大きな炭化物をとりわけ多く含んだ黒色土があり、その周囲にドーナツ状に砂質の灰黄褐色土が分布していた。
- [出土遺物] 底面よりやや上、8・9層より縄文時代晚期の土器片3点が出土している。21はそのうちの2点が接合したもので、薄手の鉢形土器の底部付近であり、節の小さいR L縄文が施されている。

S K 08土坑（第22図、図版6）

- [検出位置] K P70・K Q70グリッド（G区西部）に位置する。
- [確認状況] S K01の検出をうけて周辺グリッドを拡張して調査を行ったところ、Ⅲ層下部からⅣ層上部を精査中に確認した。なお、当遺構東部はトレンチ調査では確認困難なため掘りすぎたものである。
- [重複] 北西部でS K07と切り合い関係にある。当遺構が古い。
- [平面形と規模] 長軸が不明であるが1.50m前後、短軸0.83mのゆがんだ長楕円形を呈する。深さは0.26mである。推定の長軸方向はN-41°-Wである。
- [壁] 外壁はやや急に立ち上がる。
- [底面] 長楕円形でやや丸みを帯びる。
- [覆土] 3層に分層された。上面中央に炭化物が顕著に認められた。
- [出土遺物] 22は覆土中から出土した土器で、底部片である。胎土は粗く、表面は摩滅しており、詳細は不明である。

S K 11土坑（第22図、図版6）

- [検出位置] K Q70グリッド（G区西部）に位置する。
- [確認状況] S K01の検出をうけて周辺グリッドを拡張して調査を行ったところ、Ⅲ層下部からⅣ層上部を精査中に確認した。なお、当遺構西部はトレンチ調査では確認困難なため掘りすぎたものである。
- [重複] 東部でS K07と切り合い関係にある。当遺構が古い。
- [平面形と規模] 長軸・短軸ともに不明であるが、それぞれ1.60m、1.20m前後と推測され、楕円形を呈する。深さは0.30mである。推定の長軸方向はN-34°-Wである。
- [壁] 外壁はやや急に立ち上がる。
- [底面] 長楕円形でやや丸みを帯びる。
- [覆土] 3層に分層された。上面中央に炭化物が顕著に認められた。
- [出土遺物] 覆土上部より、縄文時代晚期の土器片が出土している。いずれも小破片で、摩滅が著しいが、器面には節の小さいR L縄文が施されている。

S K 12土坑（第23図、図版7）

- [検出位置] N L49・N L50グリッド（A区北東部）に位置する。
- [確認状況] IV層を精査中に確認した。なお、当遺構西部はトレンチ調査では確認困難なため

掘りすぎたものである。

[重複] 特になし。

[平面形と規模] 長軸1.12m、短軸は不明であるが0.80m前後と推測され、すんぐりとした橢円形を呈する。深さは0.22mである。推定の長軸方向はN-28°-Wである。

[壁] 外壁は緩やかに立ち上がる。

[底面] 楕円形でほぼ平坦である。

[覆土] 3層に分層された。

[出土遺物] 覆土中からの遺物の出土はない。

S K14土坑(第23図、図版7・10)

[検出位置] NC53グリッド(B区中央)に位置する。

[確認状況] IV層を精査中に確認した。

[重複] なし。

[平面形と規模] 長軸1.09m、短軸0.84mの隅丸長方形を呈する。深さは0.40mである。長軸方向はN-50°-Eである。

[壁] 外壁ははじめほぼ垂直に立ち上がり、その後緩やかに外反する。

[底面] 楕円形でほぼ平坦である。

[覆土] 3層に分層できた。中央部で若干の炭化物が認められた。

[出土遺物] 当遺構においては41点、剥片4点と比較的多くの遺物が出土しており、床面直上または3層中で径0.15~0.30mの蝶が6点出土している。23は覆土中からの土器片が接合した、ミニチュア土器である。復元すると底部から口縁部までが残存している。器高8.4cm、推定の口縁径7.4cm、底部径3.8cmの深鉢形土器である。器壁は非常に薄く焼成は良好である。口縁の形状は4単位の波状になると推測される。器形は胴部がやや膨らみながら立ち上がり、口頸部は若干くびれる。底辺部がやや張り出している。口縁部から胴部上半にかけては、数条の平行沈線による波形文・曲線文・渦巻文が組み合わされた複雑な文様が描かれ、胴部下半は全面に刺突文が施される。刺突は、竹管状工具により横方向から連続的に行われている。24は口縁部の破片である。口縁部下に沈線が横走り、その間に円形刺突文が横に連続して並ぶ。25も円形刺突文を有する深鉢形土器の胴部片である。沈線によって曲線文が描かれ、区画された範囲が磨消を受けているが不十分であり、捺りの判別のつかない単節縄文が残る。26~30は深鉢形土器片であり、同一個体である。26・27は口縁部であり、口縁は緩やかな波状口縁である。L R縄文を地文として3条の平行沈線などによって、入り組み文が描かれる。28・29は口縁直下の胴部片で文様は前記のもの同様である。30は胴部片である。31~33は深鉢形土器片であり、同一個体である。31・32は胴部上半の破片であり、沈線によって曲線入り組み文が描かれる。33は胴部下半の破片であり、下部は無文となる。いずれも地文としてL縄文が施される。34は胴部片であり、太めの沈線によって直線・曲線の入り組み文が描かれる。

SK 20土坑（第24・25図、図版7・10）

[検出位置] NA53グリッド（B区中央南寄り）に位置する。

[確認状況] 表土除去を行ったところV層で確認した。なお、この地点はIV層まで耕作のため削平を受けている。

[重複] 東半がSK 21と切り合い関係にある。当遺構が新しい。

[平面形と規模] 長軸は不明であるが1.50m前後と推測され、短軸0.93mの楕円形を呈する。深さは0.26mである。推定の長軸方向はN—11°—Eである。

[壁] 外壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底面] 楕円形でほぼ平坦である。中央で段がつき北半が若干深くなる。

[覆土] 6層に分層された。

[出土遺物] 当遺構においては土器片48点、剥片4点、磨石1点と比較的多くの遺物が出土している。35は壺形土器の口縁部から頭部にかけて、口径は11.5cmである。口縁部は無文で、頭部に2条の平行沈線が横走する。口縁部下約1cmに径0.4cm程度の補修孔が3つ穿たれている。36～41はいずれも磨消文様帶をもつ深鉢形土器の胴部片である。36は地文としてLR縄文を施した後、斜め平行や曲線の沈線を施し、磨消を行っている。下方には無文帯があり、連続S字状の沈線が垂下している。37は同一個体であるが、こちらは斜めの直線的な磨消帯と渦巻状の沈線を併せもつ。38～41も地文としてLR縄文が施され、磨消帯をもつ。42は口縁部が外反し、胴部が膨らむ深鉢形土器の口縁部である。口縁部直下に2条の平行沈線が横走し、LR縄文の施された文様帶があり、また沈線が横走する。43・44は地文としてLR縄文が施され、細い沈線が平行に数条横走する。45は円盤状土製品である。胴部片が整形され、表面にはLR縄文が施されている。46は磨石で、ほぼ円形である。全面に磨痕がみられる。

SK 21土坑（第26図、図版7・10）

[検出位置] NA53グリッド（B区中央南寄り）に位置する。

[確認状況] 表土除去を行ったところV層で確認した。なお、この地点はIV層まで耕作のため削平を受けている。

[重複] 東半がSK 20と切り合い関係にある。当遺構が古い。

[平面形と規模] 長軸は不明であるが1.50m前後と推測され、短軸0.93mの楕円形を呈する。深さは0.26mである。推定の長軸方向はN—11°—Eである。

[壁] 全体に緩やかであるが、一部急に立ち上がる。

[底面] 東側が一段低く、ほぼ平坦である。西側のテラスも平坦である。

[覆土] 7層に分層された。

[出土遺物] 遺物は、土器片が25点出土している。47・48はLR縄文が施される。48は底部付近であり、下部に櫛目状工具による条痕が残る。49～53は深鉢形土器片であり、49～51と52・53はそれぞれ同一個体である。49・50は口縁部であり、49には突起がある。地文としてLR縄文が施された後に、沈線によって区画され、磨消手法がとられる。

口縁部がやや肥厚し、その直下に2条の平行沈線が横走する。そこから磨消帯が垂下する。52・53も地文としてLR繩文が施され、磨消帯が垂下し、曲線文も施される。54は複数の細い沈線により入り組み文が施される。

S K 25土坑（第25図、図版10）

- [検出位置] N K50グリッド（B区北西部）に位置する。
- [確認状況] III層からIV層にかけてを精査中に確認した。IV層上面にあたる。
- [重複] なし。
- [平面形と規模] 径1mの歪んだ円形を呈し、深さは0.78mである。
- [壁面] 緩やかに立ち上がる。北側が急であり、やや内湾する。
- [底面] 北側が深くなっており、全体的に丸みを帯びている。
- [覆土] 4層に分層された。
- [出土遺物] 土器片が1点出土した。55は深鉢形土器の口縁部であり、口縁直下に数条の平行沈線が横走する。表面は著しく摩滅している。

S K 26土坑（第25図）

- [検出位置] N H52グリッド（A区東部）に位置する。
- [確認状況] III層からIV層にかけてを精査中に確認した。IV層上面にあたる。
- [重複] なし。
- [平面形と規模] 長軸1.44m、短軸1.07mの歪んだ橢円形を呈する。深さは0.36mである。長軸方向はN-44°—Eである。
- [壁面] 緩やかに立ち上がる。
- [底面] 全体に凹凸があり、やや丸みを帯びる。
- [覆土] 4層に分層された。
- [出土遺物] 遺物の出土はない。

S K 27土坑（第25図、図版7）

- [検出位置] M R55グリッド（B区東部）に位置する。
- [確認状況] III層からIV層にかけてを精査中に確認した。IV層上面にあたる。
- [重複] 南東部でS K28と切り合い関係にある。当遺構が新しい。
- [平面形と規模] 長軸0.64m、短軸0.55mの歪んだ橢円形を呈する。深さは0.16mである。長軸方向はN-11°—Eである。
- [壁面] 急に立ち上がる。
- [底面] 凹凸があるがほぼ平坦である。
- [覆土] 7層に分層された。
- [出土遺物] 土器片が2点出土した。いずれも小片である。

S K 28土坑（第25図、図版7・10）

- [検出位置] M R55グリッド（B区東部）に位置する。
- [確認状況] III層からIV層にかけてを精査中に確認した。IV層上面にあたる。
- [重複] 南西部でS K27と切り合い関係にある。当遺構が古い。

【平面形と規模】 長軸は不明であるが1.50m前後と推測され、短軸0.93mの楕円形を呈する。深さは0.26mである。推定の長軸方向はN—11°—Eである。

【壁】 緩やかに立ち上がる。

【底面】 やや丸みを帯びている。

【覆土】 7層に分層された。

【出土遺物】 土器片が2点、剥片が1点出土している。56は格子状に撲糸文が施される。57は地文にL R縄文が施され、上部に2条の平行沈線が横走する。

S K32上坑（第26図）

【検出位置】 NA53グリッド（B区中央）に位置する。

【確認状況】 III層からIV層にかけてを精査中に確認した。当遺構の南西半は範囲確認調査時のトレーナによって破壊されていた。

【重複】 なし。

【平面形と規模】 ほぼ半分程度壊されていると推測され、全容は把握しがたいが、残存するプランから判断すると、長軸0.80m、短軸0.60mと推測される。推定の長軸方向はN—44°—Wである。

【壁】 緩やかに立ち上がる。

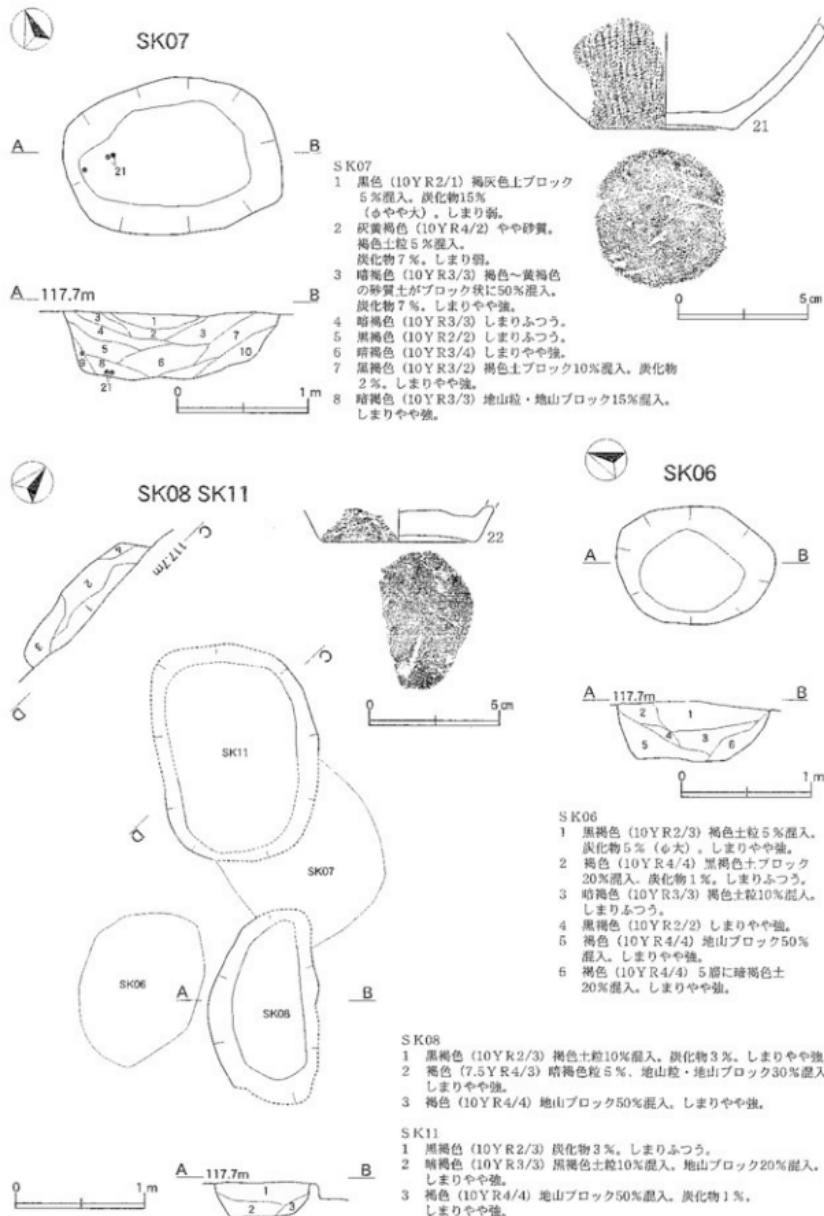
【底面】 丸みを帯びている。

【覆土】 3層に分層された。覆土中に径の大きな炭化物が顕著に認められた。

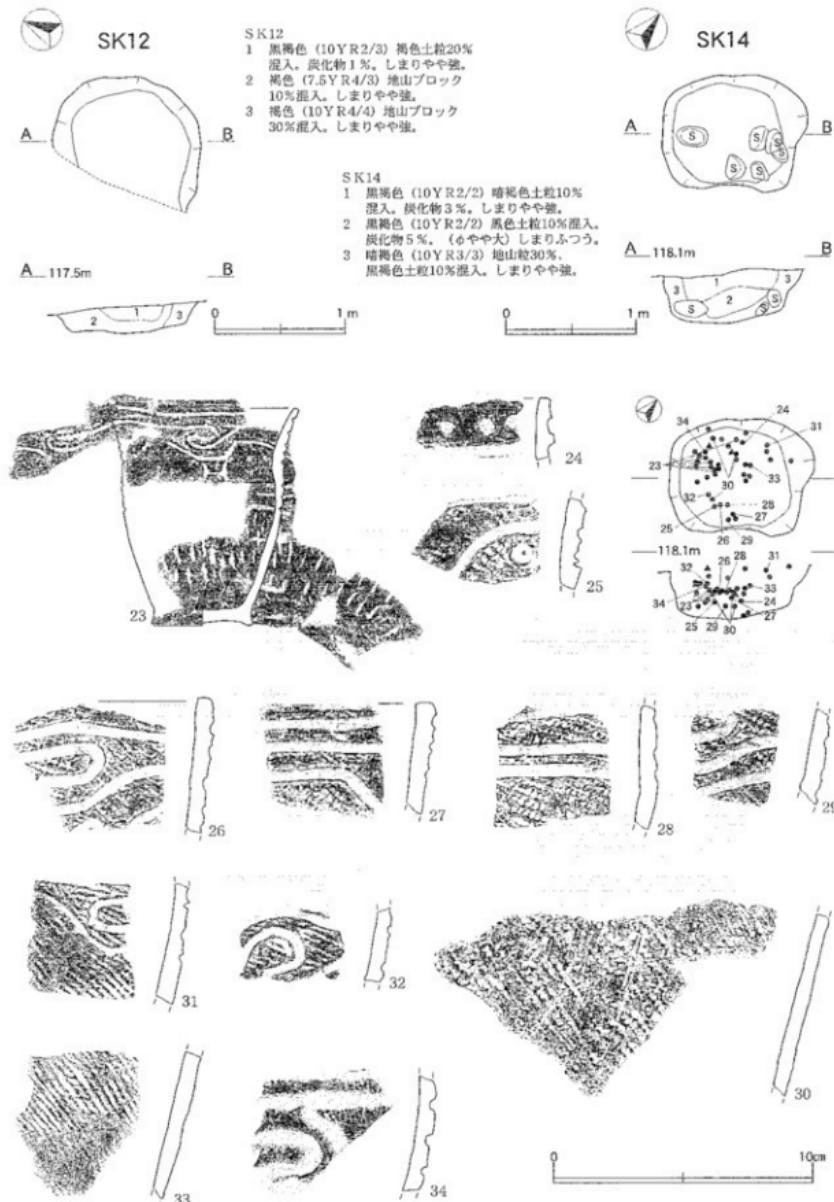
【出土遺物】 小土器片が1点出土した。

(4) その他の遺構

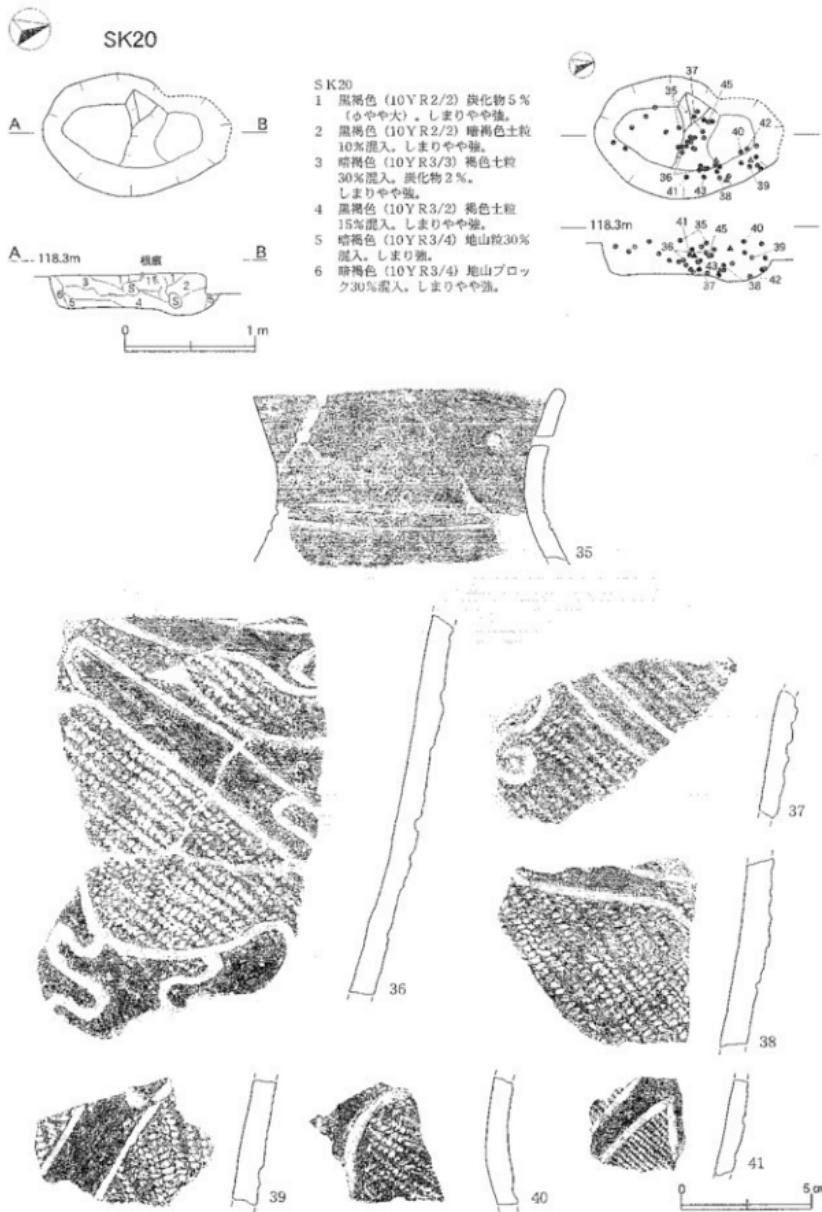
その他の遺構としては、溝跡2条、柱穴様ピット2基が検出された。いずれもA区での検出である。溝跡はいずれも、覆土中から現代の陶器が出土していること、平面形が不整であることなどから詳細な記述は割愛する。また、柱穴様ピットは、2基が近接しているが、単独であり、かつ、覆土中からの遺物出土がないため時期・性格の特定が非常に困難である。よって同様に詳細な記述は行わない。



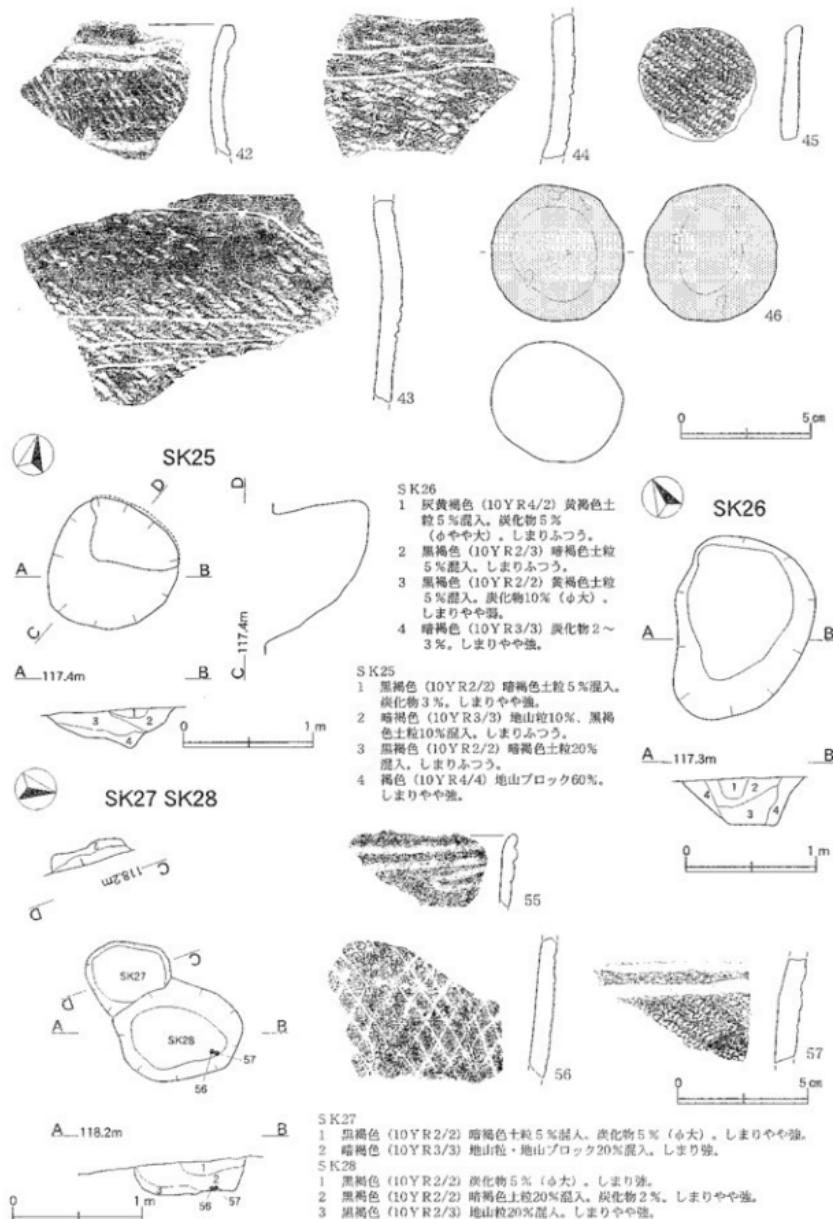
第22図 S K06・07・08・11土坑



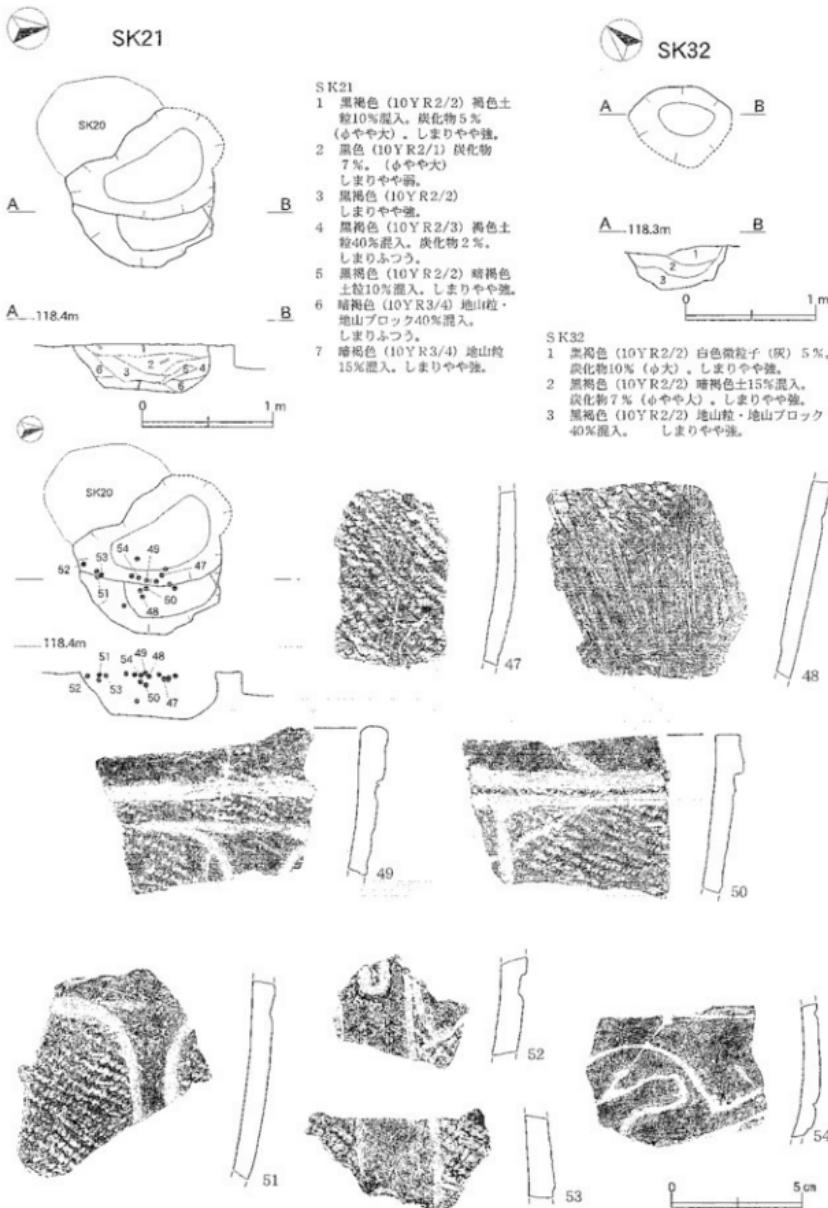
第23図 SK12・SK14土坑



第24図 SK20土坑・出土遺物（1）



第25図 S K20土坑出土遺物 (2) • S K25 • S K26 • S K27 • S K28土坑



第26図 SK21・SK32土坑

第3節 遺構外出土遺物

1 土器

遺構外から出土した土器は、縄文時代早期・前期・中期・後期のもので、このうち早期のものは少量であった。遺構外出土の土器の記述は、文様・胎土などから判断し、時期別に分類した。これに底部資料を加えた。

第I群土器（第27図1～13、図版11）

縄文時代早期後葉の土器である。

1類（1～7）：胎土中に纖維、白色の砂粒を含む土器である。1～4は同一個体である。口脣部（2）がややくびれ、胴部（4）がやや膨らんだ小さな平底（1）の土器で、底辺部が張り出す。全面にR L縄文が施され、底面にも同一原体での施文が見られる。5～7はいずれも底部付近の土器片で、底辺部が張り出す。体部にはいずれもRの撫糸文が施文され、5・6は底部にも同一原体での施文がなされる。

2類（8・9）：外面および口脣部に縄文が施される土器で、口脣部には体部と同じ原体（R L）で施文される。口縁部は直立する。

3類（10～13）：胎土に纖維を多く含み、表面にR L縄文が施される。内面は指頭で調整され、緩い凹凸がある。

第II群土器（第28図14～23、図版11）

縄文時代前期の土器である。

1類（14）：外面全面に条間の広いRの撫糸文が施文される土器で、胴部から口縁部にかけてはほぼまっすぐに立ち上がる。胎土には纖維を含む。口縁から4cm程度下に2つの補修孔が穿たれている。

2類（15～17）：口脣部に指頭の圧痕を施す土器である。いずれも胎土に纖維を含む。15は口縁部がやや外反し、口脣部が先細る。体部にはR L縄文が施される。16・17は口脣部が丸みをもち、体部にはLの撫糸文が施される。

3類（18～20）：体部に羽状縄文を施す土器である。いずれも胎土に纖維を含む。18はR L縄文とR L縄文を交互に施文し、原体の施文方向を変化させて、羽状縄文を表出したものである。19・20は結節羽状縄文である。

4類（21～23）：体部に条線による施文がなされる土器である。21・22は体部にやや幅が広く短い条線が不規則にやや斜め方向に施されている。23は横方向である。

第III群土器（第29図24～36、第30図37・38、図版12）

縄文時代中期後葉の土器である。

1類（24～27）：口端部が肥厚し、太い凹線文を施文する土器である。全体的に厚手である。24は波状口縁で、波頂部には非常に太い凹線により渦巻文が施文される。非常に器壁が厚く、大型の土器である。25～27はいずれも口縁部がやや外反する。肥厚な口端に凹線文が施され、その下にはR L縄文が施文される。26・27は口端の凸部が非常に丁寧に調整されているが、25は凸部と口脣部に指で調整した痕が残る。

2類（28～30）：28・29は波状口縁で、波頂部の下と口脣部に刺突を有する土器である。刺突のあ

る口縁直下は無文である。28は無文帯の下に、太い沈線によって波状・横S字状の文様が施文される。

3類（31～34）：沈線によって区画された磨消繩文帯を有する土器である。いずれも地文として繩文を施文した後、沈線によって区画し、磨消を行っている。31は地文としてLR繩文を施文した後、やや太めの沈線により大きな渦巻文を施文し、沈線区画内を磨り消している。32は口縁部でやや内湾する。地文はLR繩文で、口縁下に弧状の沈線により区画された、磨消の無文帯がある。33は非常に薄手の土器で、沈線が細い。34は地文として、RL繩文が施文され、平行沈線が垂下し、磨り消されている。磨消の一部には下方から棒状工具により2列の刺突が連続して並ぶ。

4類（35～38）：折り返し口縁の土器である。35は折り返し口縁下に沈線が横走する。地文は表面の摩滅が著しいため判別困難である。36は深鉢形土器で、口縁部が緩やかに外反し、胴部が膨らむ器形である。4個の突起をもつ波状口縁を呈する。体部には全面LR繩文が施されている。口縁部は折り返し口縁であるが、磨かれた痕跡があり、折り返しの段差や、口縁部直下の繩文が消えている箇所もある。37は深鉢形土器で、36と同様の器形である。口縁部には4単位と推測されるボタン状の突起を有する。ボタン状突起には円形の刺突が施される。折り返し口縁であり、折り返し部分を磨いて調整した痕跡が残る。折り返し部分は無文である。折り返し部分直下と胴部中程に2条の平行沈線が横走し、その沈線によって区画されたところに褚円文・弧状文・渦巻文などの入り組み文が描かれる。突起に対応した部分に渦巻文や円形刺突が施される。地文として、LR繩文が施文される。38は深鉢形土器で、底部から胴部上半まで、ほぼまっすぐに緩やかに広がり、口縁部にかけて垂直に立ち上がる。表面が摩滅しているが、全面にLR繩文が施される。

第IV群土器（第31図39～55、第32図56～84、第33図85～93、図版13）

1類（39～44）原体側面圧痕によって文様が表出された土器である。39は波状口縁で、口縁部が外反する。波頂部直下にボタン状突起を貼り付け、その下にLR繩文の圧痕により渦巻文を表出している。口縁直下にも2条平行に圧痕が施される。ボタン状突起には中央に刺突が施され、波頂部口唇には刻み目が入る。41も波状口縁で、波頂部下にボタン状突起を有し、口縁直下に2条平行に圧痕を施す。39・40はいずれも口縁部であるが、39は口縁下に2条の平行圧痕と渦巻状圧痕が施され、40は口縁部に数条の平行圧痕により直線的な文様が表出される。43はボタン状突起を有し、原体側面圧痕により曲線的な文様が表出される。原体の種類は39・40がLR繩文、40～43がRL繩文である。なお、44は口縁下にボタン状突起を有し、その直上に刺突が施される。ボタン状突起より横走する沈線によって無文帯とLR繩文が施された文様帯とが区画される。原体側面圧痕をもたないが、ボタン状突起・沈線の施文などにより1類に加えた。

2類（45～48）：直線的・曲線的な太めの沈線によって文様が描かれ、区画内に連続した刺突を有する土器である。45は平行沈線により横方向の文様帯と斜め方向の文様帯が区画され、粗くではあるが磨消が施されている。無文帯には円形の刺突が並び、磨消帯以外には地文として捺りの判別のつかない単節繩文が施され、沈線による渦巻文等の曲線文が描かれる。46・47も同様に沈線によって区画された刺突を有する磨消帯と、地文上に沈線による曲線文を有する。48は曲線と円形に沈線を施文した後、刺突を施したものである。

3類（49～63）：繩い沈線により直線・曲線・渦巻・S字状などの入り組み文が施文される土器である。49～55が地文を施文する土器、56～63は沈線のみの土器である。49～52は口縁部である。49は

平行沈線による直線文と弧状文が組み合わされた文様構成で、地文はLR縄文である。50・51は波状口縁の波頂部であり、口縁に沿った平行沈線や、S字状の入り組み文・弧状文が施文される。波頂部口唇には刻み目が3つ並ぶ。地文はいずれもLR縄文である。52～55はいずれも同様の文様構成となる。56～59は口縁部片である。56は波状口縁の波頂部であり、沈線により口縁に沿った平行沈線、そこから垂下する連続S字状文が施文される。57・58の沈線施文も同様である。59は複数の沈線が横走する。60・61は沈線による曲線文が施文される。62・63は口縁部破片であり、地文が施されず、沈線によって平行直線・曲線文が施文される。器壁が薄く、焼成も非常に良好である。

4類（64～68）：地文として撚糸文が施文された後に沈線によって施文された土器である。64～66はやや条間の開いたしの撚糸文によりやや斜め方向に地文が施された後、沈線により直線・曲線文が施文される。64・65はやや外反する。66は口縁部である。67・68は表面の摩滅が著しく、原体の種類の判別は困難であるが、縱方向に撚糸文が施文される。

5類（69～78）：地文として部体に竹管状工具による刺突が連続して施される土器である。69・70は同一個体で、それぞれ、胴部上半、底部である。胴部がやや膨らみ、口縁部が外反する器形となる。胴部下半には竹管状工具による横方向（やや斜め）からの刺突が横方向に連続する。胴部上半は平行沈線と横長の格円文による重層文が細い沈線によって施文される。71～78も同様に竹管状工具による横方向（やや斜め）からの刺突が横方向に連続する。

6類（79）：79は地文としてLR縄文が施文され、平行沈線が横走する。斜め方向に施文された平行沈線間に円形刺突が連続する。

7類（80～82）：口縁部に貼り付けの隆帯が横走し、棒状工具による刻み目が入る土器である。80は波状口縁の波頂部で、波頂部とその下にボタン状突起が貼り付けられ、円形の刺突が施される。貼り付け隆帯は下の突起から横方向にのび、連続的に刺突による刻み目が施されている。81も口縁部であり、やや外反する。口縁部は無文となり、直下の貼り付け隆帯に刺突列が並ぶ。82も同様に貼り付け隆帯に刺突列が並ぶがその下に沈線が横走する。

8類（83・84）：口縁直下の隆帶に、円形の刺突列が並ぶ土器である。いずれも口縁部である。83はおそらく波状口縁であり、口縁直下に巡る隆帶と、波頂部から垂下する隆帶に円形の刺突が連続して施される。体部にはLR縄文が施され、隆帶に沿って沈線が巡る。

9類（85・86）：85は波状口縁の波頂部であり、波頂部直下にボタン状突起が貼り付けられ、そこから貼り付け隆帯が垂下する。隆帯には斜め方向の刻み目が連続し、波頂部口唇にも2つの刻み目が入れられる。隆帯からは矢羽状に沈線による文様が展開する。86も文様構成は同様であるが、沈線による曲線文である。

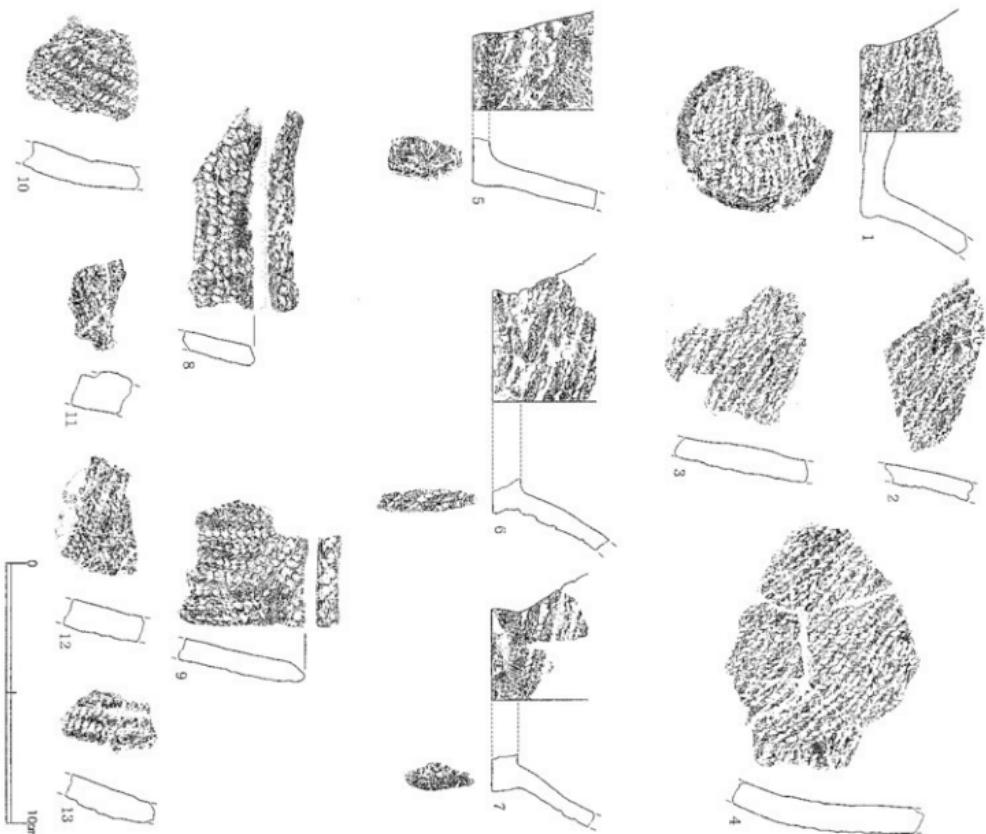
10類（87～92）：撚糸文を格子状に施文した土器である。87～89は原体が判別できないが、90～92はLR縄文の撚糸である。90は条間が狭く、91・92は条間が広い。

11類（93）：地文に縄文のみが施文されるほぼ完形の粗製土器である。93は口縁部を欠いた深鉢形土器で、胴部が膨らみやや丸みをもった器形である。地文として、方向の一定しないLR縄文の撚糸文が施文される。また、縱方向に櫛目状工具による条痕も見られる。

底部資料（第34図94～102）

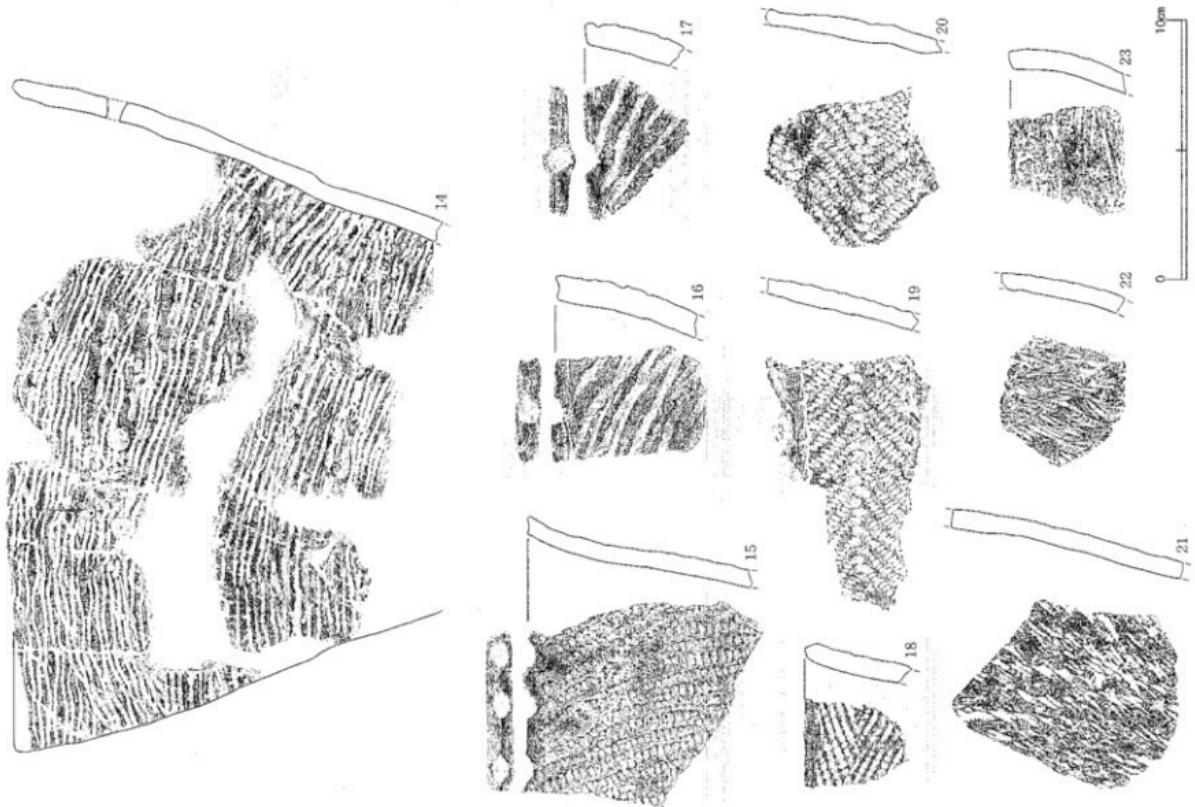
94～102は土器製作時に置かれたものの圧痕が残る底部資料である。94・95は網代旗のある底部で

ある。96～98は籠葉の様な繊維の細かい植物の圧痕が残る底部である。99・100は木葉痕の残る底部で、葉脈痕も確認できる。101はL.R.纏文の圧痕が残る底部であるが、回転施文ではなく敷かれたようである。102は内面にアスファルトの付着したミニチュア土器の底部資料である。

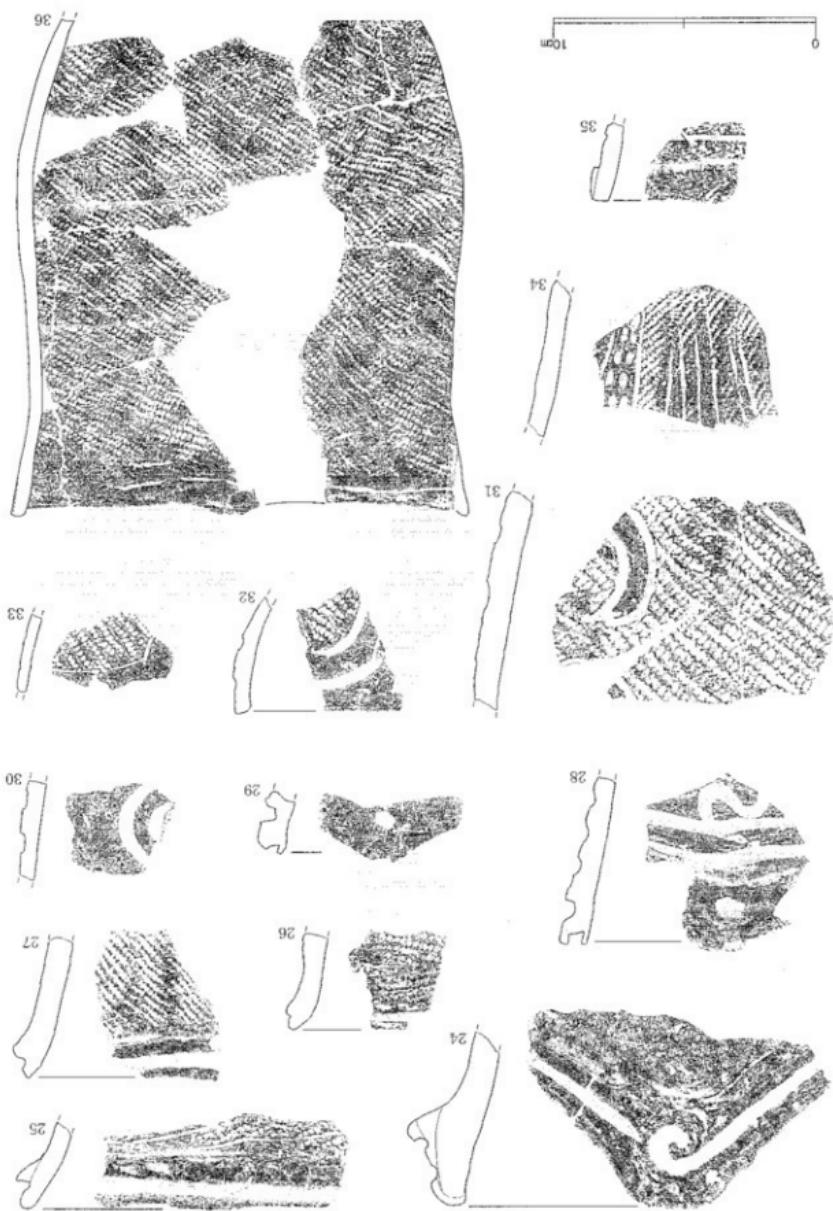


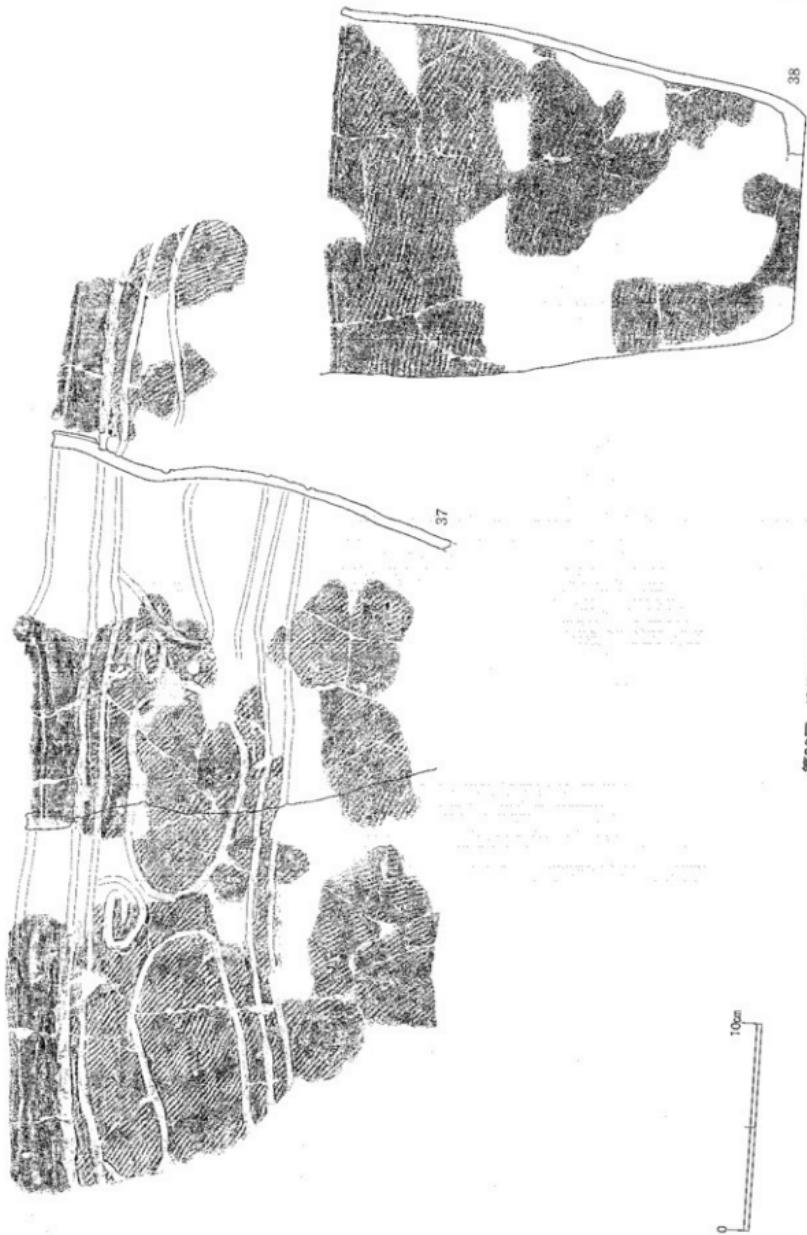
第27図 遺跡外出土遺物(1)土器

第28図 遺構外出土遺物（2）土器

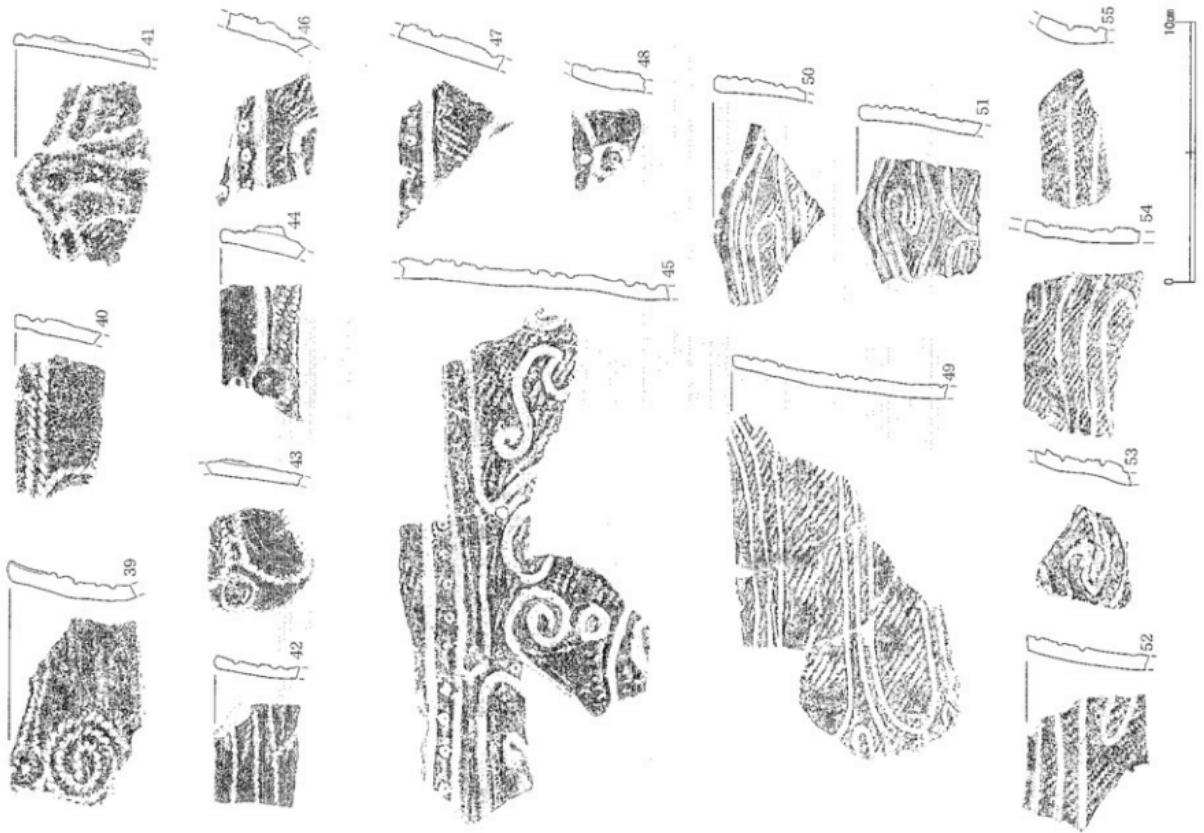


第29图 遗物出土遗物(3) 土器



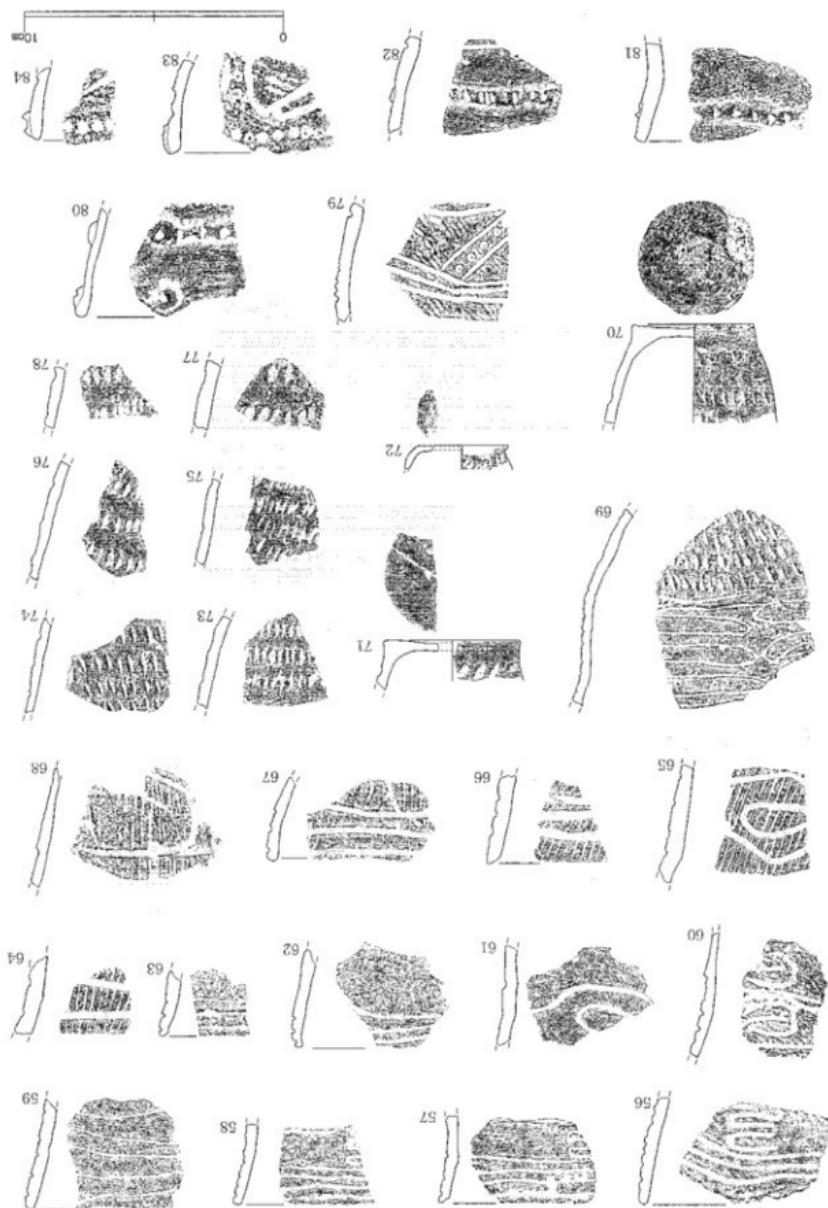


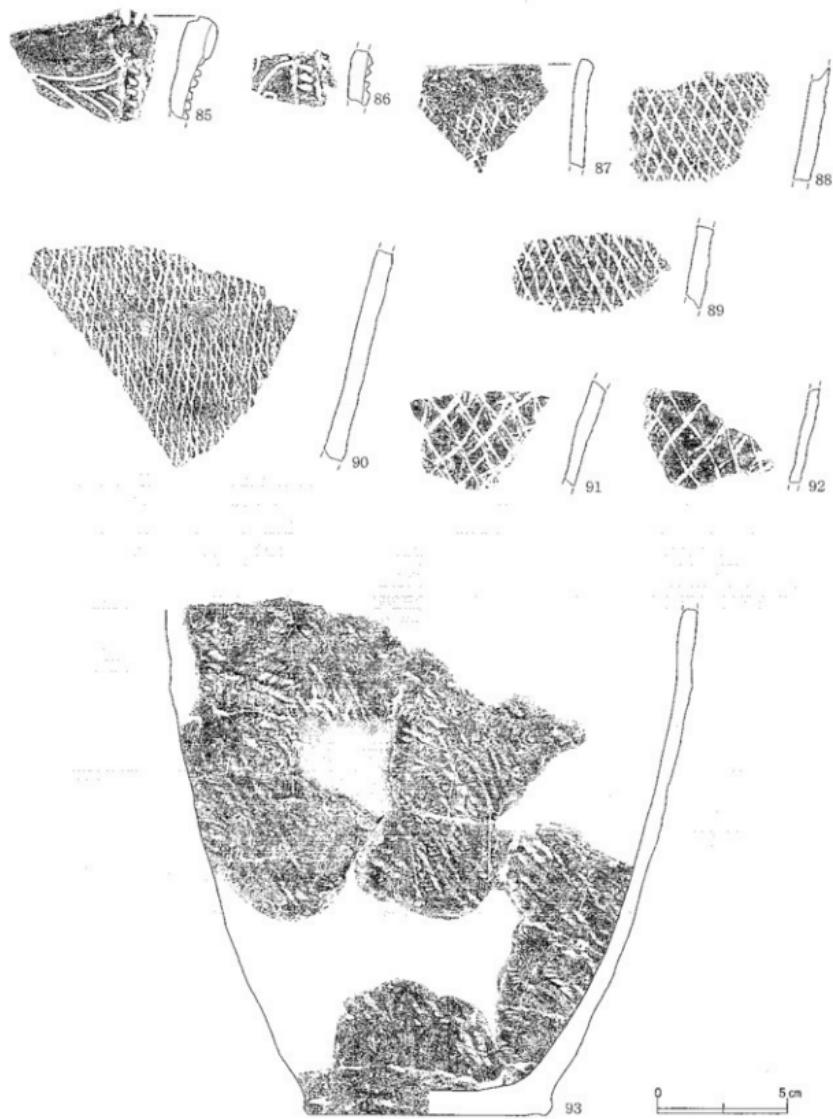
第30図 通構外出土遺物(4) 土器



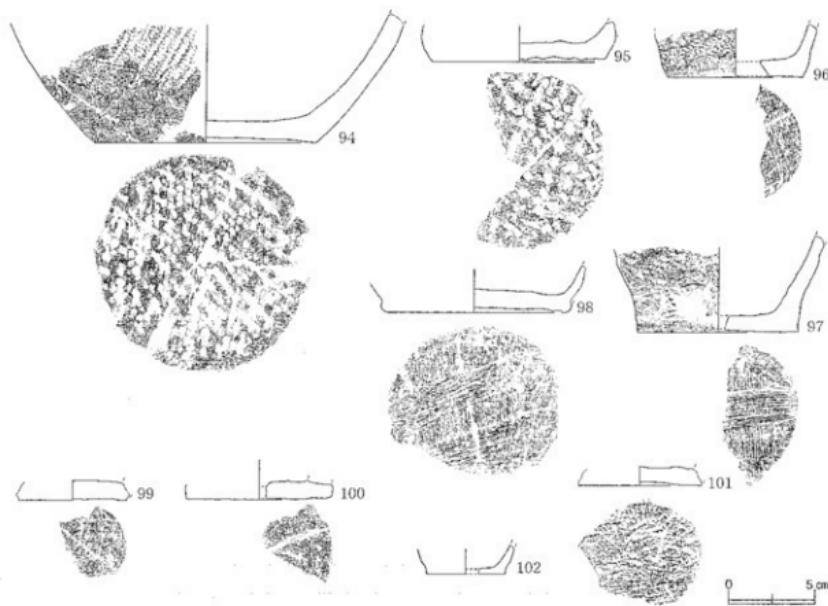
第31圖 遺構外出土遺物（5）土器

第32图 遗物出土遗物(6) 土器





第33図 遺構外出土遺物（7）土器

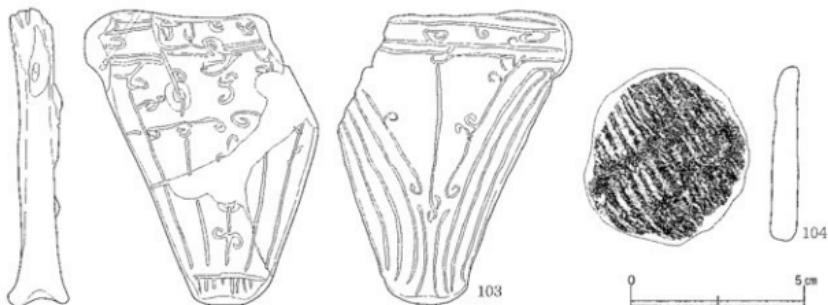


第34図 遺構外出土遺物（8）土器

2 土製品

板状土偶（第35図103、図版14）：逆三角形を呈し、頭部から右肩にかけてが欠損している。左肩の部分には直径2mmほどの穴が斜めに貫通している。全面に胸部と下腹部に小さい丸いふくらみを付けている。両面に沈線による直線の文様が三角形に施文され、それに小さな渦巻様の文様が付される。

円盤状土製品（第35図104、図版14）：土器片胴部を利用して、円形に整形している。側面に部分的に研磨の痕跡が認められる。



第35図 遺構外出土遺物（9）土製品

3 石器

遺構外から出土した石器は全部で63点ある。その内訳は、石鎌6点、石錐4点、石槍2点、石匙12点、石範7点、トランシェ1点、スクレイバー19点、打製石斧6点、磨製石斧3点、半円状扁平打製石器1点、凹石1点、石核1点である。

これらの石器は、伴出した土器から、縄文時代前期～後期前葉のものと考えられる。出土層位はⅢ層がほとんどであるが、Ⅳ層からの出土もあり、V層以下からは120・153など、数点が出土している。

石鎌（第36図105～110、図版14）

6点出土した。石質は110がチャートであるほかは、いずれも頁岩である。いずれも表裏ともに押圧剥離による丁寧な調整加工が施されている。105・106は基部に挿入のある凹基無茎鎌であり、105は両面に主要剥離面・先行剥離面を残し、素材の打面側に石鎌尖頭部が位置する。106は両面ともに深い剥離調整が施される。107～109はいずれも平基有茎鎌である。いずれも裏面に主要剥離面を残し、107・109は素材の側縁側に、108は素材の末端側に、それぞれ尖頭部が位置する。107・108は表面がふくらみ、カマボコ形の断面形を呈する。108は非常に細身・長身であり、表面側が深めに剥離調整されている。110は凸基有茎鎌であり、尖頭部が欠損している。基部付近が最も厚みをもつ。105・108は基部にアスファルトが付着している。

石錐（第36図111～114、図版14）

4点出土した。石質はすべて頁岩である。111は頭部が、113・114は錐部がそれぞれ欠損している。111は側縁に非常に微細な剥離調整が施されており、細長い錐部先端が作出されている。錐部先端が摩滅し、明確な使用的痕跡が残る。112は側縁にも連続的な調整が施されている。113は頭部に打面が残存しており、調整は胴部下半から錐部にかけて施されている。素材の一方の側端に両面から調整して錐部を作出したものである。114は頭部・錐部ともに両面から調整が施されている。頭部はつまみ状に丁寧に加工されているほか、側縁部に急角度の調整を連続的に行い、刃部を作出していることから、錐以外の用途にも使用したものと推測される。

石槍（第37図115・116、図版14）

2点出土した。石質は115が頁岩、116はチャートである。115・116ともに基部が丸みを帯びる木葉形である。ともに両面に主要剥離面・先行剥離面を残すが、特に裏面には広く残っている。115は素材の側縁側に、116は素材の縁辺側にそれぞれ尖頭部が位置する。115は両面ともに側縁に広く浅い剥離調整を急角度で施し、尖頭部・基部ともにほとんど調整は施していない。116は両面側縁に浅く狭い剥離調整を施している。こちらは尖頭部にも調整を施している。

石匙（第37・38図117～128、図版14）

12点出土した。石質は121はチャートで、それ以外はすべて頁岩である。つまみ部と器体との関係から大きく縦型石匙（117～127）と横型石匙（128）に分かれる。素材とつまみ部の作出される箇所の関係は、122・123・126を除き、そのほとんどが素材剥片の打面側につまみ部を作出している。

117～122は、素材である縦長剥片の背面全面に主に二次加工を加え、比較的扁平な刃部を作出した一群である。刃部は両側縁がわずかに湾曲し、末端縁が器長軸に対し直交するもの（117～119）、斜めになるもの（120・121）に分かれる。腹面の二次加工はつまみ部以外では、すべて左側縁および末縁に限定される。117・118は撥形に近く、左側縁が湾曲し、右側縁はほぼ直行する。末縁縁は器長

柄に対し直交している。いずれも裏面の二次加工はつまみ部、左縁辺、末端縁に加えられる。表面には全面に二次加工が施されるが、左縁辺には器幅半分ほどの長い二次加工痕が並列している。119は形状は撥形に近く、117・118に類似しているが、二次加工の規則性があまりない。120は木葉形の器体につまみ部が付く形態である。裏面の二次加工はつまみ部を除くと左縁辺のみである。121はいわゆる三日月形に近い。裏面の二次加工はつまみ部を除き左側縁と末端縁に施されている。表面の左側縁には長く、角度の緩い二次加工痕が、右側縁には短く急角度の二次加工痕がそれぞれ並列している。122は裏面左側縁と、表面全面に二次加工痕があり、121と類似しているが、器体下半が欠損しているため詳細は不明である。

123～127はつまみ部を除き、素材剥片の表面縁辺部にのみ二次加工を施し刃部を作出した一群である。123はほぼ円形の器体に非常に小さなつまみ部が付く。右側縁には打面が残り、素材剥片の末端縁である左側縁に刃部が作出されている。二次加工の痕跡は裏面ではなく、表面の左側縁にある。124は比較的厚手の剥片を用いている。つまみ部の抉りはあまり顕著ではない。表面の縁辺すべてに急角度の二次加工を施し刃部を作出している。125は薄手、細長の剥片の表面左側縁にのみ二次加工を施している。126・127はともにつまみ部以外に微細な二次加工痕は認められない。126は唯一の打面側に末端縁が位置するものである。

128は唯一の横型石匙である。左縁辺が欠損している。横長剥片を素材とし、打面側につまみ部が作出されている。表面に剥片素材の先行剥離面、裏面に主要剥離面が広く残る。両面の全縁辺に二次加工痕が残る。

石籠（第38図129～135、図版14）

7点出土した。石質はいずれも頁岩である。129～132はいずれも素材剥片の主要剥離面を大きく残し側縁側または末端側に刃部を作出している。129・130は表面にのみ二次加工痕が残るもので、側縁側・末端側にそれぞれ刃部をもつ。129は基部に折断面が残っている。表面全面に二次加工が施され、比較的急斜度の刃部が作出されている。側縁は片刃であるが、末端部は素材自体の湾曲もあり、両刃のようになっている。130も表面にのみ二次加工が施される。右側縁と末端部は比較的大きな剥離の後に、非常に微細な剥離によって刃部が調整されているのが特徴である。器体上半は折断されている。131は基部と末端部に切断面が残る。表面全面に二次加工が施され、裏面には見られない点は前述の2点と同様である。132は表面に全面二次加工が施され、裏面の両側縁に急角度の調整が加えられている。133も同様であるが、こちらは裏面の調整が右縁辺のみである。いずれも裏面の二次加工後に、表面に二次加工が施されている。132の末端部の刃部は直刃片刃であるが、素材自体の丸みで、両刃のようになっている。132は基部、133は基部と末端部をそれぞれ折断によって欠いている。

134は表面全面と裏面の側縁に二次加工が施されている。末端の刃部は表面からの調整の片刃であるが、裏面の末端には急角度の先行剥離面が残り、両刃状になっている。135は厚手の剥片の末端部に刃部を作出したもので、刃角が 67° 前後とかなり急角度である。

トランシェ様石器（第38図136、図版14）

136のみ1点の出土である。石質は頁岩である。刃部は直刃片刃で、主要剥離面と先行剥離面、もしくは初期段階の大きな二次加工痕とでなる鋭い縁辺を利用している。刃角は 45° 前後である。表面には全面に、裏面には左右縁辺にのみ二次加工痕がある。器体下半が欠損している。

スクレイパー（第39・40図137～155、図版15）

19点出土した。石質はいずれも頁岩である。ここでは剥片を素材とした比較的細かい二次調整を加えた縁辺を刃部とするものを扱う。刃部の作出によっていくつかの類型に分かれる。そのほとんどが打面を残している。

137・138は素材の両面に二次加工を施したものであり、全局に刃部を作出するものである。刃部はそれぞれの側縁は片面からの微細な剥離と、その裏の調整の初期段階で作出された大きな剥離との組み合わせによって作出される。

139は素材表面の両側縁及び末端に細かい二次加工を施し、刃部を作出している。打面が残っている。

140は素材の両側縁に二次加工を施し、刃部を作出したものである。打面が残る。右側縁では表面から、左側縁では裏面からそれぞれ二次加工が施される。

141～145は素材表面の両側縁に二次加工を施し、刃部を作出したものである。いずれも打面が残る。

141～143はいずれも、細長い断面が三角形となる縦型剥片の両側縁に浅い剥離を加えて刃部を作出しているが、先行剥離面が広く残り、また素材自体の縁辺の角度のせいで、刃角はいずれも急角度である。142は広く自然面を残す。144・145は素材両側縁に非常に微細な剥離を加え、刃部を作出している。

146・147は素材片面の一縁辺及び末端縁に二次加工を施し、刃部を作出したものである。146は裏面にも打面を二次加工により除去しているほか、左側縁の裏側に二次加工痕がある。これは自然面を除去し、刃部を作出する意図で加工しかけた痕跡であろうか。147は打面が残り、右側縁と末端縁に二次加工が施されている。

148～153は素材片面の一側縁に二次加工が施され、刃部が作出されたものである。149・152は打面が残る。150は左側縁裏面に、152は右側縁表面に、149・151・153は左側縁表面にそれぞれ二次加工により刃部が作出される。

154・155は素材片面の末端縁に二次加工を施し、刃部を作出したものである。

打製石斧（第41図156～161、図版15）

6点出土した。石質はいずれも頁岩である。156は全体に細身で、両面に二次加工が施される。末端部が刃部と認められる。157～159は刃部が基端部より広がり、全般的に幅広厚手のものである。158は器体上部が、159は器体下部がそれぞれ欠損している。いずれも両刃丸刃であり、刃角も急である。159は裏面に広く主要剥離面を残す。

160・161は分銅形をしている。160は両面に二次加工が施されるが、裏面に広く主要剥離痕が残る。刃部は丸刃で、刃角は緩やかである。左右縁辺はやや抉られている。刃部には刃こぼれが確認できる。161は両面ともに主要・先行剥離面を広く残す。表面は基端部・右側縁・刃部に、裏面は刃部と左側縁に二次加工を施している。刃部は丸刃で、刃角は緩やかである。左右縁辺は顯著に抉られ、そのための剥離調整痕も急角度である。

磨製石斧（第42図162～164、図版15）

3点出土した。石質は162は安山岩で、163・164は緑色泥岩である。162は基端部が欠損しているが、基端より刃部が幅広く、刃部は丸刃である。全般的に厚く丸みを帯びている。163は基端部と刃部の広さがほぼ同じで、非常に丁寧に研磨されている。刃部はほぼ直刃で片刃である。刃部には使用時のものと推測される擦痕、刃こぼれが確認できる。164は比較的小型である。基端部より刃部が広くな

る形で、両刃直刀である。刃部には刃こぼれが確認できる。

半円状扁平打製石器（第42図165）

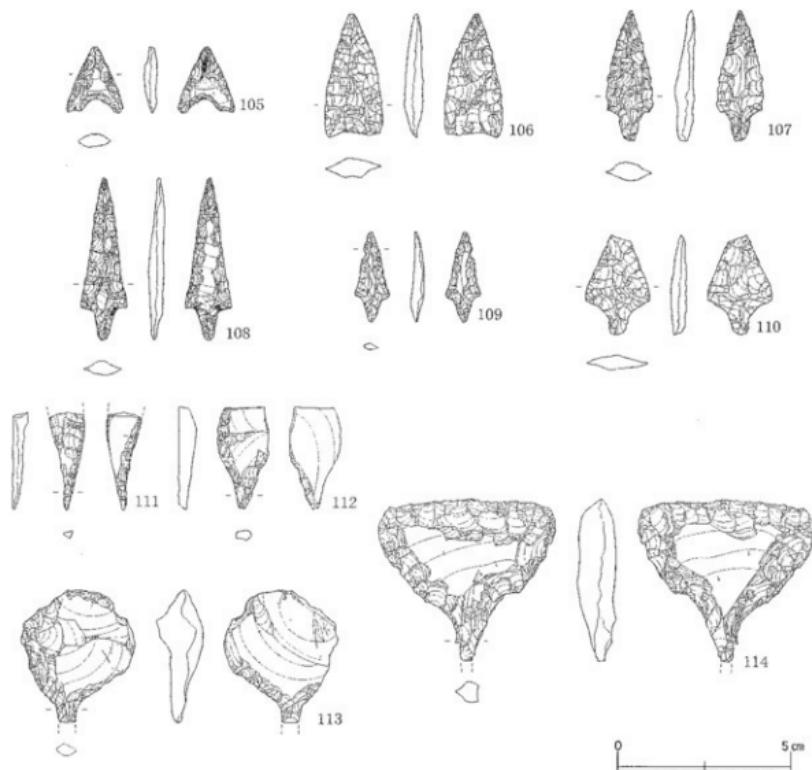
165、1点のみの出土である。石質は凝灰岩である。扁平な疊の上下左右縁辺に浅く広い剥離を加えて刃部を作り出し、その後刃部周辺を研磨している。刃部はいずれの箇所も使用のためか摩滅している。熱を受けた痕跡があり割れている。下の縁辺を除き、抉入して形を整えている。

凹石（第42図166）

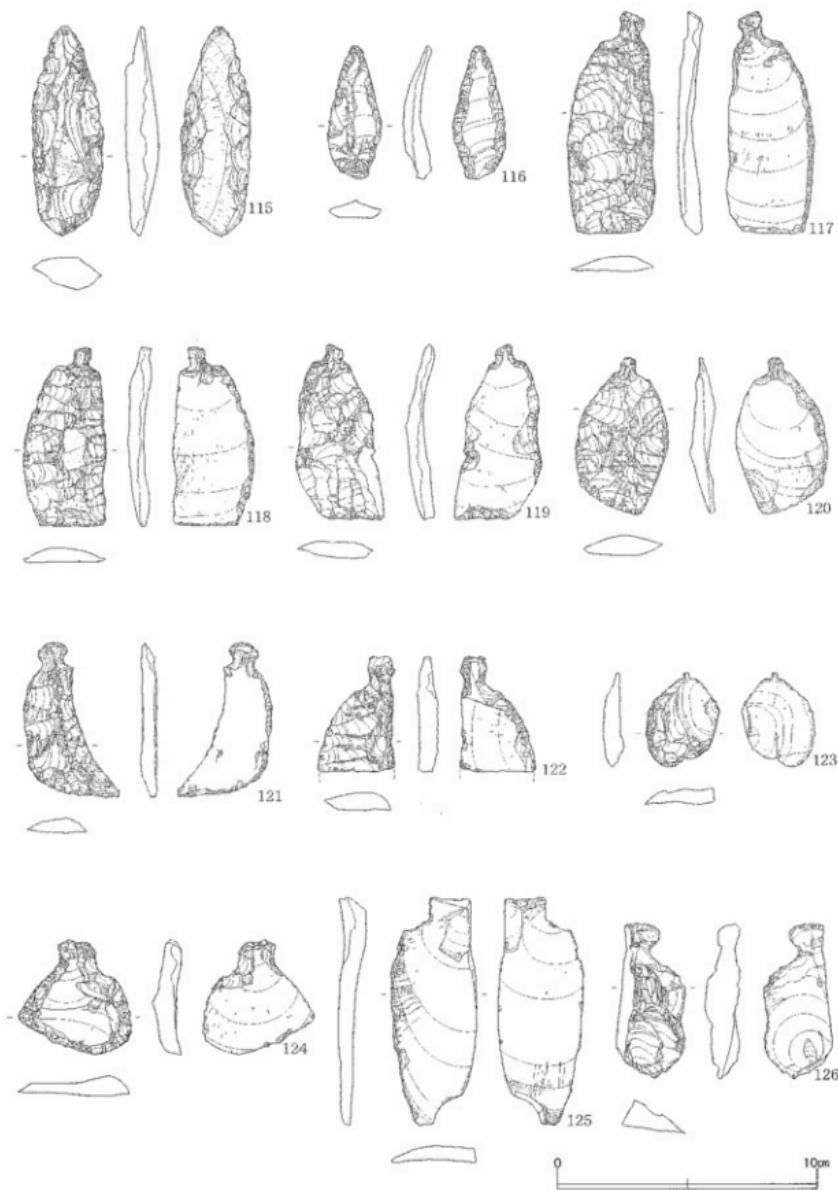
166、1点のみの出土である。石質は安山岩である。ちょうど片手に収まる程度の大きさで、やや扁平な疊である。両面の中央部に凹部がある。

石核（第43図167、図版15）

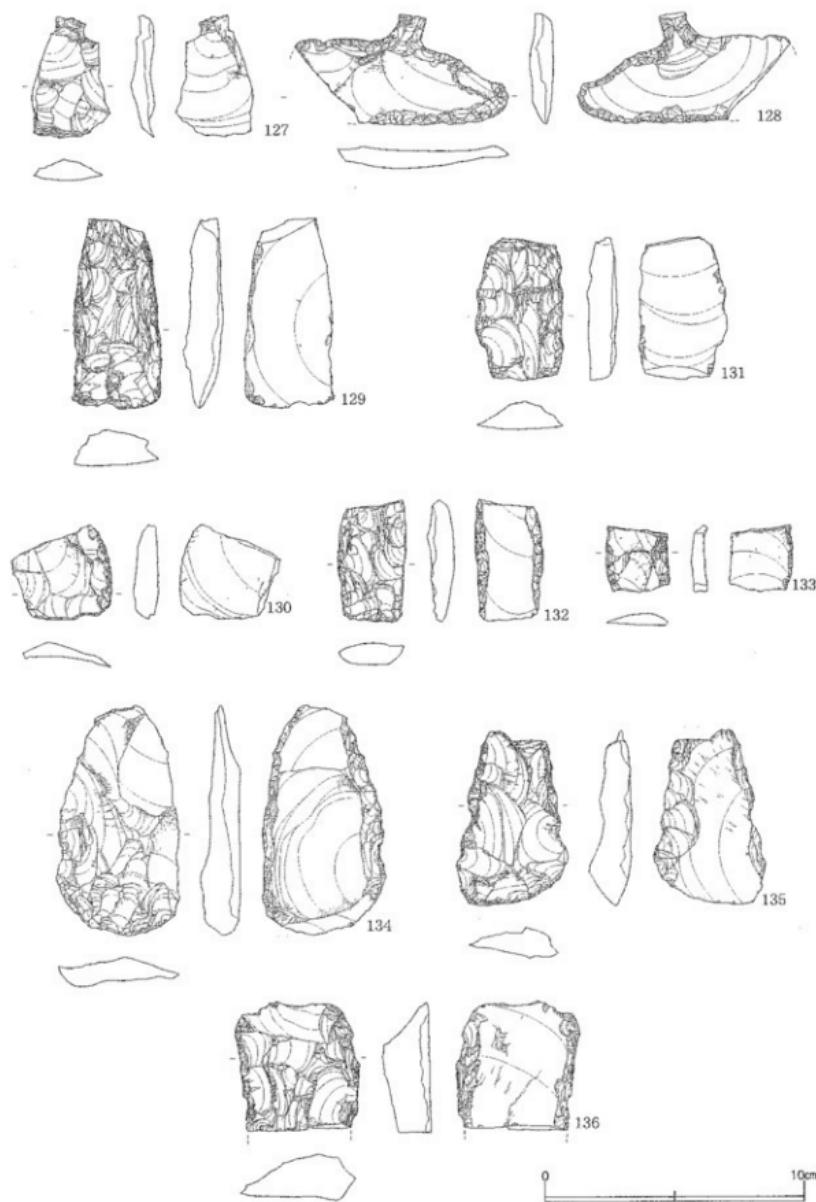
167、1点のみの出土である。石質は頁岩である。比較的大型で、重さは5kg程度である。上面は平坦な自然面が打面となり、下面に設けられた打面からと両方から、かなり大きめの縦長剥片が作出されたようである。上面と裏面に自然面を残す。



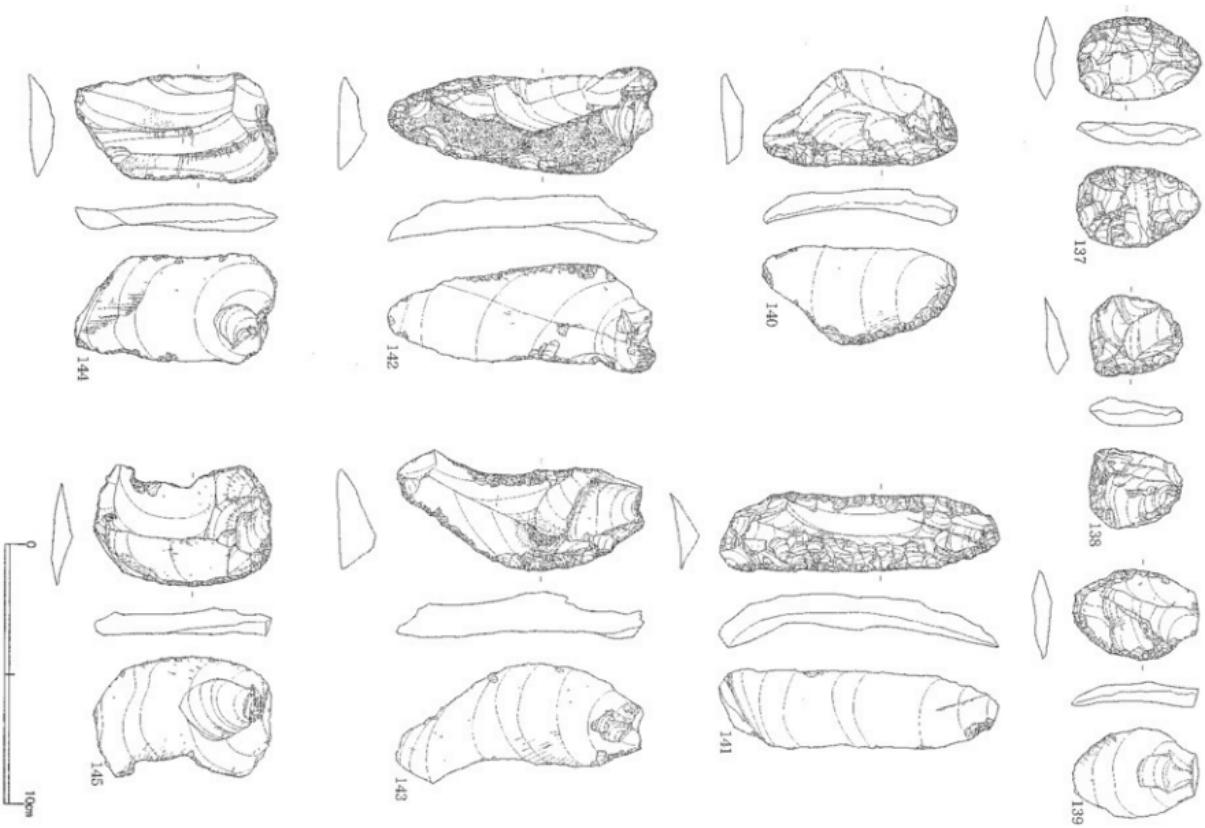
第36図 遺構外出土遺物(10) 石器



第37図 遺構外出土遺物（11）石器



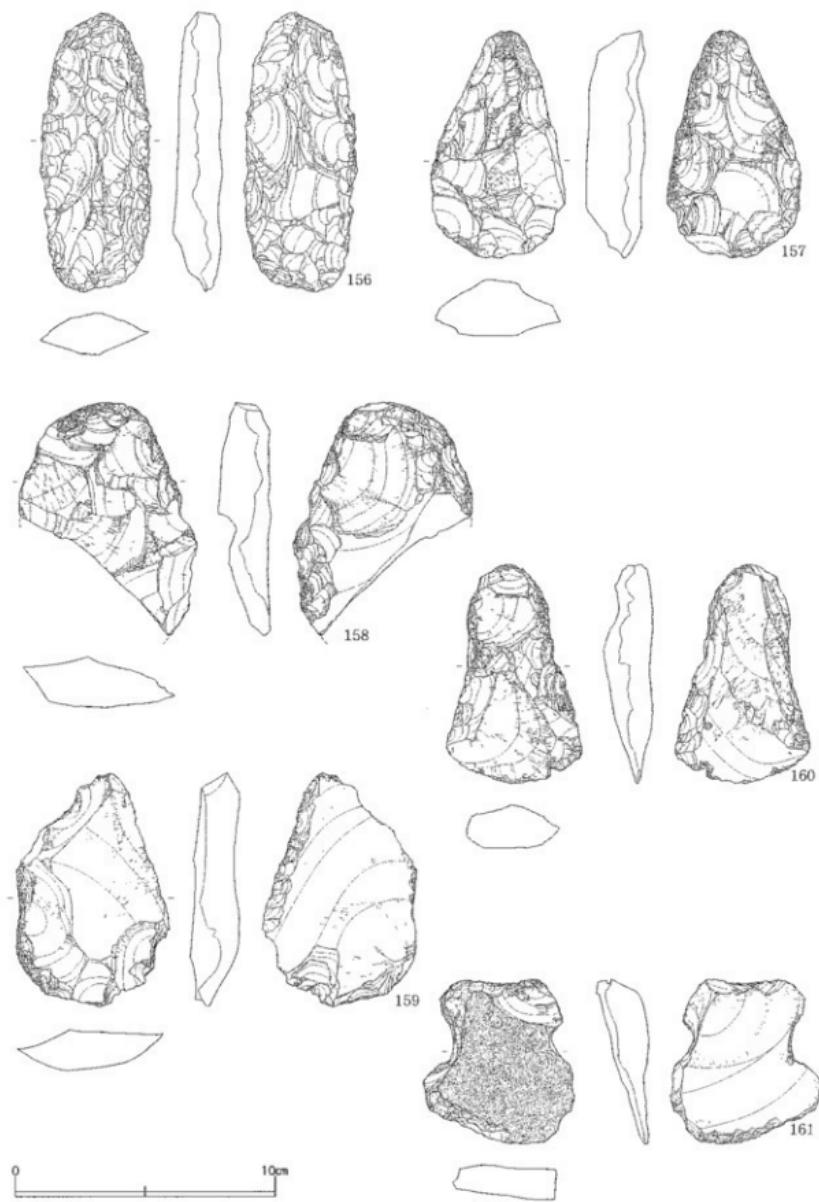
第38図 遺構外出土遺物（12）石器



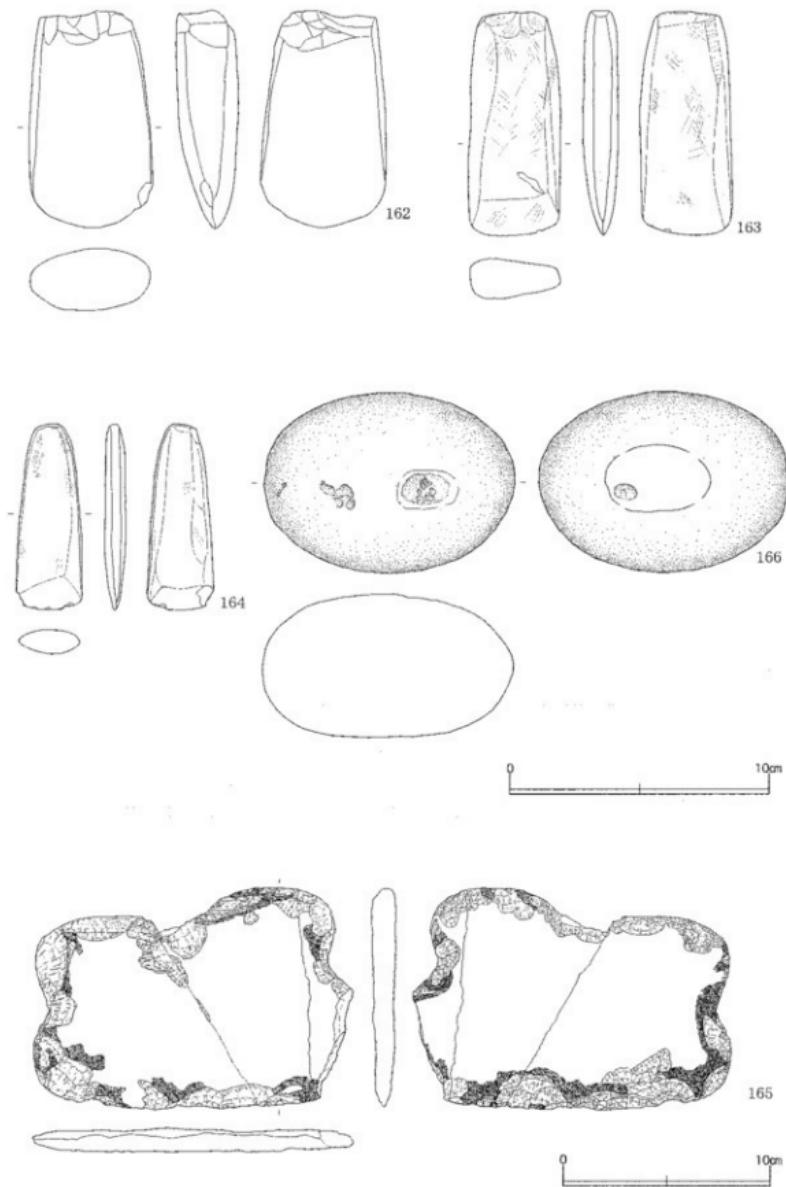
第三章 四、遗物外出土遗物(13) 五器



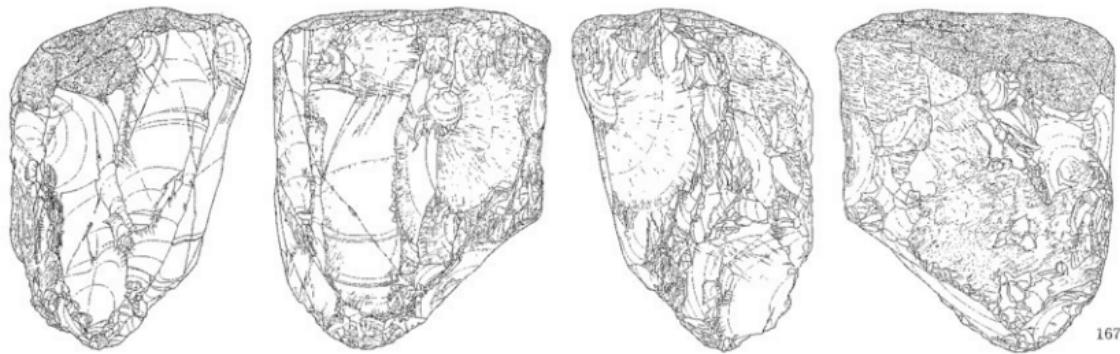
第40図 遺構外出土遺物（14）石器



第41図 遺構外出土遺物（15）石器



第42図 造横外出土遺物 (16) 石器



167



第43図 遺構外出土遺物（17）石器

第4表 遺構外出土石器観察表

件番号	番号	出土地区	出土層位	器種	石質	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重 量(g)
36	105	NJ50	Ⅴ	石鏟	頁岩	19.0	16.0	3.5	0.8
36	106	MF64	I	石鏟	頁岩	35.5	16.5	5.0	2.4
36	107	MR55	Ⅲ	石鏟	頁岩	37.5	13.5	6.0	1.8
36	108	NC54	Ⅲ	石鏟	頁岩	46.5	13.0	4.5	1.8
36	109	NE54	Ⅲ	石鏟	頁岩	26.0	1.0	4.0	0.6
36	110	LH69	I	石鏟	チャート	(28.5)	18.0	4.5	1.8
36	111	ME64	IV	石鏟	頁岩	28.0	10.0	4.0	1.0
36	112	MR55	Ⅲ	石鏟	頁岩	(29.0)	15.0	5.0	2.2
36	113	NH56	I	石鏟	頁岩	(38.0)	33.0	13.0	8.6
36	114	LL69	I	石鏟	頁岩	(46.0)	51.0	7.0	26.0
37	115	NF50	I	石槍	頁岩	81.0	26.5	13.0	26.4
37	116	MG63	IV	石槍	チャート	51.0	20.5	9.0	7.6
37	117	NG57	I	石槍	頁岩	85.5	34.5	6.5	20.6
37	118	ND55	I	石槍	頁岩	69.0	31.0	7.0	15.2
37	119	NF52	I	石槍	頁岩	67.5	33.0	7.0	17.7
37	120	MS55	V	石槍	頁岩	60.5	35.0	8.0	15.9
37	121	LS67	IV	石槍	チャート	60.0	36.5	6.0	10.7
37	122	MR56	IV	石底	頁岩	(44.5)	30.0	7.0	9.9
37	123	NG53	I	石底	頁岩	36.0	28.5	8.0	7.0
37	124	NC53	Ⅲ	石底	頁岩	43.5	42.5	9.0	16.0
37	125	NE52	Ⅲ	石底	頁岩	88.0	33.0	9.0	21.3
37	126	NC54	Ⅲ	石底	頁岩	60.0	27.0	12.5	14.6
38	127	MC65	IV	石底	頁岩	47.0	30.0	9.0	9.2
38	128	NA53	I	石底	頁岩	(47.0)	(34.5)	9.5	24.8
38	129	MS60	I	石鋸	頁岩	73.4	35.2	16.0	48.9
38	130	KN72	I	石鋸	頁岩	(36.5)	39.0	10.0	10.1
38	131	ND52	Ⅲ	石鋸	頁岩	(55.5)	34.0	11.0	23.1
38	132	ND56	Ⅲ	石鋸	頁岩	(47.0)	26.5	10.0	14.4
38	133	NF53	IV	石鋸	頁岩	(25.0)	24.0	6.0	5.6
38	134	KK72	II	石鋸	頁岩	88.5	48.0	16.0	56.8
38	135	NS44	I	石鋸	頁岩	67.0	42.0	15.0	36.9
38	136	NO46	I	トランシエ	頁岩	50.0	48.0	18.0	48.4
39	137	MR57	IV	スクレイバー	頁岩	47.0	32.0	8.0	12.4
39	138	MK55	III	スクレイバー	頁岩	35.5	31.0	10.0	11.2
39	139	NC53	III	スクレイバー	頁岩	(48.5)	35.0	8.2	14.5
39	140	NG55	III	スクレイバー	頁岩	74.0	37.5	10.5	29.4
39	141	MF64	I	スクレイバー	頁岩	108.0	31.0	12.0	52.0
39	142	MT59	I	スクレイバー	頁岩	103.0	42.0	14.0	62.0
39	143	MF64	I	スクレイバー	頁岩	95.0	47.0	12.0	44.0
39	144	NA53	I	スクレイバー	頁岩	(78.0)	43.0	10.0	40.7
39	145	NK49	I	スクレイバー	頁岩	68.0	44.5	9.0	31.1
40	146	NR47	I	スクレイバー	頁岩	79.5	38.5	10.5	35.1
40	147	NG52	III	スクレイバー	頁岩	(41.5)	44.5	9.5	14.6
40	148	ND53	IV	スクレイバー	頁岩	54.0	30.0	8.0	15.1
40	149	ND53	III	スクレイバー	頁岩	44.0	35.0	11.5	16.3
40	150	NP46	I	スクレイバー	頁岩	29.5	36.0	6.5	7.0
40	151	MF64	I	スクレイバー	頁岩	35.0	26.0	8.0	5.6
40	152	NH52	III	スクレイバー	頁岩	37.5	27.0	12.0	8.3
40	153	MS56	VII	スクレイバー	頁岩	57.9	79.1	22.0	73.5
40	154	NC52	III	スクレイバー	頁岩	61.0	49.0	10.0	26.3
40	155	MS55	IV	スクレイバー	頁岩	49.0	38.0	12.5	18.1
41	156	KM71	I	打製石斧	頁岩	108.0	43.0	20.0	102.4
41	157	NC52	III	打製石斧	頁岩	87.5	51.5	22.0	91.7
41	158	MG63	I	打製石斧	頁岩	90.0	68.5	19.5	101.4
41	159	NA57	V	打製石斧	頁岩	90.5	59.0	18.4	112.4
41	160	NQ47	I	打製石斧	頁岩	84.0	51.5	18.0	69.2
41	161	KO70	I	打製石斧	頁岩	64.5	59.0	15.0	48.8
42	162	NE52	III	磨製石斧	安山岩	(83.5)	48.0	24.0	165.3
42	163	LF71	I	磨製石斧	綠色泥岩	86.5	35.0	15.0	89.0
42	164	NS46	I	磨製石斧	綠色泥岩	72.0	25.0	9.0	27.9
42	165	MF64	I	半円状扁平打製石器	燧灰岩	107.0	(154.0)	11.0	226.6
42	166	NE55	I	石核	安山岩	70.0	96.5	55.0	485.2
43	167	NE56	IV	石核	頁岩	199.0	162.0	140.0	504.0

第3章 自然科学的分析

本遺跡の発掘調査で検出された竪穴住居跡や土器埋設遺構、土坑から採取した炭化物を科学的に分析することにより、科学的見地による実年代や縄文時代の自然環境を知る手がかりを得て、考古学的な分析と合わせ、総合的に考察することを目的とする。放射性炭素年代測定、種実同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

桐内D遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桐内D遺跡では、縄文時代中期末～後期初頭の複式炉・土器埋設遺構、土坑等の遺構が検出されている。これらの遺構からは、木材が利用された際の残渣の一部と考えられる炭化材が出土している。

本報告では、これらの炭化材について、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、各遺構の構築時期を明らかにする。また、炭化材の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、土坑、土器埋設遺構等から出土した炭化材4点（試料番号1～4）である。各試料の詳細は、測定結果と共に表1に記した。

(2) 方法

測定方法は、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を選択した。測定は、（株）地球科学研究所を通じて、アメリカ合衆国ベータ社（BETA ANALYTIC INC.）が行った。

(3) 結果

測定結果を表1に示す。年代測定値は、補正年代で1140～4980BPであった。

表1 放射性炭素年代測定結果

番号	遺構	出土位置	試料の質	年代	$^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$	補正年代	Code No
1	SK07	覆土	炭化物	1150 ± 40	-25.6%	1140 ± 40	Beta-138762
2	SNR19	埋設土器内覆土	炭化物	3720 ± 40	-27.3%	3680 ± 40	Beta-138763
3	SI33	炉体土器内覆土	炭化物	1610 ± 40	-25.8%	1590 ± 40	Beta-138764
4	SI34	炉体土器内覆土	炭化物	4000 ± 40	-26.5%	4980 ± 40	Beta-138765

1) 年代は、1950年を基点とした年数。

2) 放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

(4) 考察

年代測定値は、補正年代で1140～4980BPであった。年代測定を行った炭化材は、試料番号1と2

が縄文時代後期初頭、試料番号3と4が縄文時代中期末と考えられる遺構から出土している。年代測定値を見ると、試料番号2の3680BPは、東北地方における縄文時代後期の年代に、試料番号4の4980BPは縄文時代前期の年代にそれぞれ一致する（キーリ・武藤、1982）。試料番号4が、推定値よりもやや古い。この背景には、樹齢の問題や古材の利用などが考えられる（東村、1992）。

一方、試料番号1の年代測定値は9世紀初頭、試料番号3は4世紀中頃にそれぞれ相当する。この結果は、いずれも推定値よりも1000年以上新しい時期を示している。このうち、試料番号1が出土したSK07は、住居跡などが検出された地点から離れており、時代が異なる可能性も考えられている。しかし、SI33でも新しい年代が得られていることを考慮すれば、遺構が埋積する過程や後代の攪乱などにより新しい時代の炭化材が混入した可能性がある。

今後、他の遺構についても年代測定を行い、各遺構で同様の年代測定値が得られるのか確認したい。

2. 炭化材の樹種同定

(1) 試料

試料は、各遺構から出土した炭化材9点（試料番号1～9）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表2に記した。

(2) 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表2に示す。試料番号4と5には2種類、試料番号7には4種類が認められた。これら炭化材は、針葉樹1種類（ヒノキ科）、広葉樹6種類（クマシデ属・イヌシデ属・ブナ属・コナラ属・コナラ亞属・クリ・サクラ属・ミズキ属）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・クマシデ属イヌシデ節 (Carpinus subgen. Euarpinus) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減する。道管は

表2 樹種同定結果

番号	遺構	出土位置	時代・時期	樹種
1	SK06	覆土	縄文時代晚期	ヒノキ科
2	SK07	覆土	縄文時代晚期	ヒノキ科
3	SK11	覆土	縄文時代晚期	クリ
4	SNR19	埋設土器内覆土	縄文時代後期初頭	サクラ属 クリ
5	SNR19	埴土内	縄文時代後期初頭	クリ
6	SR23	埋設土器内覆土	縄文時代後期初頭	クマシデ属イヌシデ節 コナラ属コナラ亜属コナラ節 ブナ属
7	SR31	埋設土器内覆土	縄文時代後期初頭	クリ ミズキ属 イネ科タケ亜科
8	SI33	炉体土器内覆土	縄文時代中期末	ヒノキ科
9	SI34	炉体土器内覆土	縄文時代中期末	クマシデ属イヌシデ節

単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、1～3細胞幅、1～40細胞高のものと集合放射組織がある。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を漸減する。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔と階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部はやや疎な1列、時に2列。孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1～3列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合して散在し、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～5細胞幅、1～30細胞高。

・ミズキ属 (*Cornus*) ミズキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、ほぼ単独、時に2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～5細胞幅、1～30細胞高。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bamboideae)

維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱が認められ、放射組織は認められない。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

(4) 考察

炭化材には合計8種類が認められた。年代測定値を見ると、これらの炭化材の中には、後代に混入したものも含まれている可能性がある。

同定結果を見ると、クリとヒノキ科が比較的多く見られるが、全体的に種類数が多い。この結果から、クリとヒノキ科を中心に様々な種類が利用されていたことがうかがえる。遺構による種類構成の違いは、目的・用途などによる用材選択の違いを示している可能性がある。しかし、各遺構での試料数が少ないため、詳細は不明である。

比較的多く見られたクリは、これまで東北地方で行われてきた調査でも、縄文時代に多く見られる(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993など)。この背景には、栽培によって果実を安定して確保すると共に、収量の落ちた木を伐採して様々な用途に利用したことが推定されている(千野, 1983; 辻, 1997)。本遺跡でも同様のことが行われていた可能性がある。今後さらに調査を行い、詳細を明らかにしたい。

引用文献

- 千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生－南関東地方を中心に－。
東京都埋蔵文化財センター研究論集、Ⅱ、p.25-42.
- 東村武信（1992）改訂 考古学と物理化学、212p., 学生社。
- キーリ C.T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代、加藤晋平・小林達雄・藤本 強編
「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」、p.246-275, 雄山閣。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）花粉分析・炭化材同定・種子同定。
- 「御所野遺跡I 縄文時代中期の大集落跡」、p.341-355, 一戸町教育委員会。
- 辻 誠一郎（1997）三内丸山を支えた生態系、岡田康博・NHK青森放送局編
「縄文都市を掘る 三内丸山から原日本が見える」、p.174-188, NHK出版。

第4章 まとめ

桐内D遺跡における発掘調査の結果、遺構では竪穴住居跡・土器埋設遺構・土坑などが、遺物では縄文時代の土器・石器・土製品などが検出され、縄文時代の小規模な集落跡であることが判明した。遺構・遺物共に検出量はそれほど多くないが、発掘調査の進んでいない当該区においては貴重な考古学的資料となる検出例も多い。主なものは、遺構では縄文時代中期末葉の複式炉を伴う竪穴住居跡である。遺物では縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての土器が多く、当該期の土器型式研究においての良好な資料となりうると考える。

S I 33・34竪穴住居跡はいずれも複式炉を伴い、かつ炉として埋設されている土器から判断すると縄文時代中期末葉に帰属する。S R 24・S N R 19・S N R 29は、埋設土器から縄文時代後期初頭に帰属すると判断される。S R 17・S R 23・S N R 31は埋設土器の欠損のため詳細は不明であるが、土器・遺構の構築面から判断すれば、縄文時代中期末～後期初頭に属すると推測される。G区で検出されたS K 01～S K 11の5基の土坑に関しては、S K 07において床面直上より縄文時代晚期の土器片が出土しており、非常に近接、もしくは切り合い関係にあり、構築面（確認面）が同じである他の遺構も同時期であるかと推測されるが、遺物の出土がない、もしくは少ないために明確には出来ない。その他のA区・B区から検出された土坑については、S K 12・S K 26のように遺物の出土していない土坑やS K 25・S K 32のように小土器片のみ出土の土坑に関しては時期が不明である。遺物の出土しているS K 14・S K 20・S K 21・S K 28に関しては、それぞれ覆土中より縄文時代中期末～後期初頭に属する土器が出土していることから縄文時代中期末葉以前に属すると推測される。

桐内D遺跡において特徴的なのは、「土器埋設石函部」・「石組部」・「前部」からなる典型的な複式炉をもつS I 34竪穴住居跡である。同じダム建設区域内では姫ヶ岱D遺跡において同時期の複式炉を伴う竪穴住居跡が検出されているが、いずれも不完全な残存状況であり、当該区においては炉の全容が明らかである最初の検出例である。なお小又川の1km程度下流に位置する桂の沢遺跡においても10軒の複式炉を伴う竪穴住居跡が検出されている。S I 33竪穴住居跡も複式炉を伴うが、「土器埋設石函部」・「前部」で構成され、炉の形態が異なる。また「土器埋設石函部」の形態も方形で、S I 34竪穴住居跡とは様相を異にする。同一遺跡の同一土器型式期に構築された住居の炉形態がこれほど異なるという事実がなにを示すのかは、今後の周辺遺跡の発掘調査による事例の増加によって明らかになるものと考える。

桐内D遺跡においては、縄文時代早期から晩期までの土器が検出された。全体的に検出数はそれほど多くないが、縄文時代中期末から後期初頭に比定される土器が非常にバラエティーに富んで検出されている。しかも各型式の要素が折衷した例も多い。これら土器の帰属時期については大まかに類型毎に記載したが、資料数に対しての土器の様相の複雑さから、明確な土器型式の比定は行わなかった。土器についてもダム建設区域の調査による類例の増加を待つ必要があると考える。

こうした土器の中でも特に注目すべきは器面全体に刺突が施される土器の一群であろう。S K 14の覆土中から出土したミニチュア土器や、遺構外出土の69・70の土器は口縁部まで復元可能で、器形を含め、各部位の文様構成が把握できる貴重な資料である。器形は胴部がやや膨らみ、口縁部が外反す

る。文様構成は胴部上半に沈線による文様が、胴部下半には全面に横方向からの刺突が施される。S N R 19やS N R 29の埋設土器は口縁部が欠損しており明言は出来ないが、ほぼ同様の器形・文様構成であると考えられる。しかし、S N R 29の埋設土器の胴部下半には横方向に刺突の他に器面を区画するように縱方向に円形の刺突列が並び、他とは若干様相を異なる。器面全体に刺突が施される例は、同じダム建設区域内においては、姫ヶ岱D遺跡において出土例があるが、こちらは棒状工具により下方から刺突が施されており、器形も、胴部が最も膨らみ、口縁部も内湾する事から類似例とは言い難い。こうした器面全体に刺突が施される土器は、三十稻場式土器が知られる。器形・胴部下半の刺突に類似点がみられ、何らかの関連が想定されるかもしれない。ダム建設区域内の調査が進み、類例が増加するようであれば、当該区での明確な位置付けが可能になるものと思われる。

第44図は桐内D遺跡における遺構外遺物の出土分布図である。概観すると、土器・石器（剥片等を含む）共に遺構の多く検出されたB区での出土が目立つ。また、遺跡全体の南側、遺跡内の段丘低位面での出土がない、もしくは非常に少ない。これは遺跡全体（特に遺跡南半・低位面）が地山面、もしくは漸移層まで削平を受けているためであり、本来の遺構・遺物の分布とは異なるものであると推測される。

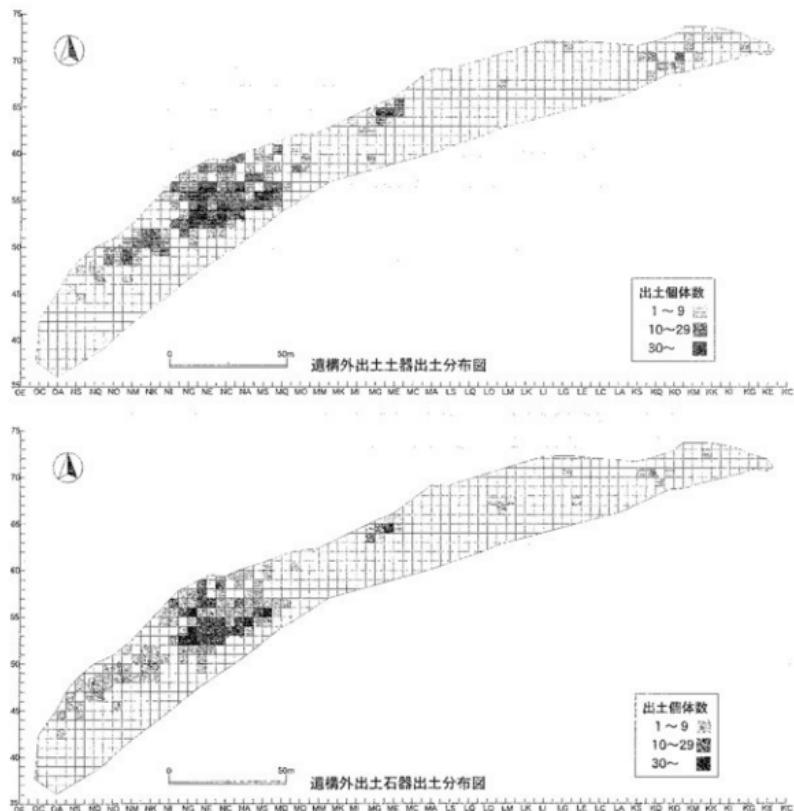
最後に、桐内地区における他の遺跡との関連を考察してみる。各遺跡の立地は、桐内C遺跡は県道を挟んで南の高位段丘面に、桐内A遺跡は南西に位置する。各遺跡の時期は、桐内C遺跡においては縄文時代中期中葉と後期前葉が、桐内A遺跡は後期後葉中心となる。桐内D遺跡は縄文時代中期末葉から後期初頭が中心となり、ちょうど両遺跡は時期的に前後する。桐内地区においては各時期毎に遺跡立地が変化しており、時期とともに居住区域が変化したものと思われる。

森吉山ダム建設区域の発掘調査は始まったばかりであり、未報告の近隣遺跡の整理作業や今後の発掘調査の進行に伴い、この区域の当時の様相がより明らかになっていくものと思われる。

参考文献

- 秋田県教育委員会 『内村遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第82集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『八木遺跡発掘調査報告書—公害防除特別土地改良事業八木地区に係る埋蔵文化財発掘調査—』
- 秋田県文化財調査報告書第181集 1989（平成元）年
- 秋田県文化財調査報告書第181集 1989（平成元）年
- 秋田県文化財調査報告書第247集 1994（平成6）年
- 秋田県文化財調査報告書第285集 1999（平成11）年
- 秋田県文化財調査報告書第285集 1999（平成11）年
- 秋田県教育委員会 『桐内C遺跡—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III—』
- 秋田県文化財調査報告書第299集 2000（平成12）年
- 秋田県教育委員会 『姫ヶ岱D遺跡—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV—』
- 秋田県文化財調査報告書第300集 2000（平成12）年
- 秋田県教育委員会 『奥格岱遺跡—秋田空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I—』
- 秋田県文化財調査報告書第305集 2000（平成12）年
- 梅宮茂 『複式炉文化論』 『福島考古』 第15号 1974（昭和49）年
- 丹羽茂 『福島県における縄文時代中期の住居・集落研究の現状と問題点』 『福島考古』 第15号 1974（昭和49）年
- 中村良幸 『複式炉について—岩手県を中心として—』 『考古風土記』 第7号 1982（昭和57）年
- 高橋忠彦 『秋田県の縄文時代後期の土器』 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第4号 1989（平成元）年

田中耕作 「三十種器式土器様式」「縄文土器大観4 後・晚期」 小学館 1990（平成2）年
 大川清 鈴木公雄 工衆善通 「日本土器事典」 嵐山閣出版株式会社 1996（平成6）年



第44図 遺構外出土遺物出土分布図



遺跡遠景（北西→）



S133号穴住居跡複式炉窓圖狀況（北西→）



S I 34壁穴住居跡完掘状況（南西→）



S I 34複式炉完掘状況（北東→）



S I 34複式炉周辺遺物出土状況（南西→）



S I 34複式炉土層断面（南東→）



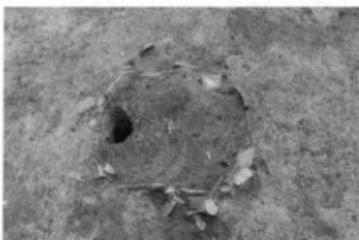
S I 34複式炉石組部被熱痕確認状況（南東→）



S I 33暨穴住居跡完掘狀況（南東→）



S R 17土器埋設遺構完掘狀況（南→）



S R 23土器埋設遺構確認狀況（北面→）



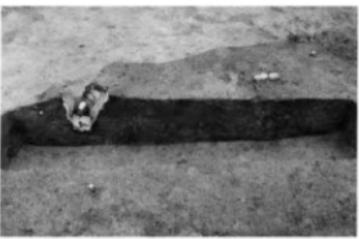
S R 23土器埋設遺構完掘狀況（北西→）



S R 24土器埋設遺構確認狀況（南東→）



S R 24土器埋設遺構土層斷面（北西→）



S N R 19土器埋設燒土遺構土層斷面（北東→）



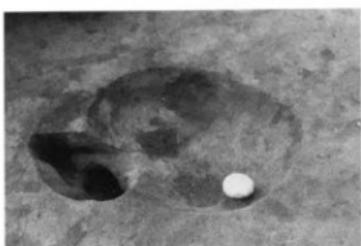
S N R 19土器埋設燒土遺構完掘狀況（南東→）



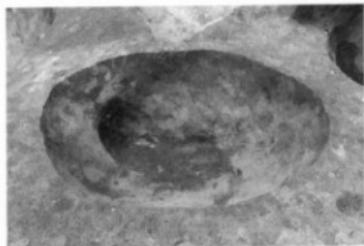
S N R29土器埋設焼土遺構確認状況（西→）



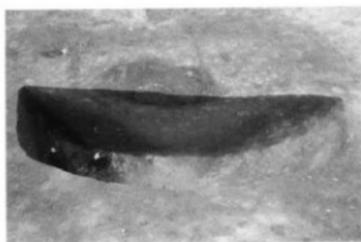
S N R29土器埋設焼土遺構完掘状況（西→）



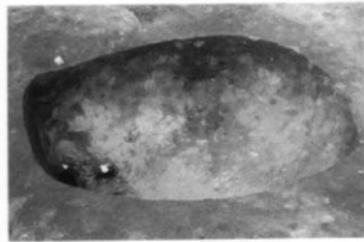
S K01土坑完掘状況（南東→）



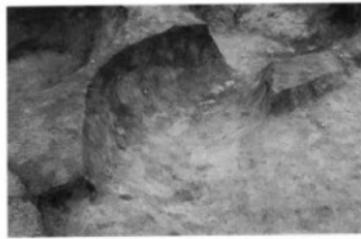
S K06土坑完掘状況（西→）



S K07土坑土層断面（南西→）



S K07土坑完掘状況（南西→）



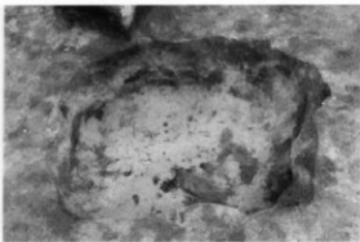
S K08土坑完掘状況（南東→）



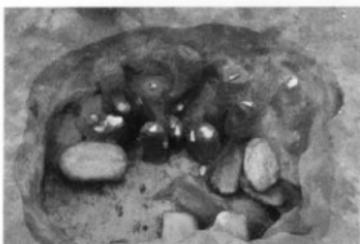
S K11土坑完掘状況（南東→）



S K 12土坑完掘状况（南西→）



S K 14土坑完掘状况（南東→）



S K 14土坑遺物出土状况（南東→）



S K 20土坑土層斷面（西→）



S K 20土坑完掘狀況（西→）



S K 21土坑土層斷面（西→）



S K 27土坑完掘狀況（南西→）



S K 28土坑完掘狀況（西→）

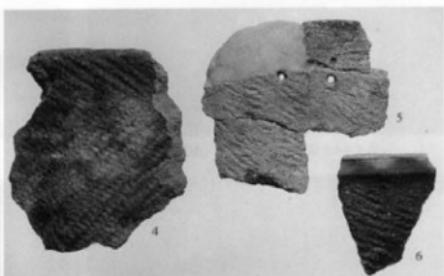
四版 8



S I 33 模式炉埋設土器



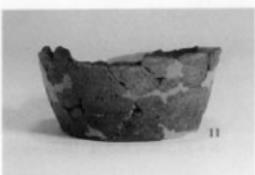
S I 34複式炉埋設土器



S I 34整穴住居跡出土遺物



S R 23埋設土器



S R 17埋設土器



S R24埋設土器



S N R19埋設土器

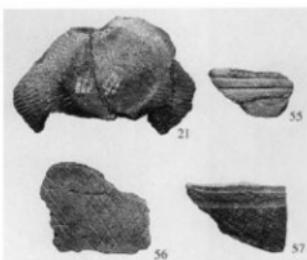


S N R29埋設土器



S N R31埋設土器

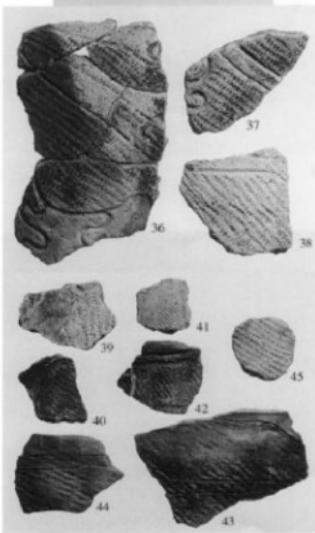
图版
10



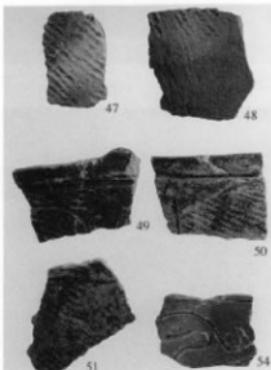
S K07 · S K25 · S K28土坑出土遗物



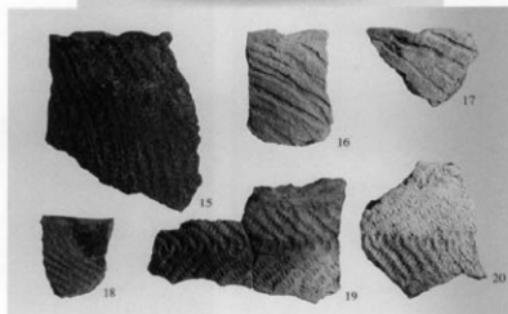
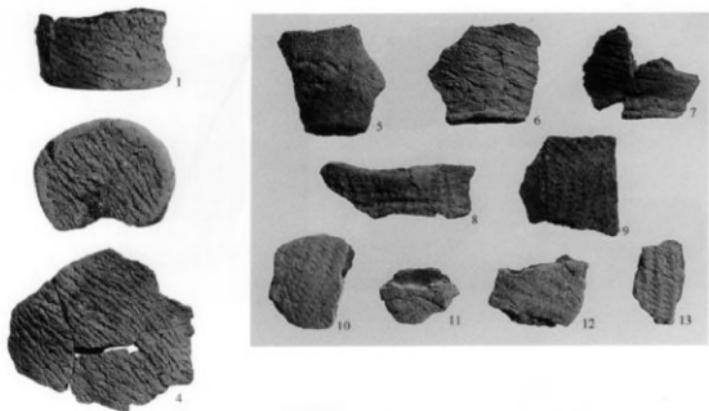
S K14土坑出土遗物



S K20土坑出土遗物

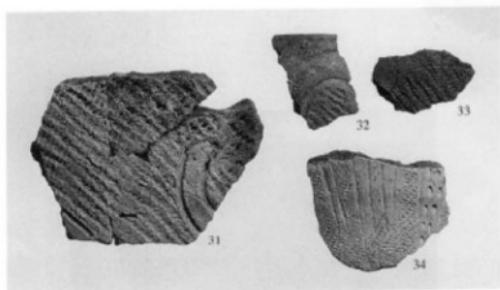


S K21土坑出土遗物

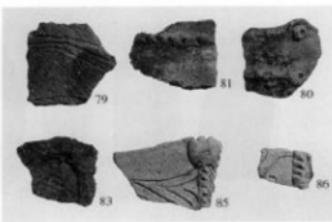
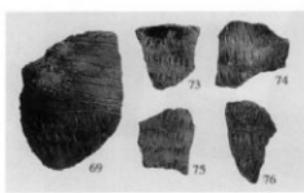
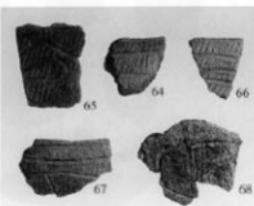
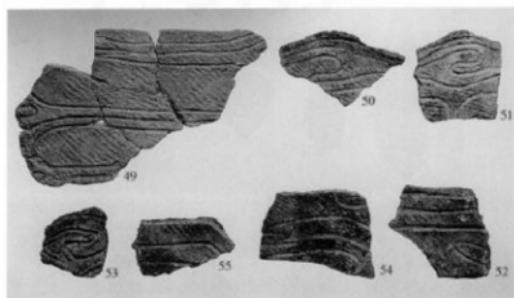
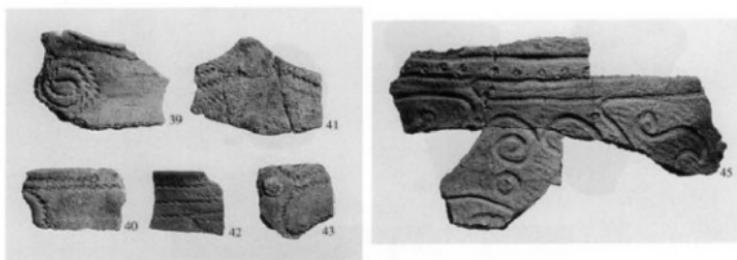


遺構外出土遺物（1）

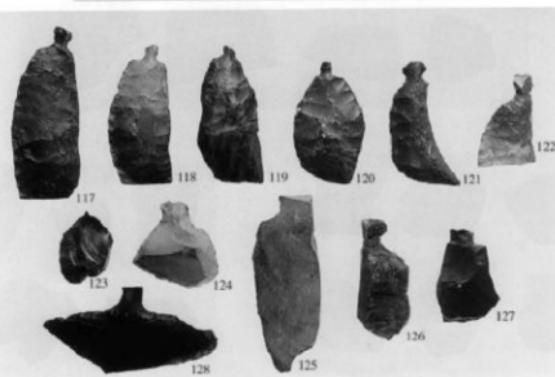
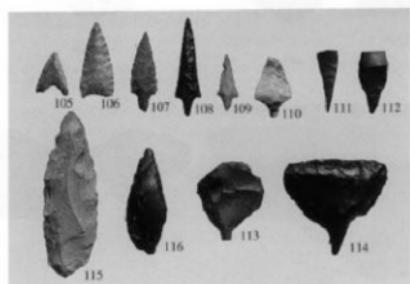
圖
12



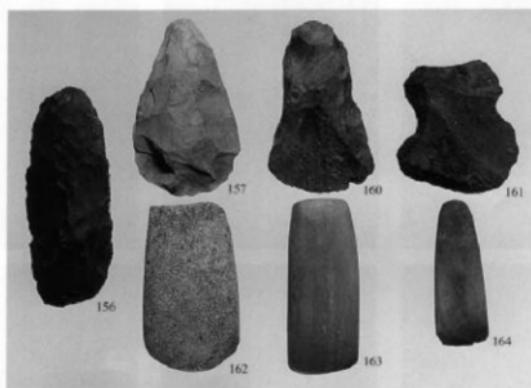
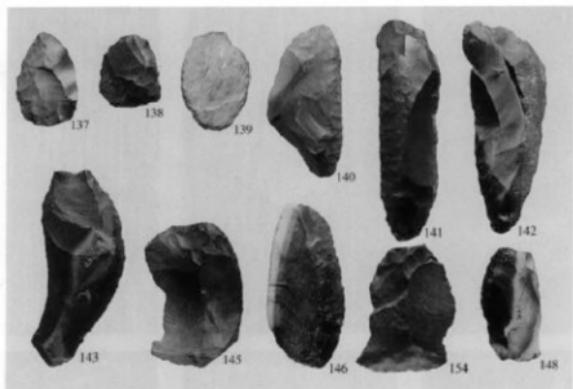
遺構外出土遺物 (2)



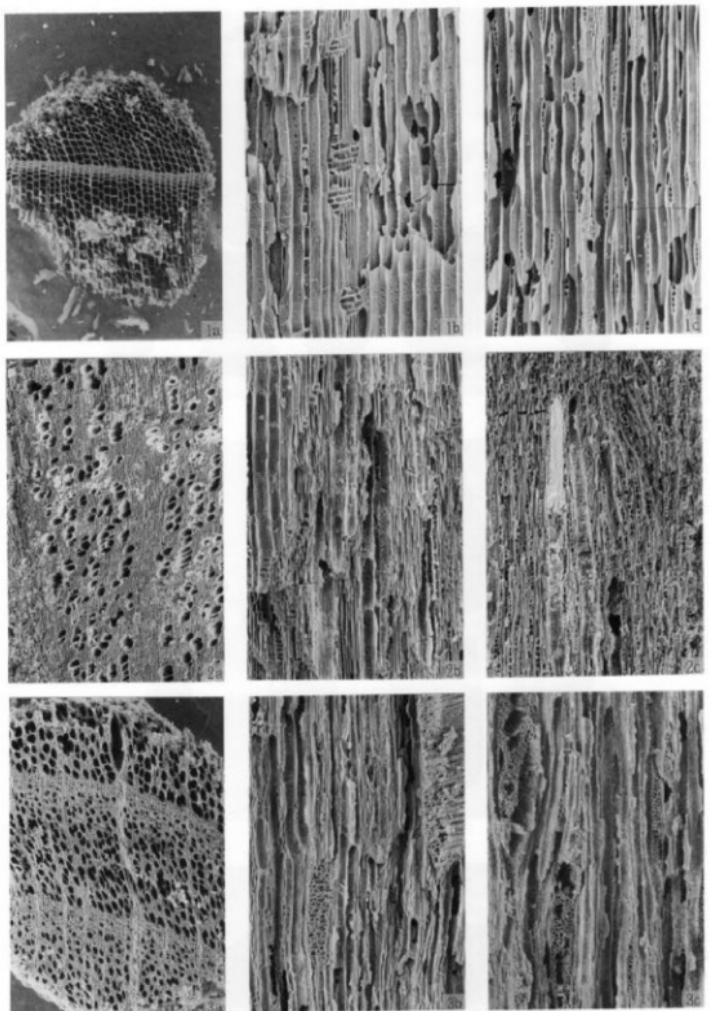
遺構外出土遺物 (3)



遺構外出土遺物 (4)



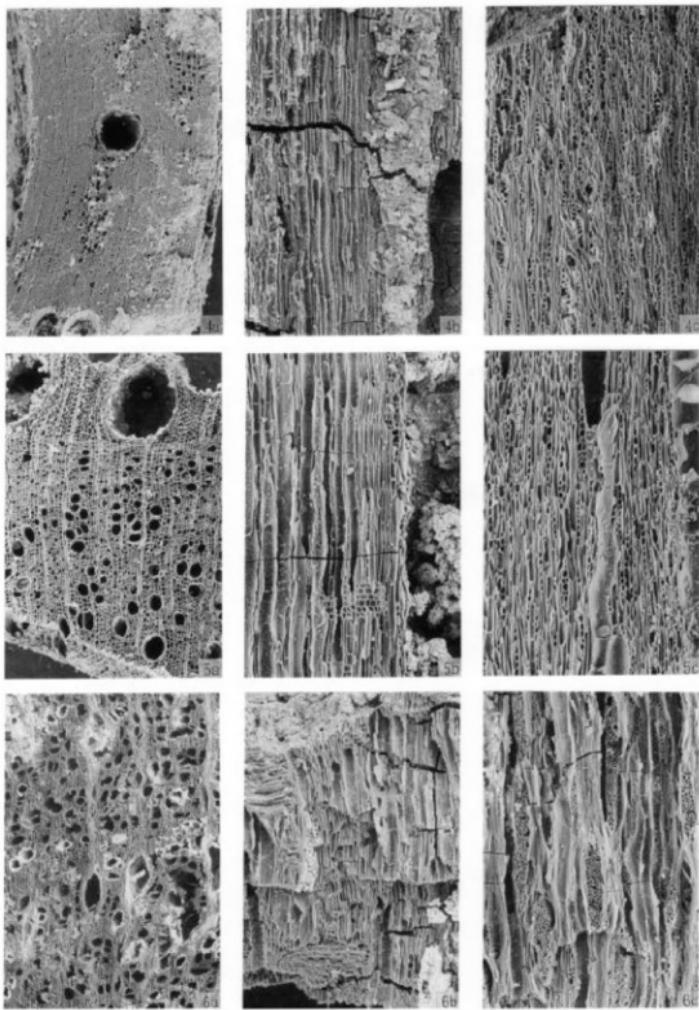
遺構外出土遺物（5）



1. ヒノキ科 (試料番号 2)
2. クマシテ属イヌシデ属 (試料番号 6)
3. ブナ属 (試料番号 7)

a : 木口, b : 横目, c : 板目

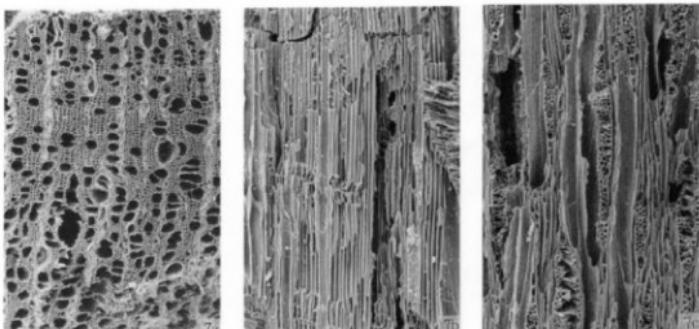
— 200 μm : a
— 200 μm : b, c



1. ヒノキ科（試料番号 2）
 2. クマシデ属イヌシア節（試料番号 6）
 3. ブナ属（試料番号 7）
 a : 木口。 b : 管目。 c : 板目

— 200 μm : a
 — 200 μm : b, c

炭化材樹種顕微鏡写真 (2)



1. ヒノキ科 (試料番号 2)
 2. クマシダ属イヌシダ節 (試料番号 6)
 3. ブナ属 (試料番号 7)
- a : 木口, b : 横目, c : 板目

— 200 μ m : a
— 200 μ m : b, c

報告書抄録

ふりがな	きりない いせき きりない いせき							
書名	桐内B遺跡・桐内D遺跡							
副書名	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	V							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第318集							
編集者名	牧野賢美・吉田英亮							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20 TEL 0187-69-3331							
発行年月日	西暦 2001年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 。'."	東経 。'."	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
きりない いせき 桐内B遺跡	あき た けんさかあき た ぐんちりよし 秋田県北秋田郡森吉 まちむりよしあざきりない 町森吉字桐内33-1外	05323	40° 1' 53"	140° 27' 36"	19990518 ~ 19990618	1,450m ²	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査	
きりない いせき 桐内D遺跡	あき た けんさかあき た ぐんちりよし 秋田県北秋田郡森吉 まちむりよしあざきりない 町森吉字桐内家ノ上 かわばた 川反19外	05323	40° 1' 57"	140° 27' 38"	19990518 ~ 19990930	11,000m ²		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
桐内B遺跡	散布地	縄文時代	土器埋設遺構	1	縄文土器・石器			
桐内D遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土坑 土器埋設遺構 土器埋設焼土遺構 柱穴様ピット 溝跡（時期不明）	2 14 3 3 2 2	縄文土器・石器 土製品・石製品	縄文時代早期末から晩期にかけての複合遺跡		